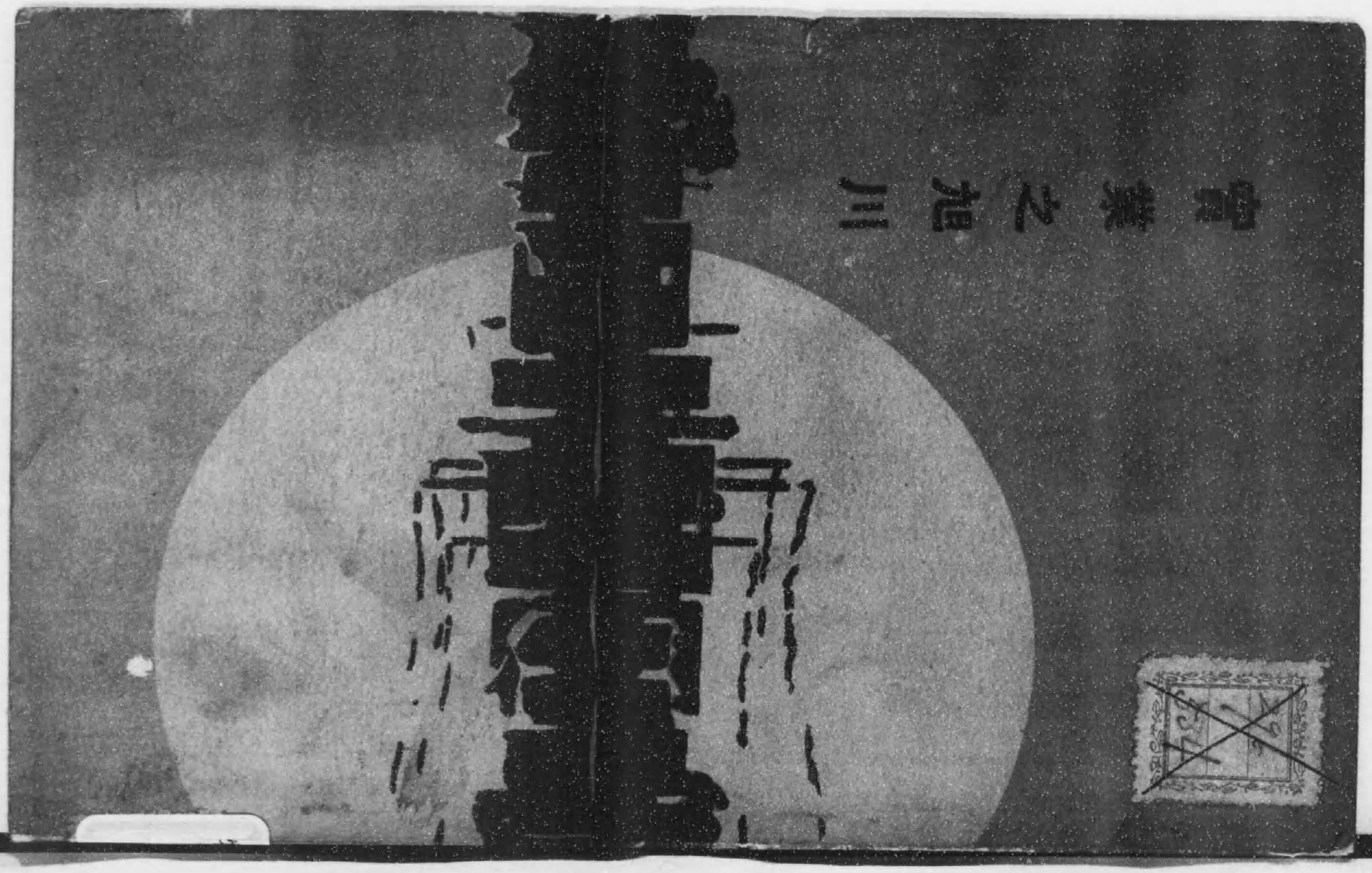
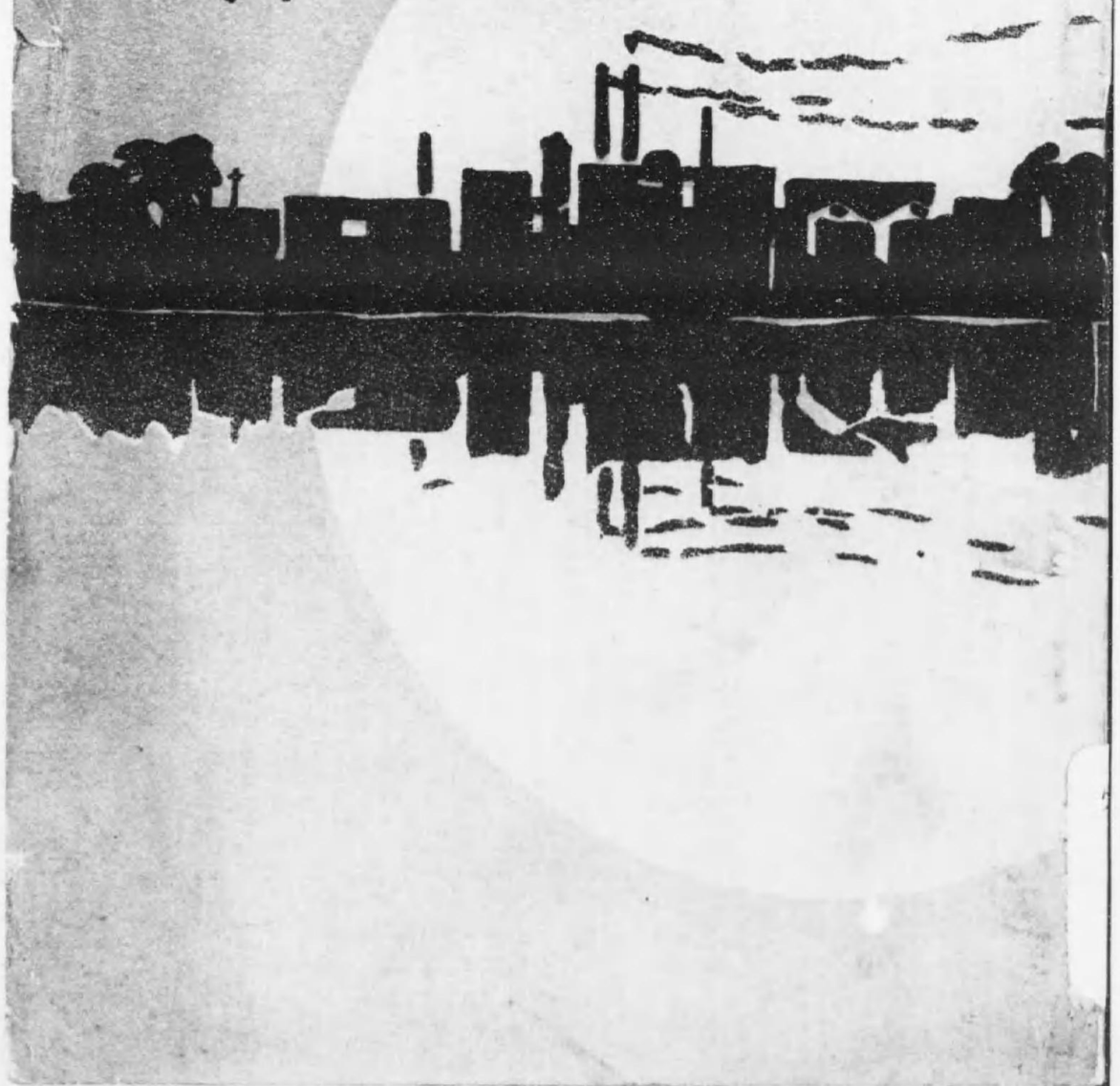

哈密八景三

密

實業之旭川



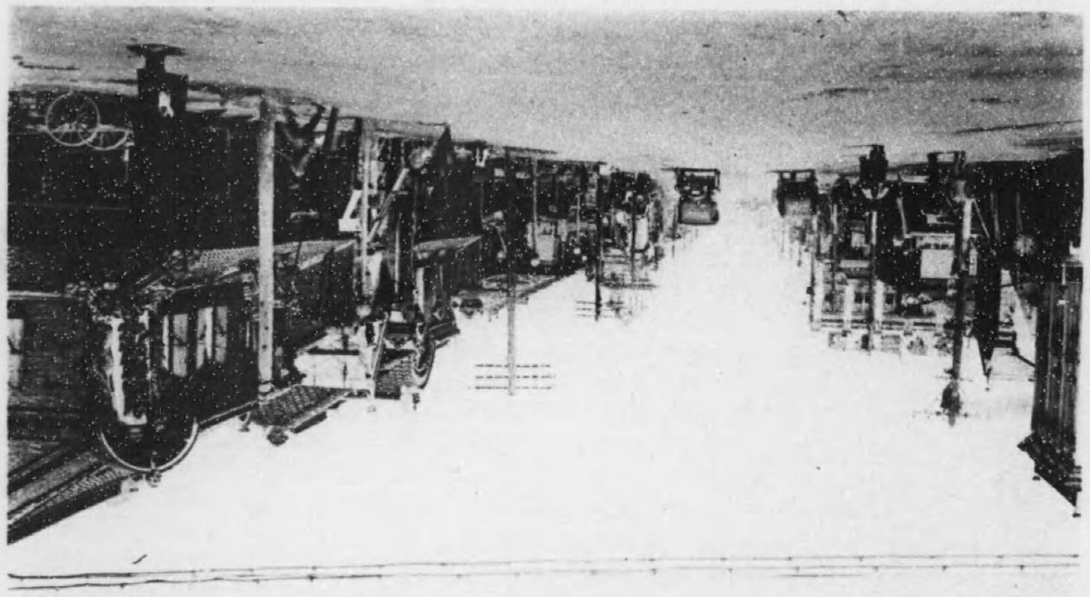
45115
626

序

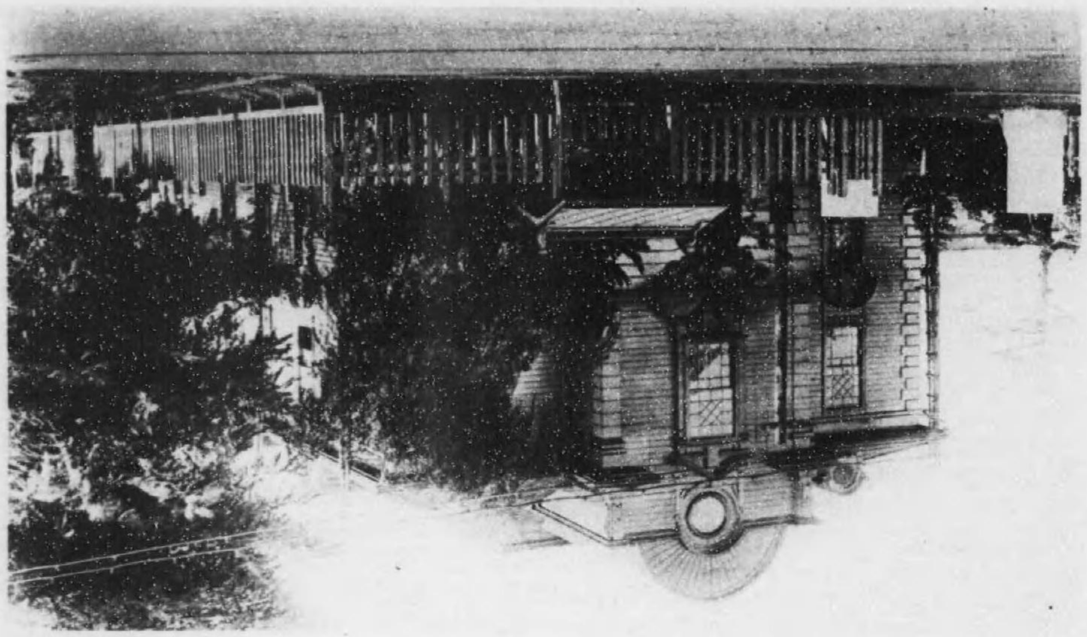
往昔只一望の蒼林にして狐狸の跳梁に委せしの地が春風秋雨僅に三十有餘年にして今日の發展を見るに至つたことは全く奇蹟的で想ふて開發の當初に到れば何人も今昔滄桑の感に勝へないものがあらう而も天惠的地位を占め無盡の寶庫を背景として立てる本市の將來は甚だ多望で產業の振興と相俟つて更に益々大をなすことは疑を容れない點である。

尋ぬに於て過去に於ける本市開發の迹を顧み仔細に現情を考察し以て將來の發展に資するは最も意義あることゝ信じ其の指針たる「實業之旭川」を編纂して汎く江湖に紹介せんとする所以である。

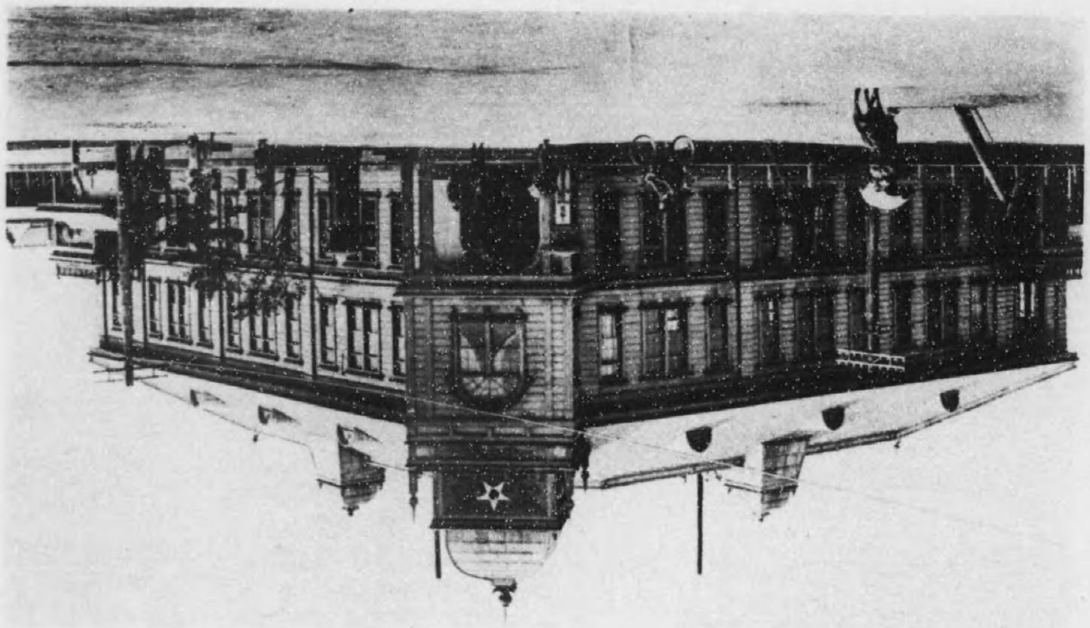
大正
14.11.21
内交



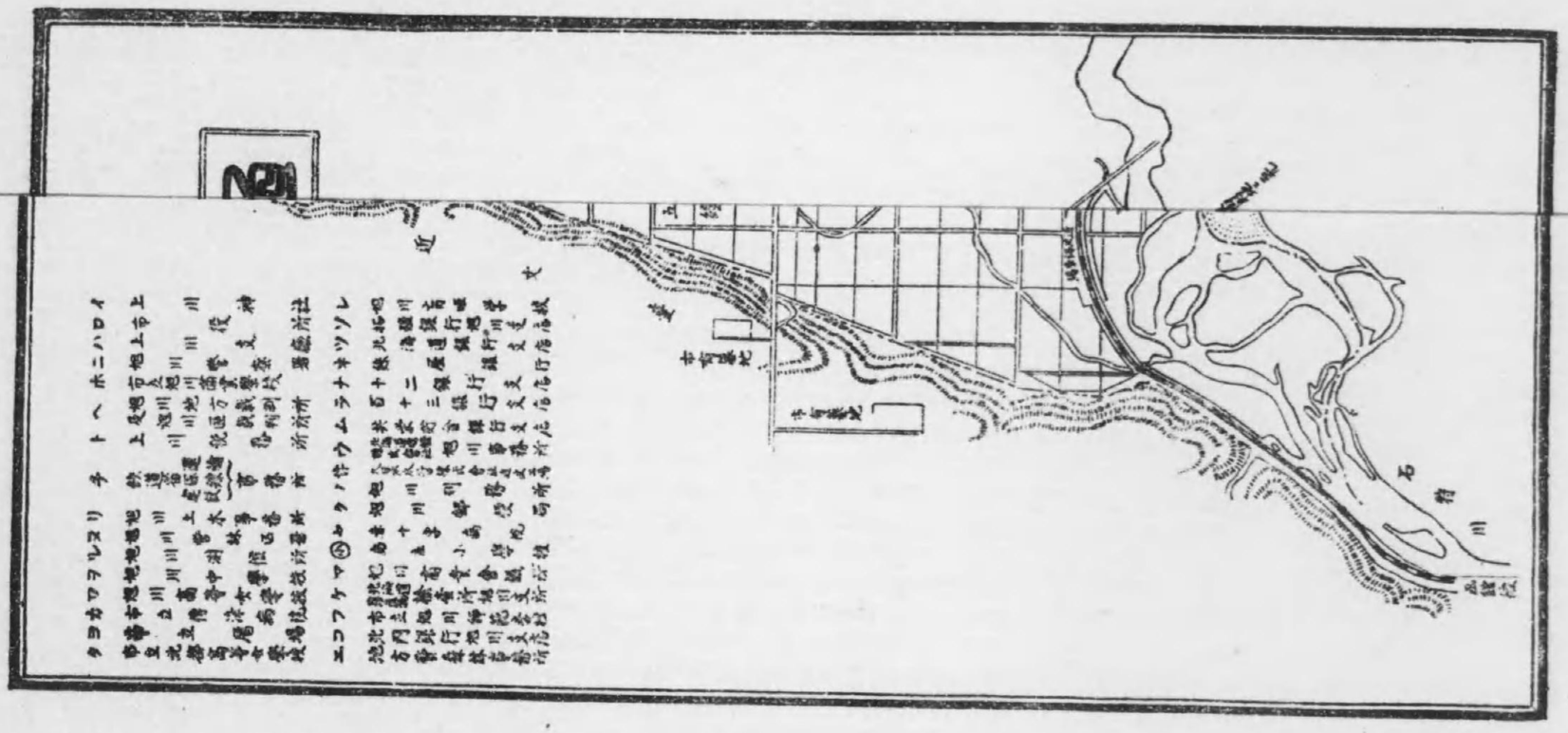
（第一の街車川辺）

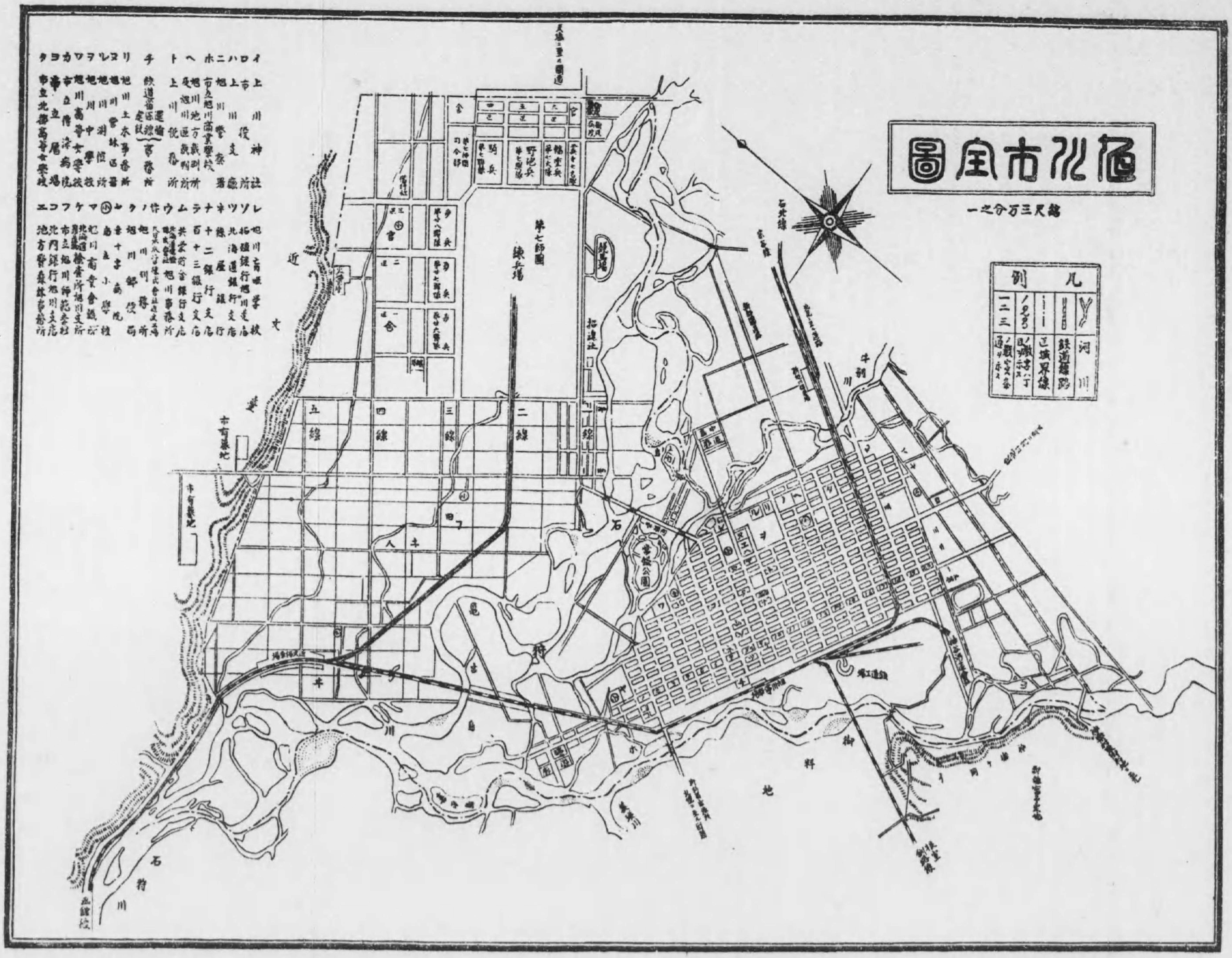


(所藏骨董商川瀬)



（所　役　市　川　通）




旭川市全圖
縮尺三万分之一
イ 上川神社
ロ 市役所
ハ 上川支廳
ニ 旭川警察署
ホ 市立旭川商業學校
旭川地方裁判所
旭川區裁判所
上川税務所
リ 旭川土木事務所
ヌ 旭川營林區署
レ 旭川測候所
ヲ 旭川中學校
ワ 旭川高等女學校
カ 市立傳染病院
ヨ 市立屠場
タ 市立北都高等女學校
ソ 拓殖銀行旭川支店
ツ 北海道銀行旭川支店
ナ 十二銀行支店
ラ 百十三銀行支店
ノ 旭川刑務所
ク 旭川郵便局
第七師團
練兵場
五線
四線
三線
二線
一線
常盤公園
近文
石狩川
牛朱別川
御料地
凡例
河川
鐵道線路

目次

一、開發の道程……一
史的考察……一
開發の濫觸……一
爾後の發展……一
二、天惠的地位と男性的氣象……一
位置と地勢……一
氣象……一
三、異數の發展を語る戸口の推移……一
四、本市を圍繞する美田沃圃……一
附近農村の概況……一
（鷹栖、東旭川、神樂、神居、永山、東川）
米產狀況……一
五、本市の財政……一
六、本鐵道網の中心に立つ旭川竝に交通運輸の現況……一
鐵道の要衝に立つ本市……一

道路……二〇
鐵道……二二
市内の三驛……二三
市内交通機關……二五
橋梁……二七
水運……二七
七、整備せる通信機關……二八
郵便電信……二八
電話……二九
八、動力無限の電氣事業……三〇
過去……三〇
現況……三〇
九、商權範圍廣汎なる本市の商業……三四
商權伸張の道程……三四
殷賑なる實況……三八
貨物集散の狀況……四一
金融と銀行……五三

會社の狀態……六五
倉庫と運送……七八
特色ある市場……八二
物價……八六
旭川商業會議所……九一
商工團體……九九
一〇、資源豐富にして將來ある本市の工業……一〇九
發達の道程……一一二
激增しつゝある工產額……一一七
重要工產品の現況……一二八
（酒精、清酒、味噌、醬油、麵類、菓子、精米、製材、鐵製品、木工品、繩、叺）
主なる工業會社と工場……一四七
勞銀……一四九
一一、本道東北部に於ける文化の中心都市としての教育社會事業其他……一四九
普及せる教育……一五五
新聞雜誌の貢獻……一五八
社寺宗教……一五八

各官公衙……一六三
實績を擧げつゝある火防、衞生……一六七
法曹……一六九
救濟事業……一七三
旅館及料理店……一七四
劇場及娯樂場……一七六
一二、本市及附近に於ける名勝舊蹟……一七七

實業之旭川

一、開發の道程

史的考察　松前藩當時上川地方は石狩領土谷丹下の支配下にあつて別に名稱がなく唯アイヌ族が石狩川の沿岸伊香牛比布近文アサンカラキンクシュベツ及忠別川沿岸に散在して遊牧的の生活を營んで居たものと想像せられてゐる。文化年間（今より約百十五年前）有名な探險者間宮林藏が初めて此地を跋涉したが單に地理上から山野の狀態を觀察したに過ぎない事は其の紀行に依つて明らかである。

蝦夷雜書には文化五年（百三年前）上川居住のアイヌ族が五百二十七人とあつて現今の約二倍に當つてゐるから上川地方は當時アイヌの一都邑であつた事が察知される。

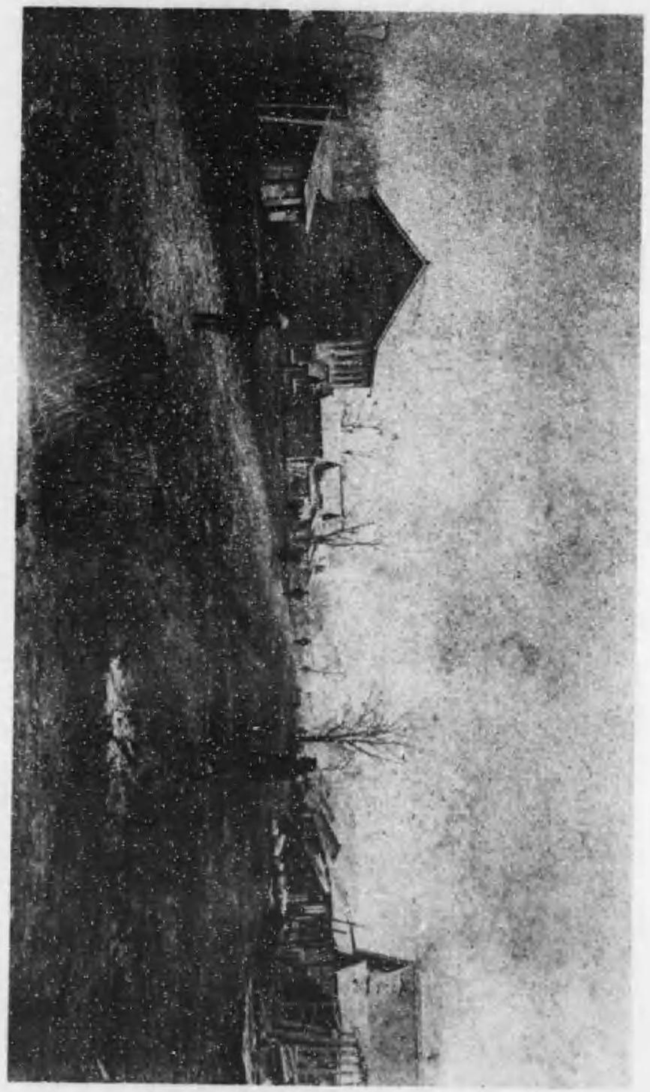
維新前後蝦夷探險の功勞者松浦武四郎が上川地方を具さに踏査してこの地方に上川郡と命名した。土人語の「ベニ、ウングルコタン」川上の人の部落といふ意義である。

明治初年上川地方を往來したものゝ中土人より運上物を徵發する爲に來た石狩場所村上傳太夫（通稱龜石熊五郎）といふ者があり、戸口調査を兼ねて視察に來た石狩の戸長玉川慶吉がある。又土人と交易の爲に來た鈴木龜藏がある。龜藏は明治十年から土人の女を妻として石狩川の中州に居住を定めたが是がこの地方に和人の土着した嚆矢であらう。又同所を今に至る迄龜吉島といふのは土人が龜藏を誤稱したに基くのである。

開拓使廳からは明治二年以來上川地方に測量隊を派遣し爾後數回の實測に依つて略其地勢と地質とを究められて實情が世上に紹介せられたのである。

明治十八年時の司法大輔岩村通俊屯田兵本部長永山武四郎等の一行御用掛福士成豐を案内者として共に丸木舟で石狩川を溯り八日を費して辛じて神居古潭に達し近文山（鷹栖村地内）に攀ぢ登つて上川平野を下瞰するに東西四里南北七里半の大平原にして四圍繞らすに群嶺を以てし天然の大城廓を形成せるを觀察し上川地方開發の大方針を定めたのである。

明治十九年廢縣置廳の際第一次の長官として岩村通俊赴任し上川開發の念禁じ難く其の年直ちに空知郡市來知より忠別太（旭川市の入口神居村に在り）に至る假道二十二里餘（途中神居古潭の嶮路を通ず）を

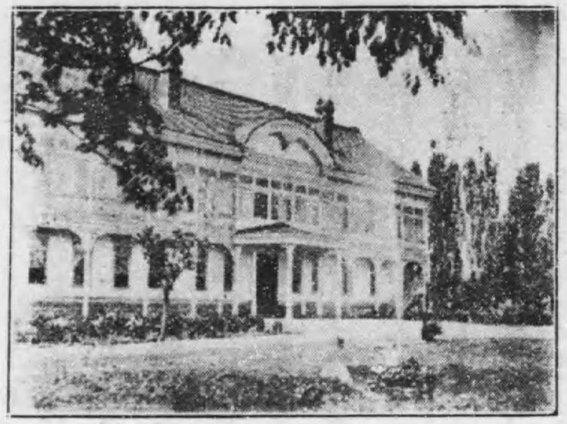


（近附目丁五り通條一現）地心中の市本るけ於に年六十二治明創草

開鑿し其後三年に亙つて改修を行つた。

明治二十一年岩村長官に代つて永山武四郎屯田本部長と長官を兼ね陸軍次官中將桂太郎一行の上川地方を視察し二十二年永山長官巡視し同年より翌年に亙り忠別太より上川原野を貫通し北見網走に達する道路を開鑿し上川地方發展の動機此に胚胎したのである。是より先二十一年永山長官は北都建設の意見を樹てゝ時の内閣總理大臣三條實美に具申して採用せられ二十二年時の内閣總理大臣山縣有朋より「北海道石狩國上川郡の内に於て他日一都府を建て離宮を設けらるゝに付夫々計畫施設すべし」との宣達があつて翌年調査委員を擧げて精査の結果今の神樂村旭岡（神樂岡とも云ひ其の地域は現在上川神社境内となれり）を以て離宮豫定地と確定した。この事一度世上に傳はるに及んで府縣人は勿論本道在住者の心を非常に動かし尋で市街地の貸下各原野の解放等行はれて漸く在住者が增加したのである。明治二十三年九月始めて上川郡に神居村（今は神居神樂美瑛の三村に分る）永山村（今は永山鷹栖比布愛別當麻の五村に分る）旭川村（今は旭川市及東旭川東川の二村に分る）の三個村が置かれた。これが旭川といふ名稱の起原である。旭川は土人語忠別（チュップベツ）から出たもので『チュップ』は太陽『ベツ』は川の義で水源の東方に當つて旭の出づる處の意味である。故に意譯して旭川と稱したものである。

開發の濫觴　二十四年永山村に戸口役場を置いて旭川神居の二村を併せ管する事となり二十六年旭川村（今の市内二條通八丁目）に戸長役場を新設し旭川の外神樂神居鷹栖の三村を所管とした。二十八年旭川村市街地に宮下町、本町、忠別町、中町、寺町川添町等の各字を設け三十年旭川村に上川支廳を置き同年旭川村ウシシュベツ兵村（今の東旭川村）を割き永山村に編入し又忠別原野に東川村を置き三十一年八月空知太（今の滝川）旭川間の鐵道開通して戸口俄に增加し翌年二月鷹栖村字近文に第七師團の位置が確定される事になつて愈々活氣を添へ全く新生面を開くに至つた同年字名を現稱の通り宮下通一條通二條通三條通四條通五條通といふ樣に改めたのである。而して三十三年には町となり三十五年四月鷹栖村字近文六號以南近文臺以東を編入し同時に一級町村制が布かれたのである而して三十六年には廳立上川中學校（現旭川中學校）三十八年には



旭川偕行社

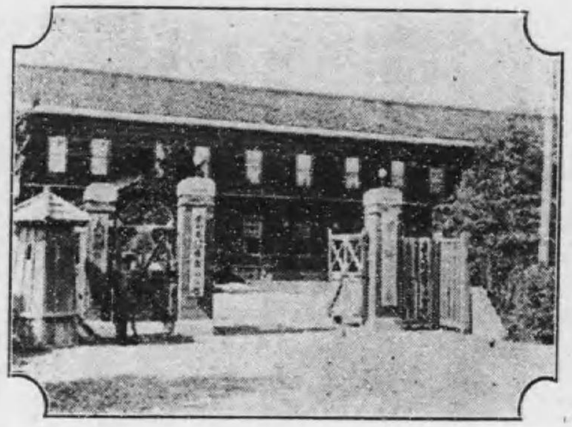
上川高等女學校（現旭川高等女學校）の創設を見玆に中等教育の機關備はり其の他公立各小學校は漸次擴張又は增設され私立女學校又は幼稚園等相續いで開設を見る樣になり又衞生組合の創設火防衞生用水路の掘鑿に道路橋梁の擴築或は銀行會社諸工場の勃興市街家屋の改造等公私の事業が愈々擴張し四十年九月には電話開通翌四十一年二月には私設電燈事業の創立等に依つて急激に都市の體裁を備へる樣になつた。

明治四十二年八月岡部法相後藤遞相大浦農相一木內務次官等相亞で來旭し之と同時に新潟秋田兩縣の知名の實業團の視察があつて爲めに廣く旭川町の現狀を紹介され爾來朝野名士の視察に來る者が益々多くなつて來たのである。

爾後の發展　明治四十四年八月　皇太子殿下（今上陛下）本道行啓の盛事があり道民齊しく歡喜したのであるが此時旭川町も幸にして鶴駕を迎へ奉る事を得數日御滯留の光榮に浴した許りでなく慈善事業資金として多大の恩賜を蒙り又舊土人の爲にも恩賜を添うし町民其の鴻恩を感激せざるものがなかつた。大正二年町立傳染病院竣成し爾來醫師を常置し兼ねて行旅病人の診療舊土人の施療に從事させてゐるのである。

斯の様に旭川は旭日昇天の勢で進み其の戸口竝に富力に於ても益々膨脹して札幌小樽函館の三區に比肩する樣になつたので遂に大正三年四月一日區制を實施せられ旭川町は玆に旭川區となつたのである。

大正四年五月區立女子職業學校を新設し翌五年其の校舍の建築を了へ十年四月更に其の組織を變更して北都高等女學校と改稱され同年八月地方裁判所を旭川區に設置し併せて附屬監獄をも置かれた。又商工業振展劃策の機關として古く明治四十一年實業協會の設立があつたのであるが商工業者多年の冀望である商業會議所の設置も大正七年四月に認可を得て後諸般の手續を了へて八年八月十日認可せられ其後十一年八月諸般の施設成るに及び愈々市制を實施せられ次いで廳立師範學校市立商業學校等の設置あり三十年前の一寒村今や本道中部に於ける大都市として產業上樞要の地位を占め前途益々發展の氣運を示す



第七師團司令部

に至つたのである。

二、天惠的地位と男性的氣象

位置と地勢　旭川市は北緯四十三度四十七分東經百四十二度三十二分即ち北海道の略中央に位して東西一里六間南北一里二十九町四十一間其の面積一方里一二(五百二十一萬九百三十七坪)である。海面上百十三米の高原地帶で地勢平坦沖積層土に屬し地味良好附近は本道主要米產地の上川平原を控へ市の東は上川郡永山村東旭川村東川村に接し西南は忠別川を隔てゝ同郡神居村及神樂村に北は同郡東鷹栖村北西は鷹栖村及江丹別村に境してゐる。

北東方から流れて來た石狩川は市の中央部を貫流してゐる爲め自然市勢は二つに分れた形になつてゐる。尙竝流して來た牛朱別川は市の區域內で石狩川の本流に合し、市の南境を劃して東西に流れて來た忠別川はこれ又市の西南隅に於て本流に合してやがて神居古潭の入口に當る溪谷に落ちて行く。

氣候　位置の關係から旭川の氣候は概して大陸的で溫度は冬と夏との寒暑の差が激しい許りではなく晝夜に於ても相當氣溫の高低がある。旭川測候所の開設以來三十箇年間の一箇月間晝夜平均氣溫は最低攝氏零下八度九分（一月及二月）で最高溫は八月の攝氏二十度二分となつてゐる。

暑氣　五、六月の候日毎に高まつた溫度は七月中旬には二十五度から三十度にも昇る樣になる。七月の下旬から八月の上旬は暑さの强い季節で九月中旬から下旬は最早秋の空模樣となる。既往三十三箇年間の最も强烈であつたのは大正九年七月二十五日の三十五度（華氏九十五度）でそれに次ぐのは大正五年八月七日の三十四度八分（華氏九十四度六分）である。この樣に暑さの度に於ては內地關東地方と伯仲する程であるが暑さの繼續する時間は至つて短くそれに夕景殊に日沒時からは急に溫度が低下して涼味袂を洗ふの快さは到底內地人の味ひ得ない境地である。然し我々の身體に感ずる暑さ寒さは單に溫度の高低のみに依つて定まるものでなく溫度風力日射の有無等に依つて大變な差のあるものであつて旭川の夏季は格別に風弱く時々雷雨の來襲があつて其の都度溫度を增す事があるので暑さは格別强く感ずるのである。兎に角旭川は暑氣に於て北海道の首位を占めてゐる。附近上川平野が全道一の水田地であり所謂旭川米が品質頗る優良で道の內外に聞えてゐるのも一に此の高溫にあるが爲である。

寒氣　旭川の氣候の推移が甚だ急激であるから夏の暑さに引き換へ秋冷早來して又直ちに過ぎ去り十月の下旬には最早冬の狀態となるが稍々嚴しい寒氣を感ずるのは十二月中旬からで先づ例年此の頃には拂曉の寒氣は零下十二度位である。それより日に日に寒さが增して一月下旬となつて稍減退するが三月下旬までは寒さは强いと謂はねばならぬ。一月下旬から二月中旬まで約三十日の間に年中の極寒が現はれるので零下三十何度といふ寒氣も此時節に來るのである。既往三十箇年間に於て最も溫度の低下したのは明治三十五年一月二十五日零下四十一度になつたのが首位を占め明治四十二年一月十三日零下三十九度六分が之れに亞ぐものである。旭川は冬季でも他の地方に比べて著しく風が弱いから風の强い土地に較べては溫度の低い割合に寒氣が幾分緩和される傾きがあり寒烈な日の次にはまた割合に溫暖な日が來てどんな日にも戶外勞働者が休む樣な事はないのである。殊に近年夥しい人口の增加と共に凜烈な寒氣が數日間連續する樣な事は殆んどなく概して緩になつて來た樣であり且又防寒設備が完備してゐるから案外暮し易い所であるとは來住者の齊しく口にするところである。

風、雨、雪、　旭川は廣い上川平野の中にある土地ではあるが四面山脈を以て圍まれてゐるために風る。

は甚だ微弱で北海道中で最も風力の弱い地方に屬してゐる、故に市内でも附近農村でも風の爲に被害を蒙つたといふ例は極めて稀であつて一年中を通じて穏やかな日が多い樣である。又この風の弱い事は前にも述べた通り夏は暑氣を強からしめ冬は寒氣の鋭鋒を殺ぐ助けとなり火災があつても大火とならないのは旭川の惠まれたところと謂はねばならぬ。

降雨は北海道の各地で中庸を得てゐる。寒中でも窄には降雨する事もあるが先づ四月中旬頃から十月下旬までが降雨期で殊に九月十月の頃に雨量の多いのは農業上に障害を及ぼす事があるけれどもそれも大した事はない樣である。

旭川方面は北海道内でも雪の稍々深い方であるが之は地勢と風向の關係から起る事で本州裏日本に雪深く表日本に雪の淺いのと同一關係である。

之れを要するに本市に於ける氣候は全く男性的である寒暑の差は比較的大であるといふものゝ夏は朝夕涼風を呼び冬は日中寒氣和ぎ生活上さして苦痛を感ずる事なく市民の健康はこの事實を物語つてゐるものと謂つてよい。

三、異數の發展を語る戸口の推移

開市僅かに三十五年其の間に於ける本市の發展狀態は他都市の追從を許さぬ程實に目醒しいもので今之れを戸口の推移について調べて見ると其の發達の迹歷然として頗る興味の深いものがある。

維新以前のことは詳でないが蝦夷雜書に依ると文政五年の頃上川地方には五百二十七人の土人が居住してゐたさうだから當時の上川地方は浦河地方と相對持して土人の一部落であつたらうと思はれる。其の後の記錄に依れば土人の人口は明治二年には十三戸百五人同二十年には三十八戸二百二十一人となつてゐて文政五年に比べて明治二年の人口は四百二十二人と云ふ甚しい減少を示してゐる。これは日高天鹽方面に轉住したのと其他疾病に依つて死亡したものが多かつた結果である。其の後漸次增加の傾向を辿り明治二十年の人口は現住土人の數と大した違ひがない。

内地人で上川平原に居を構へたのは明治十年の交鈴木龜藏と云ふ人が土人と貿易の目的で來住したのを以て嚆矢とする。其後此地方開拓の爲め來住するものあり上川原野木立繁く草茫々たる所も漸く茅屋點在するに至つたが當時の戸數は猶纔かに二十戸に足らなかつた。

本市に區劃設定の翌二十四年六月永山村に屯田兵四百戸を移すと共に旭川市街地の貸下を爲した結果新に移住したものは四十九戸二百二十八人の多數にのぼつたのである。爾來本道の將來は內地資本家の注目するところとなり當地方開發を豫想して來住するもの日を逐ふて增加し明治三十年末の戸口は千三百八戸三千六百二十七人を算へるに至つた。

翌三十一年鐵道の開通に次で第七師團の設置となり三十三年には旭川村を改めて旭川町と稱する等本市發展の機運は玆に愈々熱したのである。斯くて翌三十四年末には戸數二千九百四十一戸人口一萬三千三百九十五人に達し三十年末に比べて戸數千六百三十三戸人口九千七百六十八人を增加してゐる。而して此の四箇年間に於ける增加の割合は戸數二十二割六分人口三十六割九分强を示して當時本市膨脹率の如何に偉大であつたかを物語つてゐる。

其の後年々戸數は百分の二乃至五十二（平均一箇年百分の一〇・三）人口は百分の二乃至六十二（平均一箇年百分の一三・四）の割合で增加して行き。大正九年十月一日全國一齊に行つた國勢調査の結果本市の戸口は次の如く全國都市中第三十六位であつた。

戸數　一萬一千三百四十戸

人口　六萬一千三百十九人

內男三萬四千六百三十二人

女二萬六千六百八十七人

其後最近數箇年も順調な增加を示し大正十三年末には戸數一萬二千九百二十六戸人口七萬一千三百二十四人を算へ明治三十年末に比べると戸數に於て九倍八分人口に於て實に十九倍六分の著しい增加であつて僅か三十年前の昔は土人の一部落に過ぎなかつた本市も今や人口七萬餘を有する本邦有數の大都會となつたのである。

四、本市を圍繞する美田沃圃

附近農村の概況　本市附近は最も地味肥沃な上川平野であるから農耕適地も廣汎に亙り上川支廳管內のもの三十四萬町歩を算し內現在水田約四萬餘町歩畑約九萬町歩を開發し尙將來水田二萬町歩造成の見込である。本地方は米產額に於ては常に本道の首位を占め從つて其の開發發展も誠に目醒しいものがある。

今本市に隣接してゐる鷹栖、東鷹栖、東旭川、神楽、神居、永山、東川の七箇村に就いて大略の狀況を示さう。

鷹栖村　本地方に於て最大の地積を有してゐたが餘りに膨大に過ぎる嫌あり加ふるに村政上の必要よりして大正十三年九月本村を分ちて鷹栖村、東鷹栖村及び江丹別村との三村とし面積二十三方里餘であつたのを九・一方里としたのである。人口約九千を有し水田三千八百七町歩餘畑五百二十二町歩で地味肥沃農産物の産出も巨額に上つてゐる。同村は南方にある近文臺を境として本市に接してゐる。

東鷹栖村　前述の通り鷹栖村より分村して生れたものであつて面積五・三方里、内水田二千五百七十九町歩、畑二百町歩餘で田は總面積の約五割を占めてゐる。

東旭川村　本市の東南方に於て境を接し總面積九・一方里總反別一萬四千一百五十二町歩 内田四千九百八十六町歩畑一千八百十町歩で總面積に比し田は三割畑は一割五分を占めてゐる。現在石北線の開通に依り旭川市より同村に至る鐵路の便開かれ人口總べて一萬三千人を算し農村として見ら

（部一の田水村川旭東）

れぬ程の殷賑を極めてゐる。

神樂村　本市の南方に當り忠別川を境として接續してゐる。此の村の大部分は御料地として宮內省管理の下に在り總面積一七・八方里で總反別二萬七千六百八十二町歩の大地積を占め內水田二千八百四十八町歩畑七百町歩戶數一千百九十餘戶人口約一萬一千人を有してゐる。

神居村　西方美瑛川を隔てゝ本市に接してゐる。總面積一七・八方里を有し內水田一萬餘町歩畑六百餘町歩古い歷史を有する村で產業組合四を有し人口は割合に少いけれども何となく落付きのある村である。

永山村　同村は旭川地方開發の鼻祖であつて明治二十四年屯田兵二個中隊（四百戶）の移住を嚆矢とし時の屯田兵司令官永山將軍自ら其姓に因んで永山村と稱したのに始るのである。其後逐次人口增加し大正十三年度末の戶數一千六百七十六戶人口一萬二百五十二人を算するに至つた。總面積二・三方里總反別三千五百七十六町歩內水田二千三百餘町歩で總反別の大部を占めてゐる。東方の牛朱別川を隔てゝ本市に接してゐる。

東川村　旭川市の東南方に當る。總面積一五・五方里總反別二萬四千一百五町歩　内二千九百三十三町歩は水田一千二百八十一町歩の畑地を有し人家點在して七千の人口を有する割合には市街地と稱するものが少ないが地味肥沃所謂旭川米の優良なものゝ産地の一として知られてゐる。

米産狀況　尙右七箇村の大正十三年度米産狀況を示せば次の如くである。

村名	作付反別	收穫高	價格	一反歩收穫高
鷹栖村	三、八〇七、八反	五八、八八一石	一、九九〇、八七四円	一、五四六合
東鷹栖村	二、五七九、八	三九、八七〇	一、三九八、九三五	一、五四五
東旭川村	四、八一五、〇	七九、四四八	二、八七一、八四四	一、六五〇
神樂村	二、八四八、三	四五、四三〇	一、六七二、一九四	一、五九五
神居村	一、〇六一、八	一六、九一五	六二二、三四五	一、五九三
永山村	一、八四〇、一	三一、一七六	一、一二四、二〇七	一、六八九
東川村	二、八六一、四	四四、二三七	一、四二三、六二四	一、五四六
計	一九、八一四、二	三一五、九五七	一一、一〇四、〇二三	一、五九四

五、本市の財政

旭川市が近時北海道東北部文化の中心地として産業に教育に長足の進歩發展を來したのは他に其の例を見ないところである之れに伴つて市の財政は年を逐ふて著しく膨脹し區制施行當初（大正四年）僅か十五萬六千餘圓であつたのが大正十二年度に於ては實に百餘萬圓を超ゆるに至つたのである。勿論土木費教育寄附金支出額等臨時支出のものもあるが要するに世運の進歩に伴つて諸般の設備も新しくする必要があり勢ひ膨大を來したのは止むを得ないところであり一面都市の發展を物語るものであるが現下最も財界不況の時期に遭遇してゐるのみならず政府に於ても財政整理を行ひ專ら緊縮方針を執れる秋に際し本市に於ても鑑みる所あり最近數箇年の豫算額は著しく縮少し本年度（大正十四年）に於ける豫算は八十五萬六千一百七十四圓を示してゐる。更に最近五箇年間の歳入歳出を示せば次の如くである。

	大正十四年度（豫算）	大正十三年度（豫算）	大正十二年度	大正十一年度	大正十年度
歳入	八五六、一七四円	八七一、五九〇円	一、一一三、三〇一円	八四九、三三八円	八一六、七〇一円

歳出	八五六、一七四	八七一、五九〇	一、〇五六、三六七	七九七、九〇七	七六八、四〇四

次に本市の町制以來住民市(町區)税の負擔額について見るに日露戰爭の年が最少額であつて一人負擔額九十八錢八厘を示し其後發展に伴ふ財政の膨脹も亦激甚であるが而し負擔率は大體に於て順調に漸進し大正六年頃迄は一圓二十錢より一圓九十錢以内を彷徨してゐた。然るに大正七年よりは二圓五十四錢三厘と增し翌八年度には三圓四十二錢二厘と進み同九年度には一躍六圓二厘を示し同十年度には五圓八十三錢七厘と減じ同十一年度には七圓七錢九厘と躍進し更に同十二年度に至りては七圓五十五錢六厘と其の增額を示してゐる。尤も大正二年度の一圓五十錢六厘は物價の關係上大正十、十一、十二年頃の五圓五十錢乃至六圓位に該當するから數字上のみよりして一概に負擔の輕重を云々する譯にはゆかぬ。大正十四年度の豫算によつて見れば平均一人の負擔額六圓十三錢一厘となつてゐて今後都市計畫の實現に努めねばならぬから市税は當分此邊を上下するは免れない事であらう。

茲に特記すべき事は本市に於ける市有財産である。卽ち土地丈でも五百六十九町五反七畝餘歩を有してゐて之れを時價に換算すれば實に四百六十七萬一千五百餘圓の多きに達してゐる。その中收入ある基本財産は貸地に屬するもののみで百二十餘町歩であつて尙進んで恰當施爲の下に此の基本財産を有利に處理活用するとせば少なからざる財源の基礎を得るものと信ずるのである。兎に角本市の基本財産がかくまで其の大を致した過去の歴史を追想する時に於て歴代の理事者、總代人及議員諸氏の苦心努力の程が偲ばるゝのである。

六、本道鐵道網の中心に立つ旭川

竝に交通運輸の現況

鐵道の要衝に立つ本市　交通機關の整備は商工業の發展上最も喫緊な事項である。本市は幸ひ本道の中央に位し交通上極めて要衝の地に當り鐵道は四通八達し道路橋梁亦完備して交通の便頗る大である。

本邦縱貫鐵道幹線たる函館本線は本道の門戸函館港に發し小樽札幌を經岩見澤で室蘭線と合して本市に屆き途中深川より岐れて西海岸の要港留萌增毛に通じ更に本市にて宗谷線に連結して長く北に延び本道の最北端稚内港に達し途中名寄より分岐して北見の寶庫を貫き中湧別に至り更に野付牛網走に

連絡してゐる。南方富良野線は下富良野で根室本線と合し帶廣池田を經て釧路根室に達してゐる。更に東方本道最中央部を横斷すべき石北線は新旭川驛より分岐して上川驛迄通じてゐる。

敍上の如く本市は本道中部交通の要衝で現在旭川驛に於ける列車の發著は旅客及混合列車四十七回其他貨物列車二十一回合計六十八回の多きを算へ交通頗る頻繁を加へてゐるが飜つて過去三十年の昔に遡る時は其變遷發達の甚しいのにたゞ驚くの外はない。

道路　本市に初めて道路の通じたのは實に明治十九年で同年三縣を廢止して北海道廳を置くと共に空知郡市來知から忠別太(旭川市の入口神居村)迄假道二十二里十四町を開鑿したこれが本市に於ける交通の發端である次で二十二年より二十三年に忠別太より更に進んで本市を横切り伊香牛(愛別村)を經て網走に達する道路五十七里餘を開鑿し本道横斷の道路

建設・運輸・保線事務所

が完成されたが之に依つて旭川は獨り地理上の中心地たるのみならず將來行政上將亦商工業上の中樞地點たらしむる端緒を開いたのである。

現在本市を通る國道地方費道は左の通りである。

國道　神樂村界忠別橋より一條通に出で右折七八丁目間より左折して四條通に至る此延長二十一町五十間

地方費道　四條通八丁目より師團道路を通りて鷹栖村界に至る延長一里十町二十間

一條通八丁目より旭川驛に至る延長一町二十間

四條通八丁目より十八、九丁目に出で左折して永山村界境橋に至る延長二十一町四十間

此合計延長一里三十四町二十間

準地方費道　四條通十九丁目から東旭川村界に至る此延長五町四十間

其他市内を縱横する市道は延長十八里三十四町二十八間五分に及び幅員五間乃至十五間で整然たるものである。

尙附近農村に通ずる道路の主なるものは左の通りで路廣く平垣で人馬織るが如く往來し般賑を極め

てゐる。

札幌街道　忠別橋より神樂村に出で美瑛川を渉り神居村を經て札幌に至るもの

技幸街道　師團道路より鷹栖村を横斷し名寄を經て技幸稚内に至るもの

美瑛道路　忠別橋より神樂村に出で左折して邊別美瑛を經て富良野に至り更に帶廣釧路に連續するもの

永山道路　境橋より永山に出で更に愛別を經て網走根室に至るもの

東旭川道路　四條通十九丁目より東旭川當廠に通ずるもの

鐵道　明治二十八年官設鐵道敷設の件が帝國議會の議に上つた此時本道殖民鐵道の計畫を爲しこの通過を阻止するものがあつたが旭川村民は之を聞いて大に憤慨し若し鐵道敷設の議成らずんば荷を經めて再び内地故郷に歸らんのみと上京委員を派し百方之が通過に努めた結果幾多曲折の後漸く其通過を見るに至つた。斯くて二十九年工を起し三十一年七月十六日を以て瀧川旭川間三十五哩の鐵道は漸く開通したのである。此建設費は一百十七萬八千三百三十一圓を要したと云ふ。

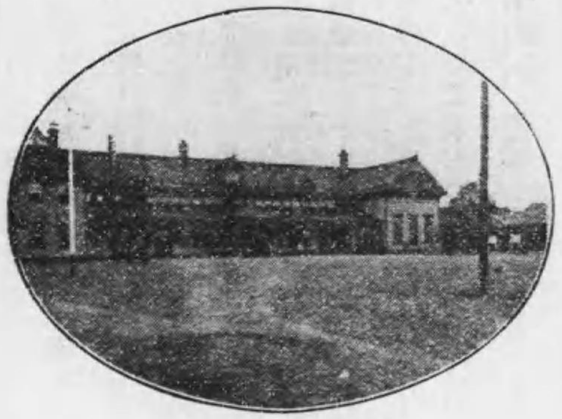
當時市來知旭川間の道路は其破損甚しく馬車の交通頗る不便を極め米一石の駄送に二圓五十錢を費したと云ふ如きは既に一場の夢と化し旭川住民の歡喜は其絶頂に達したのである。而して旭川の天地は茲に於て全く新生面を開き發展の機運を益々熟せしめたのである。其後歳月を追ふて鐵道は四方に延長し道路橋梁の修理開鑿は愈々進んだ、斯くして附近農村の發達と交通機關の整備とは相俟つて本市に於ける貨物の集散を一層敏活ならしめ本市の商事的勢力は年一年と擴大するに至つたのである。

而して宗谷全線の開通は本道と樺太との距離を頗る短縮し加ふるに樺太大泊港及本斗港と稚内間に各連絡船の開航成るに及び茲に彼我交通上に一大革命を來したのである。尙旭遠線（石北線）は上川より更に延びて本道の眞中央を横斷し遠く北見遠輕に通ぜんとしてゐるが同線の完成は本道の寶庫と稱せられ千古斧鉞の大森林其他豐饒なる物資を藏する同地方の發展を刺戟し之等の物産は本市商人の手を經て一般市場に紹介せられるだらう。更に天鹽線は幌延より天鹽沿岸を通つて宗谷稚内に連絡すべく斯て本市の交通上地位は愈々向上し商工業の勢力は彌々旺盛ならんとしてゐる。

市内の三驛　本市に於ける停車場は旭川驛近文驛及び新旭川驛の三驛である。旭川驛は本市の最繁華地師團道路の正面に在り規模頗る宏大で現狀次の通りである。

旭川驛構内敷地總坪數　二十五萬八千百五十七坪六二五

同　建物總坪數	一萬四千百七十四坪三三七
停車場	四千二百五十六坪一七九
廳舍及倉庫	二千六百六十五坪二七二
工場	三千三百六十七坪七六四
官舍	三千三百九十六坪一二二
合宿所	四百九十坪



旭川驛

近文驛は市の西端に在り明治四十四年一月の開業にしてアイヌ部落近く附近に福村工業所（前大日本木管株式會社）の工場がある。同驛より第七師團練兵場に至る鷹栖線が分岐してゐる。

新旭川驛は市の東端牛朱別に在る大正十二年十一月四日の開業で石北線の分岐點である。驛は頗る瀟洒な建築で遠く大雪山を眺め附近に新設の木工場が多い。

次に最近五箇年間の旭川近文新旭川三驛に於ける旅客出入數小荷物發著數を掲げ參考に資さう

旅客乘降數　大正十一年以前は旭川近文二驛を示せり。

種別	九年	十年	十一年	十二年	十三年
乘車人員	六九〇、九〇六人	六三九、六三一人	六六二、二八〇人	七九七、七五〇人	九一一、八三八人
降車人員	六七〇、二四〇	六三四、九一〇	六四五、七八九	七九四、九二九	八〇四、五六九
收入運賃	七五六、四二七円	六八一、一六三円	六七九、二〇八円	七三〇、一九〇円	七七八、五七〇円

小荷物發著數　大正十一年以前は旭川近文二驛を示せり。

種別	九年	十年	十一年	十二年	十三年
發送個數	一〇七、〇九一箇	九一、三〇八箇	八九、一九一箇	一一五、一一五箇	一二七、二一六箇
到著個數	九八、三〇一	七八、七五四	七六、二二〇	一〇四、六三二	九九、〇五七

市内交通機關　市内の交通機關としては乘合馬車人力車最も多く百數十臺あり。其の他自動車數十臺あつて垣々たる街路を疾驅してゐる當市は冬季積雪が多い爲め電車の設備困難で屢々有志の間に之が計畫を爲すものがあるが容易に其實現を見ることが出來ないのは甚だ遺憾である。以前は旭川驛前

から師團道路を通り第七師團練兵場を一週する馬車鐵道があつたが大正六年同馬鐵道會社解散と共に其の影を失つた。爾來交通は馬車人力車に依るの他なかつたが大正十一年區會決議を以て豫算二十萬圓を計上し軌道自動車を敷設する計畫を樹てたが關東震災の起るや一般官廳の事業縮少により市の計畫も豫定の通りの實施を見ずに終つたが昨年市會の決議に依り二萬圓の豫算を計上して自動車を十臺購入し交通整理を圖る目的と乘合自動車營業を助成する爲め自動車會社に三箇年無償貸與し自動車に對する地方稅額は之れを會社より市へ提供する事に決議し、昨大正十三年八月十日より運轉を開始し旭川驛と第七師團司令部との間竝に一條及四條を一丁目より十八丁目まで走つて市民の便に資してゐる。尙最近本市より鷹栖村、東川村、神樂村雨紛へ乘合自動車が定期に通つてゐる。

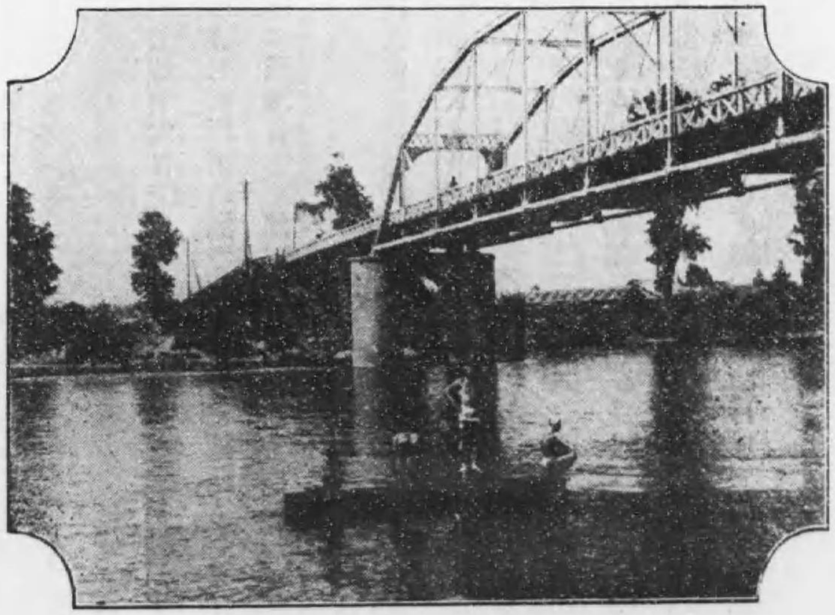
新旭川驛

橋梁　石狩川、忠別川、牛朱別川の諸流が本市を貫流してゐるので從つて橋梁の數は可成り多く五十からに及ぶ。其主なるもの次の如し。

旭橋　常盤橋　忠別橋　相生橋　永隆橋
日の出橋　大正橋　新旭橋　秋月橋　新橋

水運　當初は前述の如く河流が多いけれども皆上流で河床淺く流急で水運の利便は極めて薄い唯附近の小流が木材の流送に利用される位に過ぎない。渡船場は左の二箇所である。

石狩川渡船場　曙通より近文停車場に通ずる道路を連絡す
同　新師團道路より師團方面に通ずる道路を連絡す



旭橋

七、整備せる通信機關

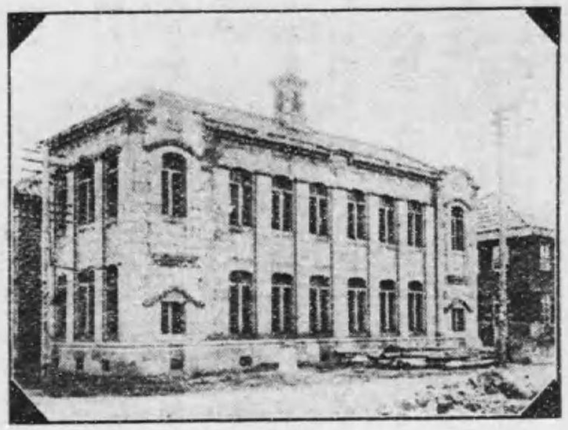
本市に初めて郵便局が設けられたのは明治二十六年十二月十六日で三等郵便電信局を二條通二丁目に置き諸種の通信事務を開始したのである。當時の本市は未だ草創の際で住民も少く通信も極めて微々たるものであつたが爾來逐年其の發達に伴ひ諸種通信の激增甚しく旭川局は明治三十四年に二等局に四十三年には一等局に昇進した。

現在市内に在る三等郵便局數は九で其の中電信取扱局三電話通話所一である。電話は明治四十年十一月一日を以て開通し現在加入者數千六百三十を算へ自動電話七箇所を備へてゐる。

郵便電信　通信事務の繁閑は其の市發展狀態のバロメーターである。本市に於ける通信事務は明治二十七年には通常郵便集配數十四萬五千六通電報發著數八千四百九十二通といふ少數であつたが其の後鐵道の開通となり師團の設置決定せらるゝに及んで急激なる增加を示してゐる。即ち明治三十三年には通常郵便物集配數百三十三萬七千九百二十三通小包郵便物一萬六千八百七十八個電報七萬二千三百七十一通を算し各前年に比し約倍數に當り明治二十七年に比すれば通常郵便物に於て約九倍三分

電報に於て約八倍五分の增加である。翌三十四年も前年に比しまた倍數の增加を示してゐる。是等の數字は當時の本市發展の情勢を極めて明瞭に物語つてゐるではないか。而して大正十三年中各種取扱高を明治二十七年(小包は二十九年)のそれに比較すると次の樣な增加率を示してゐる。

通常郵便物	百二十二倍强
小包　同	二百二十倍强
電報	七十五倍强



旭川電話交換局

電話　本市に於ける電話開通當時の加入者は僅かに四百十七名で交換機も單式であつたが大正六年より複式交換機を採用し現在では加入者數千六百三十名に達してゐる。現在一日の呼數二萬八千數十回接續數二萬四千回に達し加入者一回線の平均一日呼數十七回二分に上る。市外の通話先は百七十四箇所にして殆んど道内各地と通話する事が出來る。最近一

日の平均市外通話數は千四百五十に達する樣な狀態で市の發展と共に日を逐ふて盛況に赴いてゐる。

八、動力無限の電氣事業

過去　本市電氣事業の起原は明治三十九年久保誠之氏等が發起人となり資本金十萬圓を以て旭川電燈株式會社を創立し明治四十年二月から火力發電で市内に供給したのが初めである。爾後燈用及工業用動力需要の增加に伴ひ明治四十五年に資本金を五十萬圓に增資し旭川電氣株式會社と改稱して事業の擴張を行ひ大正二年一月に忠別川發電所の完成と共に水力發電に變更した。更に大正三年には瀧川町に大正五年には深川町に營業所を新設し同地方に電力の普及を圖り鋭意事業の發展に盡瘁したが大正六年二月富士製紙株式會社と合併し其後は專ら同社の經營に依つた。

現在　現在は同社の分身たる北海道電燈株式會社の經營にして其發電力一萬三千六百十三キロワットに達し市内の電燈取付數六萬八千燈工業用電力二千百餘馬力に及んでゐる。其他市内には自家用電氣を發電してゐる向も一二あるがこれは未だ微々たるものである。本市は石狩川を始め是が支流たる忠別、牛別の諸川貫流するところ其の上流には幾多の細流あり水力頗る豐富で其の設備如何に依つて

本社　東京市京橋區三十間堀一丁目二番地

北海道電燈株式會社

假事務所　東京市麴町區永楽町二丁目一番地　大川田中事務所内

旭川事務所　旭川市四條通七丁目

釧路事務所　釧路市眞砂町

帶廣事務所　帶廣町東三條九丁目

野付牛事務所　野付牛町五條通西二丁目

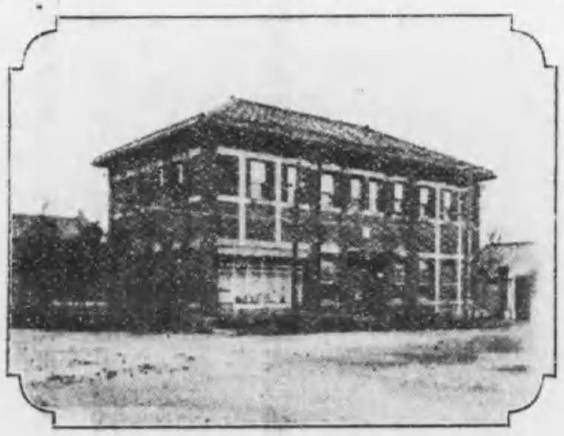
E通E
國内通運株式會社
本社
東京市麹町區永楽町一ノ一
郵船ビルヂング四階
旭川市宮下通七丁目左十号
(旭川驛前)
旭川支店
支店長 岩間忠三郎
電話 局 一、〇二三五番
一、〇二二〇番
一、一三一〇番
近海郵船株式會社取次店
大北火災海上運送保險株式會社代理店

は無限の動力を得らるる境地に在る。而も電力の普及を急務とする趨勢から見て本市將來の電氣事業は蓋し刮目して見るべきであらう。左に北海道電燈株式會社の沿革現狀を記し本市電氣事業の概要を示さう。

北海道電燈株式會社旭川事務所

大正六年二月前記旭川電氣株式會社と合併した富士製紙株式會社は大正八年十月資本金一千五百五十萬圓の富士電氣株式會社を分離創立し本社は東京に置き本市地方は旭川出張所の支配となつた。

大正九年五月士別電氣株式會社と合併し士別町に營業所を設け同年九月美唄電氣株式會社と合併更に同年十一月北海水力電氣株式會社を合併し名寄町に營業所を設置し士別の營業所を散宿所となした。超えて大正十年十一月には富良野電氣株式會社を買收し富良野に派出所を置いた



北海道電燈株式會社旭川事務所

斯くて會社の業務は逐年隆昌に赴き同年十二月には社名を北海道電燈株式會社と改稱し翌年八月には深川營業所を派出所と變更した。

更に同社は大正九年十二月北海道電氣株式會社を同十年三月十勝水力電氣株式會社及北日本株式會社を合併し現在資本金は二千百八十八萬五千圓である、而して旭川釧路帶廣野付牛に各事務所を置き道内五箇國に亙り二市五十六箇町村に電燈電力の供給を爲してゐる。

現在旭川事務所管内は營業所二箇所派出所二箇所散宿所三十六箇所を有してゐる。

最近の同社旭川事務所管内の發電所は左の五箇所であつて、變電所及び營業所の概要は次の通りである。

一、發電所

イ、野花南發電所　空知郡芦別村上芦別

發電力　五千一百キロワット

ロ、奔茂尻發電所　空知郡芦別村字奔茂尻御料地内

發電力　二千六百キロワット

ハ、忠別川發電所　上川郡東川村東六號

發電力　千三百キロワット

ニ、愛別發電所　愛別村アンタロマ十八線

發電力　五千百キロワット

ホ、仁宇布川發電所　上川郡美深村字ニウプ四線東十一號

發電力　五百十三キロワット

二、變電所

旭川一條變電所。名寄變電所。砂川變電所。士別變電所。瀧川變電所。江別變電所

三、送配電線路亙長

一、送電線路亙長　二百五十五哩

二、配電線路亙長　三百八哩

四、電燈及電力使用者數

旭川事務所に於ける電燈需要家數は本年五月末に於て一萬六千八百四十四戸總燈數六萬七千六百五

十九個であつて電力需要者數五百六十七戸電力數二千百七十三馬力市の發展に伴ひ日に增し增加の形勢を示してゐる。

九、商權範圍廣汎なる本市の商業

商權伸張の道程　現今本市の商圏範圍は北は遠く宗谷稚内に東は根室網走方面一帶に及び本道東北部の六箇國に亙る大地域を占め更に海を距つて樺太島とは最近開始の稚泊連絡稚斗連絡に依り其取引日を逐ふて激增の有樣である。而して本道東北部一帶の重要物產たる林產農產物の如きは汎く日本全國に其手を伸ばし商業頗る旺盛活潑であるが飜つて既往三十年の昔に遡るとき草分時代の本市が如何に幼稚であつたか而して開市以來今日に至る短日月の間に如何に急激なる發展を遂げ今日の隆昌を來すに至つたか其變遷發達の迹は蓋し思ひ半に過ぎるものがあらう。本市商業の起源とも云ふべきは實に明治十年の交に始つてゐる。此年鈴木龜藏と云ふ(當時上川原野に於ける最初の內地人永住者)石狩川の急流に丸木舟を浮べて遡ること數日有名な神居古潭の難所を越え漸くにして上川盆地に入り現今の龜吉島の地を選んで上陸し同所に堀立小屋を建て往時から此地方に住むアイヌ人と初めて物々交換の

貿易を營んだのである、是れが本市否當上川地方一帶に於ける商業の濫觴である。

當時我國の大勢は明治維新の大業成り世界の文明駸々乎として流入し經濟事情は漸く複雜ならんとしつゝある時代であつたにも拘らず我旭川市は未だ樹木鬱蒼荊棘茫る原野で內地人の居住者只一人而も前述の如く無智のアイヌ人對手に極めて幼稚な物々交換の交易を爲してゐたに過ぎなかつたのである又以て當時の本市が如何に未開草昧の地であつたか容易に窺ひ知ることが出來よう。

爾來星移り歲變ること十有餘年本道開拓の方針漸く定まり上川原野には明治二十四年より二十六年に亙り永山東旭川當麻の三箇村に屯田兵各四百戸を置くことになつた。斯くて明治二十三年頃より之等建築の爲め職工人夫の入込むもの數百人に及び樹木を伐り笹藪を薙いで大工小屋木挽小屋等が諸所に立てられ丁斧の響丁々として千古未開の原野も漸く開拓の曙光を認めるに至つたのである。玆に於て前記鈴木氏は今の曙通、當時の忠別太に米穀雜貨の店舗を開いて大工人夫其他移住者の需要に應じた。是れ本市店舗營業の嚆矢である。

斯くて屯田兵の移住と共に明治二十四年旭川市街地の貸下が行はれ爾來本道拓殖の進展に伴ひ當地方の開發は特に顯著なるものがあり本市の商業は自ら繁榮し上川平原の物資は皆本市商人の手に委せ

られるに至つたのである。

超えて明治三十一年には住民の多年要望せる鐵道開通し翌年第七師團の設置決定となり其工を起すに及んで本市街の景氣は一躍活氣を呈し商工業亦全く其勢を一新し愈々將來の隆昌を告ぐべき基礎を作るに至つたのである。

由來本市は地理上頗る優勝の地歩を占めてゐる而して地味豐饒な上川平原は年々其開發著しく加ふるに鐵道は爾來本市を中心として四方に延長して行つた結果本市に集散する貨物は年々增加し本市の商權は彌々旺盛の域に近づいた。

明治三十七年以降の財界は日露戰役の影響を受け景氣頗る振興し本市亦諸般の企業勃興して商業は頓に發展を告げた斯くて四十年に入りてより經濟界は頗る不況に陷り悲觀說を唱ふる向も尠くなかつたが新進の本市は諸種の點に於て直ちに其勢力を盛り返し益々順調の歩調を以て發達したのである。

此の間に於て交通の機關は愈々發達し其他各種の經濟機關益々整備して本市は愈々本道中部東半部に其商權を振ふに至つたのである。

大正三年歐洲戰亂の突發は其當初に於ては種々なる惡影響を及ぼしたが時日の推移と共に新生面開

かれ大正五年以降吾國の經濟界は未曾有の盛況を呈した。

本市亦澱粉青豌豆其他雜穀木材等の海外輸出に依つて頗る殷賑を極め一般商工業は驚くべき膨脹を告げ其好況發展は底止する所を知らざる有樣であつたが歐洲戰亂終熄後大正九年上半期に至り財界の反動は俄然一大恐慌の襲ふ所となり本道物產の海外輸出又杜絕し金融は梗塞する等本市の商工業も亦一時不振の已むなきに立ち至つた殊に好況時代其膨脹の大なりしだけ農產木材業者の打擊は尠くなかつたが。絕えて已まざる勢を以て進展せんとする本市は大正十年來よりの財界の安定と共に直ちに此不況を切拔けて益々發展の趨勢にあるのである。

今や開拓の先驅たる鐵道は本市を中心として殆ど本道の津々浦々に至る迄延長し本市をして交通上の一大要衝たるに至らしめ各沿線の豐富なる物產は一に本市商人の手に依つて集散せられつゝあるのである當市商業の隆榮は蓋し當然の歸結であらう。

其昔荒唐無稽の地であつた上川平原も今や開拓の效全く成り米產額全道第一にして實に八十萬石に垂んとし其他上川管內の物產四千五拾七萬圓に達してゐる而して北見宗谷は本道の寶庫と稱せられ十勝の大平原と共に物資無盡藏である。翻つて本市は最近の工產額二千二百萬圓に達し貨物の移出入鐵

道に依るものゝみにても四十二萬噸を算してゐる而して市民多年の要望なりし商業會議所は大正八年其設立を見、斯くて本道第一の商港小樽と竝んで商權の覇を唱へん事も近き將來の事實であらう。

殷賑なる實況　交通機關の發達に伴ひ本市の經濟上に及ぼせる影響は既述せる如くなるが今や本道中部は勿論遠く樺太に迄商權を擴張して逐日その實力を廣く認められんとするの秋、誰か本市商工業の將來に思ひ及ぼさないものあらうか、開市當初からの商業發達の情勢は前節に於て大略記述せるが尚最近の狀況を國稅營業稅賦課標準額に依つて見るに大正十三年度に於ては國稅營業稅を納めるもの物品販賣業者に於て二千二百九十八名あつて之れを大正三年の五百五十三名に比すれば千七百四十五名の激增で實に三十三割の增加率を示してゐる。かく短期間に於ける夥しい增加の趨勢は本市進展の跡を十分窺ひ得ると同時に本市の將來は如何に盛を致し賑を極むるかを想像する事が出來やう。

今國稅營業稅を納める市內商工業者の中前述の物品販賣業者の外に尙主なるもの二三を擧ぐれば次の如くである。

金錢貸付業　新開地の事とて此の種の業を營むもの逐年增加し大正六年に於て三十一名なりしも大正十三年に至りて一百名を算し現在その貸付範圍は市內は勿論廣く附近農村に涉りその投下の方

針も主として各己の利得よりも寧ろ市商工業の發展の爲めに且又附近農村の開發の爲めに力を注いでゐるやうで近時一般經濟界の恐慌に際しても他市に比して案外落付のあるのは主としてこの精神に基くものであらうと思はれる。

運送業　交通機關の整備と商取引の殷盛とは共に運送上に圓滑多忙を來し運送業を營む者も大正六年度に於てはその數僅かに十一名であつたが大正十三年度に於ては實に六十五名を算するに至り各店共相當に繁昌してゐるのに徵しても現在の本市商業狀況の一端が窺はれる。

請負業　本市の開發に伴ひ土木建築盛んとなり商權の擴張と共に益々その規模を擴大するに至つた結果斯種營業も漸次多忙となり營業者の數も大正六年に一百七十四名であつたが大正十三年には四百十七名に達し而もその營業の範圍は市內のみに止らず本道中部以東の實權を掌握して本道に於ても有數な當業者が其數尠くない狀態である。

製造業　本市は周圍に本道隨一の米產地を擁し尙雜穀類竝に木材の本道中部に於ける集散地なれば精米は勿論之れに加工して酒類の釀造盛んに製材も亦隆盛を極め是等製品は道內は勿論樺太、本州地方の市場に於ても相當その聲價を認められてゐる狀態である。されば本市に於ける製造業は實

に本市の生命とも云ふを得べく地の利と惠まれたる沃地を控へた本市の前途や益々多忙なりと云ひ得る事が出來やう。大正十三年に於ける市内製造業者の數は三百三十四名を算する、右の外仲立業問屋業、料理店業、飲食店業等も數字的に觀察すれば何れも著しき增加を示し本市の經濟組織の上に於て金融に關する施設竝に商品轉輾の機關及企業百般の源泉等皆整備して玆に活氣あり底力あり伸張力ある一大商業都市を形造りつゝあるのである。

今市内商工業者の業態別統計を示せば次の通りである。

業態別	明治四十四年	大正六年	大正七年	大正九年	大正十年	大正十一年	大正十二年	大正十三年
物品販賣業	一、一三〇	一、五七六	一、七一〇	一、九一六	二、一九五	二、一〇二	二、二九八	一〇〇
金錢貸付業	一七	三一	三〇	五八	五九	六六	四〇	四〇
質屋業	一四	三一	二九	三三	三三	三四	三八	四〇
運送業	一九	二一	九	一九	九二	七一	七一	六五
請負業	四七	一七四	一七八	二五八	三六六	三四六	三八一	四一七
旅人宿業	五〇	一〇四	一〇二	一〇〇	一〇八	一六〇	一〇五	一〇八
代辨業	五	一三	一一	一一	一一	一二	一〇	九
仲立業	一三	二七	三三	七四	七六	六三	四二	四三
製造業	一〇八	四三五	四三八	三八五	三六五	三六四	三四二	三三四
問屋業	—	一三	二四	二六	二八	二六	二三	二五
銀行業	四	七	七	七	七	七	八	八
料理店業	四六	六九	七〇	七五	九五	八二	七七	七八
飲食店業	八五	一三四	一一九	一一五	一三〇	一四四	一四五	一五五
其他	一九〇	三一一	三四〇	三四〇	三八〇	三一八	三八六	二六二
合計	一、七二七	二、九四四	三、一〇〇	三、二五五	三、九五五	三、七五一	三、八〇四	三、九六二

貨物集散の狀況　商權の伸張に伴ひ本市に於ける集散貨物も又近時著しく激增を示してゐる今最近に於ける貨物移出入狀況を見るに大正九年度の發送は八萬九千百二十一噸で翌十年度は前年より二萬六千六百十一噸の增加を見尙十一年度は前年に比較して更に二萬五千四百九十六噸の激增を示して

る。而して十二年度は實に十二萬二百六十八噸を移出し十三年度は前年に對比して一萬七千七百三十一噸の增加で其の數十三萬七千九百十九噸に達してゐる。

移出貨物の增加に伴つて本市に移入するものも又激增を示し大正九年度以降の移入數量を見ると次の通りである。

大正九年	一五五、九五六噸	大正十年	二二四、六六八噸
大正十一年	二五六、〇九八噸	大正十二年	二六〇、六〇一噸
大正十三年	二七三、八七六噸		

尙大正十三年中の主要商品の集散狀況を品種別に示すと左の如しである。

米穀類　本道隨一の米產地と稱せらるゝ上川支廳管內に於ける米の實收高は大正十三年に於て六十四萬一千六百八十一石で其價格二千二百九萬八千二百五十八圓に達してゐる、これを前年に比較すると收穫に於ては八萬九千百二石價格に於ては七百五十萬六百六十六圓の激增を示してゐる。其の殆と全部は本市に集注せらるゝのであるが尙其上膽振河西根室網走各支廳管內よりも多量の移入を見てゐる。而して是等集注せられし米は本市精米工場に於て搗精の上更に各地方に輸送せらるゝ狀態であるが、就中樺太行米は前年に比し二萬一千二百九十三石の激增を算してゐる、最近三箇年間本市に於て集散せられたる米、麥類、燕麥、大豆、豆類、雜穀等の數量を見るに左表の如き盛況である。

	到著				發送			
	近付出廻	驛著	計		玄米	白米	計	
大正十一年	三三五、二四五石	四六、七一四石	三七一、九六八石		四四、四三一石	一五五、二八七石	一九九、七一八石	
大正十二年	二七七、〇八三	九七、九二〇	三七五、〇〇三		四〇、五五二	一五二、八七〇	一九三、四二三	
大正十三年	二七二、一四三	一二四、六七四	三九六、八一六		三九、四一〇	二一七、五七六	二五六、九八六	

	移入						移出					
	麥類	燕麥	大豆	豆類	雜穀		麥類	燕麥	大豆	豆類	雜穀	
大正十一年	一、四九〇噸	三、八九二噸	七一四噸	七、四一六噸	一、八三七噸		二九九噸	五四〇噸	六三六噸	三三噸	五〇八噸	
大正十二年	一、五九七	六、〇二七	一、七〇四	四、九〇七	一、〇九二		二三六	二四一	六四九	一五一	一、一九〇	
大正十三年	一、二八〇	七、一一九	一、八一五	二、〇四八	八八五		二四三	七四三	一二四	三、一四七	七二六	

果實類　本市で集散される柑橘類は其の數年々增加し移入に於ける大正十三年中の千四百十一噸は大正九年中の六百七十一噸の二倍に當つてゐる移出に於ける大正十三年中の二百七十六噸は大正九年中の百九十五噸に比較すると約一・四倍の增加である。其の他果實は林檎が其の主なものであつて、道內からは余市江部乙等より移入し內地は靑森縣より多量の移入を見てゐる其他の果實は全く內地よりの移入で其の數少くない。

	移入		移出	
	柑橘	其他果實類	柑橘	其他果實
大正十一年	一、二八九噸	一、六三四噸	二六六噸	二五一噸
大正十二年	一、一一〇	一、五六三	—	三二八
大正十三年	一、四一一	一、六七二	二七六	二八〇

蔬菜類　本市に移入される生甘藷は殆と市內に於て消費し發送は極めて小量で移入の僅か二割餘に過ぎない、蔬菜は附近村落に於ける米に亞ぐ重要產物で其の生產高は逐年增加を示し現に市內の需要を充して尙本道東北部並に樺太方面に供給して居る狀態である。

	移入					移出				
	生甘藷	生馬鈴薯	玉葱	生野菜		生野菜	生甘藷	玉葱	生野菜	
大正十一年	一、〇八三噸	一三七噸	九六噸	一、〇八四噸		一六三噸	—	一〇六噸	一、二三九噸	
大正十二年	一、二三三	九七	二〇八	九六一		二七二	—	一一五	一、二一四	
大正十三年	一、一五六	一三〇	二一二	一、三〇五		三〇〇	三一	一二三	三、一九九	

海產物　魚類の本市に移入される數量は年を逐ふて增加を示し大正十三年中の移入數量は十九萬四千五百八十七箱で是を大正九年中の十四萬九千八百九十四箱に比較すると二割九分の激增である。今大正十一年以降の魚類海藻類の移出入數量を揚げると左表の通りである。

	移入			移出		
	鮮魚	鹽干魚	干魚	鮮魚	鹽干魚	
大正十一年	一一八、三二〇箱		四五、三一八箱	二一、二七〇箱		七、八一二箱

大正十二年	一三八、九八〇	四五、五〇七	一四、七二〇
大正十三年	一三五、二二〇	五九、三六七	二四、〇八〇

食鹽砂糖類　食鹽は移入の約五分を移出し其の他は市内で全く消費されてゐる砂糖は殆と他地方から移入し一部は更に之を本道中部以東の地に供給してゐる狀態で其の數量は左表の如く多量に上つてゐる。

	移入		移出	
	食鹽	砂糖	食鹽	砂糖
大正十一年	二、二六二噸	三、一七四噸	二三四噸	一、三二一噸
大正十二年	二、四三六	三、三二四	一四二	一、〇三九
大正十三年	二、五九〇	四、八六九	二四〇	一、三七一

穀粉類　製菓高の激增に伴つて其原料である小麥粉は著しく消費されつゝあるが故に本市に移入される其の數も年々多量に上つてゐる。尙他地方に發送せられるものは極めて僅少である澱粉は好況時

代の大正七八年以來本市の移出入は逐年減少され、大正十三年の移出高四百五十三噸は大正九年の二千四百八十九噸に比較するに實に五分の一に當る激減である。

	移入		移出	
	小麥粉	澱粉	小麥粉	澱粉
大正十一年	二、一八六噸	一九一噸	一一一噸	七七七噸
大正十二年	二、四二一	三四五	一三五	五六一
大正十三年	三、三二七	六一	二一六	四五三

釀造品　本市の重要物產である淸酒は近來品質優秀な點を一般に認められ各地の需要は頓に增加してゐる有樣である從つて其の釀造高も逐年著しい增加を見、現今では本道第一位を占めてゐる、麥酒は生產地である札幌及門司、橫濱、神戸、大阪、東京より移入せられつゝあるが內約二割五分は他地方に供給してゐる、味噌の生產高も年々增加し昨年度は實に四十一萬六千七百四十五貫で其の價格は二十八萬三千三百八十七圓に達してゐるこれを全道釀造高に比較するに其約一割五分に當つてゐる醬

油の醸造高は本道第二位を占め其の産額は大正十三年度に一萬三千九百八十一石で價格は七十八萬七千八百八十四圓の多きに上つてゐる。これを全道醸造高に比較すると約一割六分でこれが移出は各方面に亙つて味噌と共に本道中部以東の地は殆と及ばない所はない。

是等の本市醸造品は其の産額逐年盛況を極め内地移入品の年々減少を見つゝあるのは本市醸造工業の隆昌を意味するものであらう。

	移入				移出			
	清酒	麥酒	味噌醬油		清酒	麥酒	味噌醬油	
大正十一年	一、四〇六噸	一、二九一噸	一、六〇九噸		七、七〇六噸	二九九噸	三、三三〇噸	
大正十二年	一、六〇三	一、三〇六	二、〇六三		六、六七二	三二六	二、六〇六	
大正十三年	一、九三四	一、九一八	二、二六四		七、七二二	四〇二	四、一四九	

吳服太物類　これ等は專ら内地よりの移入で他地方への移出は價格の關係上小樽、札幌等に壓倒せられてゐるかの感があつて尙分振の狀態である其の移出入數量は次の如くである。

	大正十三年		大正十二年		大正十一年	
	移入	移出	移入	移出	移入	移出
綿織物	五四二噸	一一一噸	八五七噸	七〇噸	一、〇九四噸	二四九噸
絹織物	二六	二三	一四	二八	二〇	五
毛織物	六	—	五六	八	一二八	九
綿	三三〇	六九	三四四	四	四三七	二一
綿絲	一二一	—	五八	一	九九	一五

日用雜貨類　日用品雜貨類は主として京濱及阪神地方に仰いでゐる狀態である、本市よりは更に是等の商品を主として本道東北部に發送してゐる。

	大正十三年		大正十二年		大正十一年	
	移入	移出	移入	移出	移入	移出
煙草	二〇七噸	一五噸	一七八噸	二噸	一四四噸	九噸
和紙	二七九	一〇七	一八九	一四一	二七二	一〇九

洋紙	五二二	一	四〇〇	二五	三〇二	二
壁表	二六三	九三	三〇八	二五	三一七	一四
漆器	一九五	二	六五	一	一〇四	—
硝子製品及其他	八六四	九三三	一、〇一一	六九一	一、四四九	五九八
陶磁器及土器	一、二六三	四一五	二、五一二	三九七	一、九四一	三七四
麻製品	八三	—	一一一	—	一〇三	三九
燐寸	一一八	一	一〇七	—	一〇四	三
鋼鐵製品及	二、五三九	一、一一四	一、七二六	九八二	二、五六九	六二六

肥料　農村の發展に伴つて肥料の需要も多量に上り從つて其の移入も近年又著しい增加を見てゐる是等は殆と本市近村に供給せられ尙宗谷網走線各驛に發送せられつゝある狀態である。

	移入					移出				
	人造肥料	大豆粕	魚肥	其他肥料		人造肥料	大豆粕	魚肥	其他肥料	
大正十一年	一、九四三噸	三八九噸	一、四三三噸	八三四噸		六三八噸	三三噸	五〇八噸	二、四四五噸	
大正十二年	一、九四五	八三六	六、三一九	八八九		六四九	一五一	一、一九〇	二、一四五	
大正十三年	二、一六八	一、〇〇七	六、六二六	三三五		七一八	一〇五	二、〇三三	三、六四〇	

木材類　帝都の震災後復興資料として大正十二年末より十三年の上半期間は多量の木材を移出してゐたので、當時本市の本材界は未曾有の盛況を呈してゐた爲に原木の供給に不足を生じて居た程であつたが各地方より帝都に集注せらるゝもの頓に多額となり却て供給に過剩を生じたので其の取引上一頓挫を來した。需給上に於て最も緊密なる關係を有する地方の斯る變調に依つて近來市場は至極閑散を極め好況時に比すれば約七割八分の減少を示し尙其の移出入は不振の狀態で推移してゐる。

種別	大正十三年				大正十二年				大正十一年			
	移入		移出		移入		移出		移入		移出	
角丸太材	四六、九五三噸		六、一七九噸		四四、六〇二噸		二、二三八噸		四一、二九七噸		三、〇七七噸	
挽材	三、一三六		八、七二二		二、三〇七		九、七八四		三、七七八		五、五九六	
下駄棒	二六九		一、四四六		九〇		一、六九三		二七九		一、八〇二	
枕木	五六三		一二三		一、九四八		六七三		二、六七〇		一、六〇一	

薪炭　燃料として專ら需要せられた薪木炭も原木の缺乏に伴つて著しく價格の騰貴を示したので其の需要は漸次減少を見つゝあつたがこの代用品として價格の低廉な石炭の使用が逐年增加を示し、大正十年中に二萬四千八百〇五噸の移入を見、翌十一年中は前年に比し五千〇七十八噸の增加で十二年は三萬三千二百三十噸の多きを示し翌十三年は前年より四千五百六十五噸の激增を見てゐる。

	移入				移出			
	木炭	薪	石炭	骸炭	木炭	薪	石炭	骸炭
大正十一年	二〇、九五五噸	二、七二〇噸	二九、八八三噸	四〇六噸	一六六噸	六〇五噸	二、九二三噸	二三噸
大正十二年	二一、八七三	一九、五〇一	三三、二三〇	七一八	一七五	四八八	一、三〇三	一六
大正十三年	二一、九〇三	二三、一一九	三七、七九五	六八六	二九九	三七五	一、四九八	二五

其他の貨物　本市の藥工業の發展に伴つて藥工品の移入數量は逐年減少を示しつゝあるが尙之を他地方より移入するの止むなき狀態である今後本市の藥工業の進展に伴つて移入數量は皆無となることゝ思ふ、尙石材は殆ど移出數量の見るべきものはない砂利は石材と反比例で移入は絶無であるセメントの移出入數量は亦多量の數に上つてゐる。

	大正十三年		大正十二年		大正十一年	
	移入	移出	移入	移出	移入	移出
藥工品	一、九九五噸	三、三八四噸	一、九八九噸	二、七六四噸	二、二八七噸	三、三一八噸
石材	三、四二三	三六	七、〇六七	七七	四、九四三	八五
砂利	二、七八三	一、二三一	一、九八九	八、四六九	二、二八七	一一、九二二
鑛物	三、二〇二	六七	一、六一〇	九〇	一、四〇四	九一
鐵及鋼	三、四三八	一、四七三	三、二七八	一、五三九	四、六〇三	四、〇一四
機械類	六四七	六六七	三八八	三二九	三四九	五三六
セメント	七、四三八	五、二〇六	一、九六八	七、三〇〇	九、八八九	五、二九二
石灰	五四	一三六	一二四	四三	—	五八

金融と銀行　本市に初めて金融機關の設置せられたのは明治三十四年九月である、其以前に於ける本道の經濟狀況は明治二十八年戰役の終結に依り頗る好調を示し諸企業勃興し內地資本家の本造に囑目するもの續出し又企業者の來住逐日增加する有樣で資本の需要頓に喚起した玆に於て銀行の增設及

資本の增加相次で起り官廳亦工を起して鐵道に港灣に道路に意を注ぎ本道の事業界は漸く有望多事となつた。明治三十二年末に於ける本道の狀況は人口九十萬耕地二十萬町歩生產物三千四百萬圓內外貿易額七千五百萬圓で當時の旭川は未だ草創の際に屬し開拓微々たるものであつたが、明治三十一年鐵道の開通に次で師團の設置となり、此地方の開發を豫想して蝟集し來るもの日々增加するに至つた然るに未だ經濟機關の備はざる爲め地方の發展を阻害すること甚しい狀態であつた、之を遺憾として兵庫縣下に本店を有する絲屋銀行主山本新助氏が時の札幌拓殖銀行頭取會根靜夫氏に計り其熱心なる贊助を得て三十四年九月旭川に銀行營業所を新設するに至つた是れ本市に於ける銀行業の濫觴である。當時の旭川地方は金融の不便と高利貸の跋扈に苦しめられて居た時であつたから同行の設立は官民共に之を嬉び其後本市は資金の疎通行はれ金利低落し本市經濟界發展の爲め利すること大であつた當時の營業狀況は主に土地貸出で是等は除々に札幌拓殖銀行の放資を招致するに力め土地金融を圓滑にし尙農產物を擔保として農產金融の途を開き地方開發に努めた越えて札幌貯蓄銀行（北海道貯蓄銀行の前身）本市に支店を設けたが日露戰役の影響は本市商工業を一層隆昌ならしめ企業資本の需要益々增加した玆に於て明治三十八年北海道拓殖銀行の支店營三十九年北海道銀行の支店相續いて設立せられ本市の金融は愈々增大したが同戰役後の投機熱勃興も四十年に入つて一二の反動を生じ經濟界は俄然大恐慌を來した本市の金融界亦此影響を受くること尠からず、遂に北海道貯蓄銀行は休業するの已むなきに至り四十二年七月拓殖貯蓄銀行と改め整理に著手することになつたが其他は皆健實なる進步をなした、更に大正元年に至り十二銀行百十三銀行前後して本市に支店を開き現在普通銀行六店貯蓄銀行二店計八店を算するに至り大正十三年末に於ける預金殘高一千二百五十九萬二千八百八十五圓、貸出殘高一千五十九萬四千五百六十三圓、手形取組取立高は總計七千九百九十萬一千四百五十九圓の夥しい數字を示し、之を往年に比較すれば隔世の感があるのである、斯くて本市は本道東半部に於ける金融の中心市場と化し天鹽北見其他地方の開發に資する點は尠くないのである。

大正十年十月本市に開催せられた全道銀行業大會は本市金融の現狀より日本銀行支店の設置を必要となして之を當路に要望し旭川商業會議所も亦之を認め本道東北部に商權を掌握する本市に於て該地方開發上日本銀行支店の設置は最も喫緊の事なりとし總會の決議を以て當路に建議したが時機尙早の故を以てか保留の狀態にあつたのを本年四月十五、六日當市に開催せられた第五回北海道商業會議所聯合會に於て當市現狀に鑑み緊要の事なりとし滿場一致を以て議決し當路に建議要望したのである。

事實本市の現狀は最近日本銀行支店を設けられた廣島松江秋田熊本地方に比し毫も遜色がないのみならず本道東北部の開發上本市の活動は忽にすることが出來ない從つて本問題は不日實現するに至るであらう。現在市內銀行は次の八行である。

普通銀行　株式會社　絲屋銀行
同　北海道拓殖銀行旭川支店
同　北海道銀行旭川支店
同　北門銀行旭川支店
同　十二銀行旭川支店
同　百十三銀行旭川支店
貯蓄銀行　同　共榮貯金銀行旭川支店
同　北門貯蓄銀行旭川支店

本市に初めて銀行の設けられた明治三十三年末に於ける預金高は一萬四千七十七圓貸出高七萬八千二百七圓金銀有高は四千八百六十三圓であつたが三十六年には預金に於て約十倍貸出約二倍半に增加し三十九年に至つては一躍預金七十七萬五千百九十八圓貸出八十四萬十七圓に達し前年の二倍乃至三倍之を三十三年末に比較する時は豫金に於て五十五倍貸出約十一倍の增加に當る之は前述の如く日露戰役に依る好況の結果に他ならない、爾後年々此數字は大なる割合で增加し來り大正六、七年に於て更に甚しい膨脹を示した、歐洲戰亂の終熄は諸種の事業に大痛棒を加へ財界頗る不況となり銀行業者亦警戒を加へ貸出を手控へたが浸々として已むことなく進步しつゝある本市は毫も資本の需要を減ぜず金融は些も頽廢の痕が見えない依然として預金貸出共增加の傾向を示してゐる。

今大正十三年末の是等の數字をそれ〴〵比較して見るに驚くべき增加率である。

明治三十三年末に比し（預金　八百九十四倍强　貸出　百三十五倍弱）

旭川手形交換所

金融上最も重要機關たる手形交換所の設立は夙に當業者に依り唱へられて居たが大正八年十月に至り漸く其實現を見同九年一月二十八日其筋の認可を受け之を北海道拓殖銀行旭川支店內に置き現在加入銀行數は六で旭川郵便局は客分として籍を置いて居る。

大正十三年下半期に於ける一箇月の平均交換高は七千百二十二枚、三百五十七萬五千三百七十九圓である、左に大正十二、十三年中の交換成績を示さう。

手形交換高

年次	枚數	交換高
大正十二年	六四、八九九枚	二九、九三五、二五三円
大正十三年	七六、一〇〇	三六、九四三、六二五

手形交換高中郵便爲替交換高

年次	枚數	交換高
大正十二年	一五、二八九枚	五五六、三五七円
大正十三年	一七、八九四	六一六、六八〇

不渡手形

旭川手形交換所に於ける大正十年中の不渡手形は合計十枚三千三百二圓で成績頗る良好であつたが打ち續く財界の不況に依つてその數を著しく增加し大正十二年中の不渡手形六十九枚三萬五千九十三圓大正十三年は九十六枚三萬一千三百四十六圓に上つてゐる。

旭川組合銀行

北海道拓殖銀行旭川支店内に在つて營業上の利害經濟上の諸問題の講究に努めてゐる。現在加盟銀行は前記の普通銀行六店で設置以來金融上に寄與した點は少くない。

尙左に各銀行について概要を述べよう。

株式會社絲屋銀行

現在本市に本店を有する唯一の銀行である事は前述の如くであるが明治三十四年絲屋銀行支店を當市に移して以來時勢の進歩に伴ひ業務は更に進展し山本新助氏物故し現頭取息菊藏氏營業の衝に當るに及び益々金融の便を圖り其の基礎愈々鞏固となり樞要の地に支店出張所を設け旭川を中心として牢固拔くべからざる地盤を形成し益々地方銀行の特色を發揮しつゝあつたが、時勢の進展は在來の營業方法を踏襲するを許さず大正八年一月遂に其の組織を株式會社に更め資本金を增加し本店を

旭川市に移し其の營業を擴張し一層堅實な方針を採り現在支店及出張所を十五箇所に設け何れも優良な成績を擧げ益々隆運に向ひつゝあるのである。

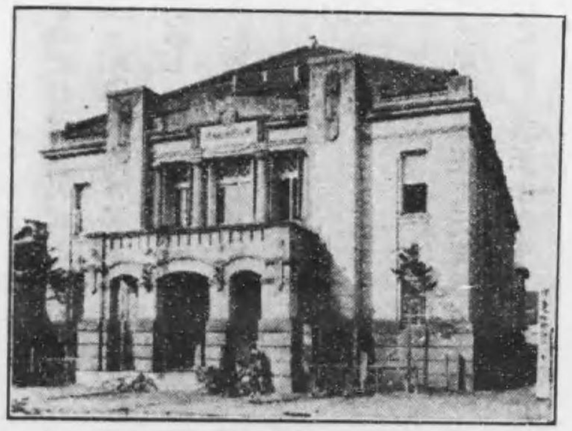
現在同行は一般銀行業務の外北海道拓殖銀行日本勸業銀行代理事務を取扱つてゐて現在の役員は次の通りである。

頭取山本菊藏。專務取締役井口爲二郎。常務取締役山本玉紀。取締役米道彌太郎。同竹野政造。監査役佐坂俊次。同石原三郎。同山本清吉。

株式會社絲屋銀行

株式會社北海道拓殖銀行旭川支店。

北海道拓殖銀行は明治三十二年法律第七十六號北海道拓殖銀行法に基き同三十三年二月札幌に創立せられたもので其の目的は主として北海道及樺太の拓殖事業に資本を供給するにあつて拓殖債券を發行し得る特典を有してゐる。旭川支店は明治三十八年十月三十一日一條通十一丁目左十號で開業したが大正元年現在の二條通八丁目に宏大なる石造の營業所を新築移轉するに至つたのである。同行本店の資本金は二千萬圓で大正十三年末債券發行殘高は一億七百六十四萬一千六百八十圓を示し。旭川支店に於ける年末年賦償還貸付高は年に一千百萬圓以上に達し地方開發促進上貢獻するところ甚大なるものがある。日本勸業銀行代理店事務をも取扱ひ現在支店長は黃金井解三氏である。



北海道拓殖銀行旭川支店

株式會社北海道銀行旭川支店。

本店を小樽市に置く同行の前身は明治二十七年三月余市の漁業家に依り資本金拾萬圓を以て設立せられた余市銀行で三十九年五月北海道商業銀行と合併同時に資本金を七十五萬圓とし株式會社北海道銀行と改稱するに至つたのである。現在資本金二百萬圓で道内に支店派出所三十四箇所を設けてゐる。旭川支店は明治三十九年五月一日三條通十二丁目に於て開業し一般銀行業務の外國庫金公債事務宮内省金庫の現金出納事務及北海道金庫事務を取扱つて今日に及んで居る。現營業所の一條通八丁目には明治四十年十月に移轉し昨年末新築落成したのであつて現在支店長は太田一夫氏である。

株式會社北門銀行旭川支店。

本店は札幌に在り現在資本金五十萬圓總預金額千三百餘萬圓頭取は長友比佐吉氏で旭川支店は最初一條通八丁目に置いたが明治四十二年北海道拓殖銀行旭川支店内に移し大正十年十二月五日現在の四條通七丁目に新築移轉した。現在支店長は笹岡幸次郎氏である。

株式會社十二銀行旭川支店。

本店は富山縣富山市に在つて資本金一千萬圓支店二十四箇所内九箇所を道内樞要の地に有してゐる。

株式會社　十二銀行旭川支店

當地支店は大正元年九月の開設に係り元二條通九丁目に在つたが業務の發展に伴ひ店舗の狹隘を感じ大正十一年現在の瀟洒なセセッション式煉瓦造の營業所を三條通十一丁目に構へこゝに移轉したのである。爾來益々事業の發展に努め商業資金の融通を圓滑ならしめ、且近文二線一號に派出所を設け附近一圓の金融に便する等其の貢獻する所が尠くない。支店長は横山千代材氏である。

株式會社百十三銀行旭川支店。

本行は明治十二年函館に設立せられた、國立銀行を繼承したものであつて最近函館銀行と合併し資本金四百萬圓である。旭川支店は大正元年の開業で現在一條通八丁目に壯麗な營業所を有し支店長は原勇作氏である。

株式會社共榮貯金銀行旭川支店。

本行は明治三十三年二月資本金十萬圓を以て共榮貯金株式會社として創立し、大正三年十月資本金百萬圓となし同時に株式會社共榮貯金銀行と變更せるものである、業務の種類は定期預金普通貯金定期積金等であつて定期積金者に對し資金の融通を計つてゐる。現在支店長は增谷長雄氏である。

株式會社北門貯蓄銀行旭川支店。

本店を札幌に置き大正十一年三月開業した新進の貯蓄銀行である。現在資本金五十萬圓で當地方唯一の貯蓄銀行として日を逐ふて隆盛に赴かんとしてゐる。現在支店長は櫻井貞一郎氏である。

附記

株式會社中越銀行旭川支店　（本稿校正ノ際掲入）

本店の所在地は富山縣出町で資本金五百萬圓堅實な銀行として知られてゐる。道内には大正元年小樽に支店を置き道產業の進展に寄與する所あつたが更に本年九月中旬より本市に支店を設け開業するに至つたのである。支店長は土倉修氏である

會社の情態　近時時勢の進歩と經濟の發達は各種事業の資本に增大を來した結果商工業の經營亦會社組織に依るものが多い、本市亦其發展に伴つて各種の會社頗る增加した。

大正十三年十二月末現在の會社は百四十七社、資本金一千五百五十六萬二千三百十圓で之を大正七年一月現在の七十七社資本金二百七萬一千四百二十五圓に比べると社數七十社資本金に於ては實に一千三百四十九萬八百八十五圓の增加である。其の增加率は社數に於て九割强資本金に於て六十五割强でゐる。僅々數箇年の短日月に如斯驚くべき發展を遂げてゐる。

左に大正七年以降の會社の統計を記さう

年次	株式會社 社數	株式會社 總資本金	株式會社 拂込資本金	合計會社 社數	合計會社 資本金	合資會社 社數	合資會社 資本	合計 社數	合計 總資本	合計 拂込資本金
大正七年	一九社	一、〇七〇、〇〇〇円	五七一、〇〇〇円	四五社	五八〇、四二五円	一社	四二、〇〇〇円	七社	二、〇七一、四二五円	一、五七三、四二五円
大正十一年	六〇	一三、七八〇、五〇〇	四、三五八、五〇〇	九五	一、九〇六、六五〇	三六	一、六二〇、五三〇	一九一	一七、三〇七、六八〇	八、四三四、六八〇
大正十二年	五四	一一、四八八、〇〇〇	四、三五八、五〇〇	八一	一、六三一、四八〇	二九	一、四七九、三三〇	一六四	一四、五九八、八一〇	七、四六九、三一〇
大正十三年	五〇	一一、九六五、五〇〇	五、一〇三、二五〇	八〇	二、三一四、四八〇	一七	一、三七二、三三〇	一四七	一五、五六二、三一〇	八、七〇〇、〇六〇

尚本市に在る會社支店の數も少くなく何れも大規模の營業をしてゐる。大正十三年十二月末現在の登記された會社支店は十八社で本店の資本金總額五千二百四萬圓に達してゐる。

		大正十年十二月	大正十三年十二月
株式會社支店	支店數	一六社	一六社
	本店資本金	四一、二〇〇、〇〇〇圓	五一、五九〇、〇〇〇圓
	本店拂込資本金	二七、一五五、〇〇〇圓	三五、九九七、五〇〇圓
合名會社支店	支店數	三社	一社
	本店資本金	四六二、五〇〇圓	二五〇、〇〇〇圓
合資會社支店	支店數	一社	一社
	本店資本金	一〇〇、〇〇〇圓	二〇〇、〇〇〇圓
合計	支店數	二〇社	一八社
	本店總資本金	四一、七六二、五〇〇圓	五二、〇四〇、〇〇〇圓
	本店拂込資本金	二七、七一七、五〇〇圓	三六、四四七、五〇〇圓

更に大正十三年十二月現在市内會社本店を其業態別に依つて調べて見ると、物品販賣業四十二社で首位を占め製造業之に次いで四十社である、金融仲介代辨有價證券賣買業竝に農林業が之に次ぎ銀行業は僅か一社よりないが支店の銀行七社を有してゐる。

拂込資本金は製造業の三百六十四萬圓が最高で次は物品販賣業金融業請負業銀行業農林業等の順である、之に依つて見ると本市に於ける資本の多くは製造金融農林等の業に投ぜらるゝ狀態で其製造業と云ふも主として米大豆等を原料とする酒造味噌醬油釀造又は精米或は木材を原料とする製材業

等其主を占むるを以て如何に本市の商業が農林産に其基礎を置くかを物語つてゐる。然し本市としては未だ資本の充實を告げてゐない、敍上の如く地の利を占め交通の要路であり、諸般の點に於て著しく發展性に富んでゐながら常に資本の不足を嘆ずる爲め思ふが儘に雄飛することが出來ないのは遺憾の極みである。而して現在の本道に於て旭川市は一般世人注目の的となつて居るのである、斯くて今後本市に於ける各種の企業に遺憾なく資本の供給を得るに於ては更に一層隆昌を極むるに至るであらふ。

大正十三年十二月末現在市內會社業態別調

業態別＼組織別	株式會社			合資會社			合名會社			合計		
	社數	總資本金	拂込資本金	社數	資本金	拂込資本金	社數	資本金	拂込資本金	社數	總資本金	拂込資本金
物品販賣業	九	二、八六五、〇〇〇円	一、〇八〇、〇〇〇円	三〇	二六、四〇〇円	二、八七、五八〇	三	八五、〇〇〇円	一七〇、〇〇〇	四三	三、一六六、四〇〇円	一、三八一、四〇〇円
金融仲介代辨證券賣買業	六	二、二八〇、〇〇〇	六〇二、〇〇〇	一七	二八七、五八〇	一七〇、〇〇〇	二	一七〇、〇〇〇	二五、〇〇〇	二五	二、七三七、五八〇	一、〇五九、五八〇
製造業	一七	三、八三、〇〇〇	二、一五四、〇〇〇	一九	九二六、〇〇〇	五六〇、〇〇〇	四	五六〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇	四〇	五、二九八、〇〇〇	三、六四〇、〇〇〇
銀行業	一	一、〇〇〇、〇〇〇	三七五、〇〇〇	—	—	—	—	—	—	一	一、〇〇〇、〇〇〇	三七五、〇〇〇
無盡業	二	九〇、〇〇〇	五二、五〇〇	一	三〇、〇〇〇	—	—	—	—	三	一二〇、〇〇〇	八二、五〇〇
倉庫業	一	一〇〇、〇〇〇	七九、〇〇〇	—	—	—	—	—	—	一	一〇〇、〇〇〇	七九、〇〇〇
問屋業	二	六二五、〇〇〇	一五六、二五〇	—	—	—	—	—	—	二	六二五、〇〇〇	一五六、二五〇
農林業	五	二三三、五〇〇	七四、五〇〇	一	五、〇〇〇	四	四	二四五、〇〇〇	一〇	四七三、五〇〇	三三四、五〇〇
請負業	一	二〇〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	四	五三〇、〇〇〇	二	二	三〇〇、〇〇〇	七	一、〇三〇、〇〇〇	八八〇、〇〇〇
電氣業	一	三〇〇、〇〇〇	三三五、〇〇〇	—	—	—	—	—	—	三〇〇、〇〇〇	三三五、〇〇〇
印刷業	—	—	—	二	一五、〇〇〇	—	—	—	一	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇
運送業	一	五〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	三	一八九、五〇〇	—	—	—	四	二三九、五〇〇	二〇九、五〇〇
雜業	四	四二〇、〇〇〇	二三五、〇〇〇	三	二五、〇〇〇	二	二	一三、三二〇	九	四五七、三二〇	二三二、三二〇
合計	五〇	一一、九六五、五〇〇	五、一〇三、二五〇	八〇	二、二二四、四八〇	一七	一、三七二、三二〇	一四七	一五、五六二、三二〇	八、七〇〇、〇〇〇		

大正十三年十二月末現在會社支店業態別調

業態別＼組織別	株式會社			合資會社			合名會社			合計		
	數	總資本金	拂込資本金	數	資本金		數	資本金		數	總資本金	拂込資本金
旅人宿業	一	三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円	—	—	円	—	—	円	一	三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円
製造業	三	一四五〇〇〇	一一五〇〇〇	—	—		—	—		三	一四五〇〇〇	一一五〇〇〇
銀行業	七	二八〇〇〇〇〇	二七九三五〇〇	—	—		—	—		七	二八〇〇〇〇〇	二七九三五〇〇
運送業	二	六〇〇〇〇〇	三三五〇〇〇	一	一〇〇〇〇		—	—		三	六一〇〇〇〇	三三五〇〇〇
物品販賣業	二	六〇〇〇〇〇	三三九〇〇〇	—	—		一	一五〇〇〇		三	六一五〇〇〇	三四〇〇〇
金融仲介業	一	二〇〇〇	五〇〇	—	—		—	—		一	二〇〇〇	五〇〇
合計	一六	五一五九〇〇〇	三五九七五〇〇	一	一〇〇〇〇		一	一五〇〇〇		一八	五二〇四〇〇〇	三六四七五〇〇

資本金二萬圓以上の會社

株式會社の部（本店）

商號	資本金	拂込資本金	所在地
株式會社市村商店	三十萬圓	全額拂込	四ノ七左一
株式會社丸力三箇商店	一百萬圓	二十五萬圓	三ノ十右一
北海道肥料株式會社	十二萬五千圓	全額拂込	宮ノ十一左六
丸肥旭川肥料株式會社	一百萬圓	二十五萬圓	一ノ十右一
株式會社岩山本保謙堂	二十萬圓	五萬圓	二ノ十三右十
旭川無盡株式會社	五萬圓	三萬一千二百五十圓	四ノ十左七
旭川硫產株式會社	十萬圓	三萬二千圓	四ノ十四左五
旭川商事株式會社	一百萬圓	二十五萬圓	四ノ八右七
北海興產株式會社	五十萬圓	十二萬五千圓	一ノ七左二
株式會社山田屋商會	五十萬圓	十二萬五千圓	四ノ九左十
株式會社日ノ出製材所	十五萬圓	七萬五千圓	宮ノ十二右五
旭川木工株式會社	五萬圓	全額拂込	宮ノ十四左五

上川倉庫株式會社	十萬圓	七萬九千圓	宮ノ十一右七
北日本工業株式會社	二十萬圓	五萬圓	五ノ三
株式會社竹村病院	十六萬圓	全額拂込	四ノ十二
丸善典禮株式會社	四萬圓	二萬圓	三ノ九左七
旭川酒造株式會社	三十萬圓	十二萬圓	中朱別一
株式會社田中木工場	五十萬圓	十二萬五千圓	一ノ一
旭川製綿株式會社	十萬圓	二萬五千圓	四ノ十二左十
北海製藥株式會社	十萬圓	四萬圓	二ノ十三右八
今井釀造株式會社	一百萬圓	三十萬圓	四ノ二左十
北星石鹼株式會社	六萬圓	全額拂込	曙通六
北日本釀造株式會社	二十七萬五千圓	全額拂込	六ノ十六左一
株式會社煖爐製作所	五萬圓	一萬五千圓	二ノ一右二
株式會社糸屋銀行	一百萬圓	三十七萬五千圓	二ノ七右六

上川無盡株式會社	四萬圓	二萬一千二百五十圓	三ノ十左六
旭川造林株式會社	五萬圓	一萬二千五百圓	一ノ十一左七
天鹽水電株式會社	三十萬圓	二十二萬五千圓	四ノ十右十
北海皮革株式會社	二萬五千圓	全額拂込	牛朱別
國利工業株式會社	六萬圓	全額拂込	八ノ七左四
旭川畜產委託販賣株式會社	二萬五千圓	六千二百五十圓	一線一號區劃外
株式會社丹波屋商會	五萬圓	全額拂込	宮ノ九左五
旭精油商事株式會社	三萬圓	一萬五千圓	四ノ十四左三
博善株式會社	十二萬圓	三萬圓	三ノ九左七
株式會社丸富商會	八萬圓	二萬圓	五ノ八左十
旭川市場株式會社	六十萬圓	十五萬圓	六ノ六右十
旭川自動車株式會社	五萬圓	二萬圓	六ノ六右六
旭川共榮株式會社	二萬圓	五千圓	一ノ十一左七

旭川農具株式會社	二萬圓	全額拂込	二ノ三左八
合同酒精株式會社	百十一萬圓	全額拂込	三ノ九左十
極東拓殖株式會社	十萬圓	三萬五千圓	曙通二九九
株式會社旭川廉賣市場	十萬圓	二萬五千圓	三ノ三左八

株式會社支店の部

株左會社北海ホテル旭川支店	十二萬圓	全額拂込	四ノ八左四
株式會社藤武良商店旭川支店	三百萬圓	九十萬圓	一ノ八左四
北海道精米株式會社旭川支店	二十五萬圓	全額拂込	五ノ十八左五
北海釀造用器株式會社旭川支店	二十萬圓	十萬圓	五ノ十五左三
共成株式會社旭川支店	百萬圓	八十二萬五千圓	宮ノ十六右一
株式會社北門銀行旭川支店	五十萬圓	三十八萬二千五百圓	四ノ七左六
株式會社今井商店旭川支店	三百萬圓	二百四十九萬圓	一ノ七左十
北都運送株式會社旭川支店	百萬圓	二十五萬圓	宮ノ八右九

株式會社北海商行旭川支店	二萬圓	五千圓	五ノ八右十
內國通運株式會社旭川支店	五百萬圓	三百十二萬五千圓	宮ノ七左十
株式會社百十三銀行旭川支店	四百萬圓	三百八十五萬圓	一ノ八左七
株式會社十二銀行旭川支店	一千萬圓	八百七十五萬圓	三ノ十左一
株式會社共榮貯金銀行旭川支店	百萬圓	三十二萬五千圓	三ノ八右五
株式會社北海道銀行旭川支店	二百萬圓	全額拂込	一ノ八
株式會社北海道拓殖銀行旭川支店	二千萬圓	一千二百五十萬圓	二ノ八
株式會社北門貯蓄銀行旭川支店	五十萬圓	十二萬五千圓	四ノ七左六

合名會社本店の部

荒井合名會社	十萬圓		一ノ六右四
三谷合名會社	十五萬圓		八ノ十右六
鹽野谷合名會社	十五萬圓		二線一號
木下合名會社	十萬圓		七ノ十三左三

杉本合名會社	七萬五千圓	三ノ十二右五
丸五藤田合名會社	十萬圓	四ノ十六左六
松井合名會社	七萬圓	二ノ十三左四
笠原合名會社	三十萬圓	一ノ一
旭川鹽元賣捌合名會社	七萬圓	一ノ九左三
西村合名會社	二十萬圓	二ノ四左十

合名會社支店の部

林屋製茶合名會社旭川支店	二十五萬圓	二ノ八右四

合資會社本店の部

合資會社丹波屋商會	五萬圓	宮ノ九左五
合資會社大澤商店	五萬圓	二線一號
霜鳥興業合資會社	十萬圓	四ノ十左七
北海產業合資會社	八萬九千五百圓	八ノ八右八

野口合資會社	二十二萬五十圓	五ノ十五左十
合資會社大正木工場	十萬圓	牛朱別
齋藤合資會社	二十五萬圓	宮ノ九左八
大崎合資會社	三萬圓	四ノ十三右十
共產合資會社	三萬一千圓	一ノ十四右一
合資會社棒久川村質店	三萬圓	二ノ八左八
日ノ出無盡合資會社	三萬圓	三ノ十一左一
旭拓殖合資會社	三萬圓	四ノ十左七
合資會社丸サ上川賣炭所	二萬圓	宮ノ十三左一
合資會社野島商店	二萬圓	二ノ十一右十
合資會社酒井組	十五萬圓	五ノ九左十
合資會社加藤組	十萬圓	一ノ十五左七
原合資會社	五萬圓	四ノ十左九

梅田合資會社	十萬圓	一ノ十三右五
丸上上川運送合資會社	五萬圓	宮ノ九右二
曲森合資會社金森運送店	五萬圓	宮ノ九右一
旭工業合資會社	十八萬圓	五ノ十二右十
東京五和福合資會社	三萬圓	五ノ十四右四
合資會社栗山組	二十萬圓	宮ノ八左十

合資會社支店の部

倉庫と運送　倉庫業　倉庫業の振否は貨物集散の尺度である。本市に於ける倉庫業は明治三十一年五月二十一日資本金二萬圓を以て上川倉庫株式會社が創業せられたのを以て嚆矢とする。當時上川原野の開拓未だ進まず農產は通じて尙十萬石に達しなかつた爲め會社本業たる倉庫業は微々として振はず兼業たる運送業荷爲替等に依つて漸く營業を維持せる狀態であつた今同社開業第一年に入庫せる貨物は、

小豆	六百九十八俵	大豆	一百三十四俵
玄米	一百九十四俵	白米	三十俵
小麥	一百俵	稻黍	五十俵
澱粉	二十箱	地酒	六樽
鹽	四百十九俵		

にして合計一千六百五十一個に過ぎず、以て當時の狀況を偲ぶに足る、爾來本市商業の發達は同社の業務を隆昌ならしめ越えて明治三十七年日露戰役の影響は經濟界に活況を呈し同社亦資本金を三萬圓に增加し更に十萬圓に增資して設備の完全を圖り兼業たる運送業は上川運輸合資會社に繼承せしめ一意倉庫業に盡瘁し本市實業界に貢獻すること大であつた。大正三年に至り本市の商權愈々擴大せらるゝに及んで同年九月一日館脇倉庫設立せられ越えて大正六年十一月資本金十萬圓の旭川倉庫株式會社が設立せられたが大正十三年六月に至りて財界不振の影響を受け閉鎖するの已むなきに至り、現在前述の二倉庫のみとなつたのである。前者即ち上川倉庫は宮下通り十一丁目にあり旭川構內貨物積卸場に隣接し後者即ち館脇倉庫は宮下通九丁目、十丁目、十一丁目に位し鐵道に依る貨物の出入に頗る便利であつて旭川驛に於て出入する貨物は圓滑に整理せらるゝのである。

前述の如く明治三十一年には入庫高千六百五十一個の微々たるものであつたが日露戰役後の三十七年には一躍十八萬七千八百九十一個の入倉數を示し大正八年には入庫高六十八萬三千四百六十五個出庫高六十五萬九千六百四十二個の多きを算して居る。之を明治三十七年に比すれば入庫二十六割三分强、出庫二十五割四分强年末在荷高に於て二十二割强の激增である。大正九、十年に於ては大正八年に比し激減してゐるが大正十二、十三年度分は漸次好況に向ひ明治三十七年に比べ入出庫高を通じ十九割以上の增加を示してゐて一度悲境に陷つた倉庫界も漸次立ち直らんとするの狀況に在るのである。

運送業　既述せる如く鐵道の發達は運輸の狀態を頗る頻繁ならしめ從て本市の運送業者は逐年發展を遂げてゐる。明治三十一年七月旭川驛開業當初の運送店は上川倉庫株式會社運送部、內國通運株式會社旭川取引店、×早達組、△運送部の四店であつたが現在では左記十店を算へ其の中八店は公認運送店である。

公認運送店

旭川市宮下通九丁目右二號　㊤　上川運輸合賦會社

同　宮下通九丁目右一號　㊫　合資會社金森運送店

同　宮下通七丁目左十號　㊥　內國通運株式會社旭川支店

同　宮下通九丁目右七號　㊢　三ッ山運送組旭川出張所

同　宮下通八丁目左十號　合資會社栗山組旭川支店

同　一條通九丁目左一號　△　旭川運送組

同　宮下通八丁目右七號　北部運送株式會社旭川支店

同　近文驛前　㊏　高桑運送店

其他運送店

旭川市二條通八丁目右十號　㊐　江口運送店

同　一條通八丁目右十號　㊦　中川運送店

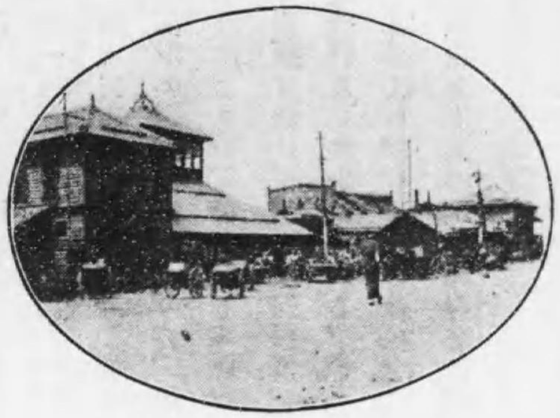
尙石北線開通の爲め新旭川驛前に下梶組運送店支店外二三の運送店があつて。而も最近是等の諸店に於て取扱ふ運送件數は一箇年約四十四萬件に達し今後益々繁忙を極めんとしつゝあるは蓋し本市商勢の發達に徵し當然の現象と云はねばなるまい。

特色ある市場　都會と市場とは離るべからざる密接な關係を有してゐる。蓋し市場は吾人必需の日用品分配機關で需給を適合せしめ物價調節の作用を爲す重要經濟機關で市場の振否が都市經濟に及ぼす影響は洵に甚大である。

本市では明治三十三年十二月旭川盛有株式會社が資本金二萬圓で魚菜市場を設置したのが市場の嚆矢であつて其後上川市場株式會社。旭川市場株式會社等設立せられ同じく魚菜市場を經營したが大正十一年に入り旭川市場株式會社は上川市場株式會社に合併せられ延いて翌年十一月一日發せられた市場規則の改正に基き二社を合併して資本金六十萬圓の旭川市場株式會社に組織を改め前述の三社を六條市場、五條市場、三條市場と改稱し會社の事務所を六條六丁目に置き事務を執つてゐる。

旭川市立公設市場の一部

公設市場は物價の昂騰甚しい大正八年に設立せられ日用品物價の調節を圖り市民の之を利用するもの多い。尚公設市場設置と相前後して私設廉賣市場の開設せられたもの十三の多きに達したが其後衰微して振はず遂に閉鎖したものもある。



旭川市場株式會社

現在に於ける市場は旭川市場株式會社。公設市場。私設日用品市場十箇所である。

旭川市場株式會社

大正十二年十一月一日から施行された改正市場規則の主旨は、市場は吾人日常の生活必要品たる魚菜類の取引所で又社會經濟上の公益的機關であるから決して個人の營利の目的に供すべき筋合の事業ではなく、市場は原則として一市街地一箇所制を採り例外として市及市に準ずべき土地に於て特に增設の必要を認むる場合に限り二市場を許し得る事としたのに起因してゐる。

それで前述の三市場を合併し資本金六十萬圓の會社組織とし新たに六條市場、五條市場、三場市條

と稱してその管下に置かしめる事にした。大正十三年度中に於ける賣上高は鮮魚八十七萬六千六百三十七圓、鹽乾魚三十二萬一千七十五圓、果實類四十一萬二千六百九十九圓合計一百六十一萬四百十一圓となつてゐて出入仲買人二百三十六名を算してゐる。

以上三市場に集散する魚類の生産地方は本道沿岸各方面であるが就中二、三、四月頃は留萌增毛天鹽海岸小樽近海方面五、六、七月頃は室蘭日高紋別海岸苫小牧方面八、九、十月頃は釧路白糠網走北見沿岸よりの入荷が最も多い。青果は主に內地より移入せられ梨は新潟福島地方柑橘は靜岡縣林檎は青森縣甘藷は千葉、埼玉縣其他和歌山石川富山の各縣及東京方面が主なる仕入地である。蔬菜類は附近農村より供給せられる。

需要は本市を最とし近在之に亞ぐが近時に至り鮮魚の一部青果類及地產蔬菜類の生產多きものは樺太根室方面釧路網走宗谷各沿線及び函館室蘭線方面に移出せらるゝ狀態である。

旭川市立公設市場

大正八年十二月の設立で三條通十一丁目に在る。當時財界の好調に伴ひ物價は益々奔騰して止むことを知らず市民は生活の安定に脅威を感ずるに至つた。市は之に見るところあり一萬一千圓を投じて本市場を建築し市內有力の商店を指定して開業したが常に市中の小賣相場より安價に日用品を供給せしめた結果物價の調節に資せしこと尠からず又之を利用する市民は增加しつゝある。同市場の敷地は四百八十六坪建物二百五十三坪で現在店舗數二十五臨時店舗數十である。平均一日の賣上高七、八百圓、入場者千五、六百人を算してゐる。市は諸經費四千八百九十一圓を投じ職員を置いて此監督に努めてゐる。左に既往三箇年の統計を揭げ其成績を示さう。

年別	店數	經費	職員	開場日數	總賣上高	總入場人員	一日平均賣上金額	一日平均入場人員
大正十一年	三五	二、九〇七円	二名	三四九日	三一八、九〇二円	七七六、三三四人	九二円	二、二八人
大正十二年	三五	四、五一九	二	三四九	三一五、一六一	七七七、一五〇	九〇〇	二、二三〇
大正十三年	三五	四、八九一	二	三四九	二九二、三七五	七二一、四四二	八三八	二、〇四七

私設日用品市場

現在市內に在る私設市場は左の十箇所である、

中央市場　大正九年八月設立　五條通七丁目

旭市場	同	三條通十一丁目	
廉賣市場	同 九月設立	三條通三丁目	
東市場	同	三條通十七丁目	
第一廉賣市場	同 十一月設立	三條通十五丁目	
近文市場	同 十二月設立	一線一號	
北海市場	同 十年七月設立	三條通八丁目	
南市場	同 十三年六月設立	一條通十三丁目	
七福市場	同 十四年六月設立	七條通七丁目	
文化市場	同	四條十一丁目	

物價　吾人日常の經濟生活に密接の關係ある物價は時勢の進運、生活の向上に伴つて一般に騰貴の趨勢にあるは蔽ふ可からざる事實で本市の物價も亦商工業の發展と人口の增加に從ひ漸次騰貴し殊に歐洲戰爭勃發後貿易の出超一般經濟界の活躍通貨の膨脹に伴ひ其の騰貴著しく殆んど天井知らずの有樣で當時所謂中產階級の生活難其極に達し種々なる社會問題漸く繁からんとしたが大正九年に入りて漸く財界反動の兆を示し三、四月頃突如起つた恐慌は財界長夜の夢を破り物價は漸く低落の步調を辿るに至つた、然し最も著しい低落を示したのは米穀類であつて其の他のものは低落の步調を執つてゐるに拘らず遲々として更に見るべきものがなかつた。是れは當時全國の共に辿つた同一の情勢であるが、大正十一年以降附近農村一般が過去の事實に依り自ら引締つて來たのと加ふるに農作物の比較的增收とに依り物價は大正九年當時の暴騰時代に比ぶべくもないが漸次恢復の兆を示して來た。之れに依つて本市經濟界が益々堅實味を加へて好轉しつゝあると考へる事が出來やう。

次に大正九年以降の主要商品につき年別平均卸價格を擧ぐれば左の通りである。

品名	銘柄	單位	大正九年	大正十年	大正十一年	大正十二年	大正十三年
玄米	旭川檢三等	一石	四二・二六円	二四・八〇円	三一・六六円	二九・五九円	三四・二九円
白米	同	同	四六・六五	三〇・九六	三五・三〇	三四・四四	三九・五六
裸麥	麥口檢	百斤	一〇・五八	六・二七	六・五二	七・〇八	九・〇六
小麥	同	同	九・〇九	七・三五	七・二七	六・八六	九・三三

大豆	同	同	九・一〇	四・六六	五・六五	七・四一	七・五三
小豆	同	同	一〇・二五	六・五七	五・九五	八・三八	一一・五一
燕麥	ハ検	一石	六・七八	六・五〇	五・七四	八・一七	七・四七
青豌豆	ロ検	百斤	五・八一	八・一五	一一・五八	八・七三	九・四一
長鶉豆	同	同	七・四一	八・五〇	六・七六	六・〇八	八・一〇
澱粉	精粉	百封度	六・三九	六・四五	九・〇五	九・一三	一〇・五二
菜種	洋ロ検	百斤	一一・〇四	八・八一	九・四〇	一〇・五一	一一・九一
亞麻種	ロ検	同	八・七二	三・七九	五・八六	六・九〇	八・八九
玉蜀黍	同	同	四・八七	三・六八	四・〇一	五・四六	五・七五
馬鈴薯		十六貫	一・三二	二・〇七	二・四三	一・九八	二・六三
清酒	地上古酒	百石	一〇五・二五	一〇〇・〇〇	一〇三・〇八	八八・五四	一〇五・〇四
麥酒	札幌	四打	三三・七〇	二一・〇〇	二〇・一三	一八・一三	一八・四八
味噌	佐渡㊅	十貫一樽	九・五五	七・九五	七・七五	七・六三	八・〇八
醤油	亀甲萬	九升入一樽	九・〇〇	七・九〇	七・八一	七・四一	六・九八
	地金印	八升五合一樽	六・四二	五・八七	六・二五	五・八八	六・一五

砂糖	精糖BB	百斤	四九・八〇	三一・八七	二六・八〇	三一・四一	二九・五三
小麥	白星	一袋	五・六九	五・三一	五・〇五	四・六八	四・九四
饂飩	地雪印	五十入一箱	四・五九	四・一四	三・九五	三・七〇	三・七六
鹽鮭	北見	十貫	一〇・八四	一三・一〇	一〇・九三	一三・六九	一四・二〇
鹽鱒	樺太	同	七・三〇	五・三四	五・三〇	六・四七	七・二六
開鱈	極上有頭	同	一三・二九	一三・〇〇	一三・六六	一三・一三	一三・二三
鰹節	伊豆改良本節	同	一四三・九〇	一九四・五八	一六五・〇〇	一四八・九六	一四九・三九
黑胡麻		一斗	四・二〇	三・八一	三・八二	三・八一	四・九二
福神漬	東京	四貫一樽	一〇・七五	九・六二	九・九六	六・九一	八・六八
石油	チヤスター	一函	—	九・八八	八・一〇	七・〇七	八・三四
牛肉	牝骨付	十二貫	—	五一・〇〇	四四・三三	四三・六七	四七・八七
豚肉	骨付	同	—	四三・〇〇	三七・四一	三五・八三	三六・三六
銘仙	秩父	一疋	三三・〇〇	二四・五四	二四・一四	二一・六三	二一・八九
モスリン	三千番薄色	七十二尺一反	二九・二八	二四・八七	一八・六二	一七・二五	一七・〇九

製綿	判綿	十二貫	七七・五四	五五・七九	五七・八三	六三・六九	八三・七九
松角	一等	百石	—	四一六・六六	五〇一・六六	五二〇・〇〇	五四九・一七
栓角	同	同	—	四八九・一六	五〇一・六六	五九二・八三	六四〇・〇〇
楢角	同	同	—	三八八・三三	四〇五・〇〇	五一七・五八	五一〇・〇〇
挽材	松並四分	坪	一・八八	—	—	一・三二	一・四二
下駄棒	栓一等	同	—	一、一一六・六六	一、二六六・六六	一、〇五一・一〇	一、二五二・五〇
丸鐵	三分	十貫	—	七・七〇	六・二五	七・三二	五・五五
胴鍊		百石	—	二、六九五・八三	二、八〇五・八三	二、八一五・六七	二、八〇二・五八
笹目		同	—	二、三九四・〇〇	二、六二八・三五	二、五六四・七五	二、四三七・八〇
大豆粕		一枚	—	二・五九	二・五一	二・五四	二・六六
木炭	楢特等	十貫一俵	二・二	二・三二	一・七一	一・七七	一・九一
薪	楢	百本一敷	九・〇〇	九・七〇	一〇・三三	一〇・六七	一〇・〇六
石炭	空知一等	一噸	—	一七・〇五	一四・五五	一三・八二	一三・八二
コークス	並	同	—	三六・八〇	三三・六五	三一・六〇	三一・四〇

尙本所創設以前の卸物價に就ては確實な資料に乏しい爲め掲載する事が出來ないのは實に遺憾に堪へない。

商業會議所　往昔只一望の蒼林であつた我が旭川の地も明治二十三年開村以來地の利と當局の善導とにより夙に世人の注目するところとなり、鐵道の敷設に次いで第七師團の設置を見るに及んで戸口激增し商工業の殷賑を誘致し本道中樞の都市として面目を一新するに至つたのである。是を以て明治四十一年旭川實業協會創立せられ爾來當地方唯一の商業會議所代務機關となつてゐたが本道屈指の美田沃野を背景とし、物資の集散逐日頻繁を加ふる本地の實狀は遂に同協會の主唱により大正二年六月商業會議所設立の議を決せしめ同年九月十日設立認可申請書を當局に提出するに至れるも時機尙早の故を以て却下の悲運に會したが發起人は毫も之れに屈することなく實業協會と連絡を保ち其初志の貫徹に努め絕えず畫策し加ふるに爾後自治の向上と鐵道の延長とは本市をして異數の發展を促し且戸口竝に經濟力も亦充實するに及んで大正六年四月再び要望を爲すや玆に初めて當局の容れらるゝところとなり、大正八年八月六日其の認可を得たのである。

同年十二月議員の選擧を行ひ第一次の會頭に井內歡二氏副會頭に下村正之助氏就任諸般の設備を完

了し爾來商工業の發展に資すべき地方的諸問題に關して鋭意施設を怠らなかつたが大正十年五月井内會頭死去により同年七月十二日の總會に於て野崎小三郎氏會頭に就任するに及び會議所定款中の一部を改廢して機能を發揮するに努め當業者亦會議所を利用して自己營業の發展に資するもの多くその施設愈々恰當を極むると共に益々設立の眞價を發揮するに至つたのである。

同年九月四日本所主催を以て第一回北海道商業會議所聯合會を開催した會するもの全道四會議所二十三名にして會則協議案北海道廳諮問事項其他重要問題七件を議し豫期以上の盛會裡に終了を告げた本聯合會は札幌商業會議所の提唱に依り最近本道に於ける商工業に發達及將來斯業の進展を豫測し北海道のみに關聯する事項に關し協議せんが爲め本會の組織を必要としたるもので其創立總會を本會議所に於て開催するに至

旭川商業會議所內部

つたのである。次いで翌九月五、六兩日第十回奥羽北海道商業會議所聯合會を本所に於て開催し各會議所よりの提出議題十七件を審議し夫れ〳〵決議の結果を當路に建議要望した同會に出席せる會議所十一箇所（全部）出席員七十五名臨席官四名の多數に達し頗る盛會であると共に本市產業の紹介に資した點も尠くなかつたのである。

同年十月小樽取引所に對し本道米を建米とせられんことを要望して之が實現を見以て道產米聲價の向上に努め又時代の趨勢に鑑み生活費低減上恰當方法を講じ財界不況に善處する等貢獻するところ尠くなかつたのである。

超えて大正十一年五月九日會頭野崎小三郎氏は病の爲め其の職を辭せられたので十一月二十日開會の第十六回總會に於て滿場一致荒井初一氏を會頭に擧げ其の就任を見るに至つた。爾來本市商工業界の爲め全力を傾倒し或は年來決濟勘定日繰上竝初賣出改善勵行を宣傳して商習慣の改善に努め或は本道中部に於ける富源の開發に資せんが爲め上士幌線の速成を議會に請願して之が採擇を得或は宗谷線の完成に依つて稚泊及稚斗連絡實現するや率先して樺太との提携に腐心企劃する等本市商工界に貢獻するところ大なるものがあつたのである。翌大正十二年八月に至つて我國產業の將來は科學的研究に

依り生産並に販賣上の能率增進を圖り、優良品を最も廉價に供給するの方途を講ずるに非れば其の發展は到底期し得られざるの情勢にあるを察知し全國に先んじて廣告及能率增進資料展覽會を開催して稗益するところあり、猶關東震災後の物資需給の圓滑及地方產業の振興並に行財政整理緊縮による地方鐵道の施工繰延に就ては極力之が恢復及阻止につき施設畫策する等鋭意機能增進地方產業の振興を策し、次で本年（大正十四年）四月十五、十六の兩日本所に於て第五回全道商業會議所聯合會を開催したのであるが、出席會議所は同年新に開設せられた釧路、室蘭兩會議所を加へ六箇所（本道六市全部）出席者五十七名臨席官北海道廳商工課長外一名であつて、北海道廳諮問案三項其他各會議所よりの提出議案十九件を審議して決議の結果を夫れ〳〵當局に建議要望する事に決し盛會裡に終了を告げたのである。之れより先本所は市內有志の後援に依り經費二萬圓を以て所舍の內外に亙り一大改增築を行ひ都市商工機關としての面目を一新するに至り斯くて本會議所は創立日猶淺しと雖も諸般の施設殆んど完備の域に進み尙鋭意本市商工業界の爲め不斷の努力を續けてゐるのであるが現在實施しつゝある本所施設の主なるもの次の通りである。

一、諸物資移出入統計の完全を期し本市移入防遏の資料に供せんが爲め、大正十三年二月より旭川驛に貨物調査事務所を特置し所員四名を專屬せしめ專ら本市各吐驛たる旭川驛及近文新旭川三驛に於ける貨物集散統計を極めて詳細に調査せしめ時々之を發表する外一般當業者の照會に應じ資料を供給しつゝある。

一、各種參考圖書の發行

統計年報。商工案內、商工名鑑、商工概覽月報は常時發行しつゝあるが特に大正十三年度刊行の商工名鑑は市內のみならず本市商權範圍と目すべき本道東北部主要地を網羅したる「旭川市及北海道東北部商工名鑑」を刊行して當業者の便宜に資したる處尠くない。

一、實業奬勵に關する施設

イ、速算競技會

既に二回を開催し效果を收めたるを以て每年實施の豫定である、

ロ、飾窓競技會

既に七回を實施し成績逐回向上しつゝある、

ハ、年末決濟勘定日繰上宣傳

既に三箇年に亘り實施し殆ど勵行の成績を收めつゝあり、

ニ、初賣出開店時刻改善

前項同樣實施三箇年に亘り成績顯著である、

ホ、印紙稅集合檢査施行

當業者竝に稅務當局相互の便益に資し併せて納稅思想向上の爲め大正十一年より實施しつゝあるが相當の效果を收めてゐる。

現在役員及議員設立以來の有權者竝經費の概況を示せば次の通りである。

旭川商業會議所役員

會頭　荒井初一　副會頭　下村正之助

常議員　笠原定藏　同　上木彌一郎　同　澤口善助

同　齋藤仙次　同　世木澤藤三郎　同　福居清兵工

議員及特別議員

一番　陶器業　齋藤仙次　二番　麥粉砂糖商　秋山音一

三番　運送業（合資會社金森運送店代表者）金森駄太郎

五番　酒造業　笠原定藏

七番　味噌醬油釀造業　下村正之助

九番　木材商　吉富榮太郎

十一番　酒造造（野口合資會社代表者）岡田重次郎

十三番　精米業　福居清兵工

十五番　酒造業　藤田長次郎

十七番　請負業　西村玉吉

十九番　小間物洋物商　石田万作二

二十一番　會社重役　山田新

二十三番　酒造及農產商　世木澤藤三郎

二十五番　會社重役　三箇元次郎

二十七番　木材業　上木彌一郎

四番　金貸業　牧野五作

六番　精米業（合資會社野島商店代表者）野島民助

八番　缺

十番　請負業、精米頁業　荒井初一

十二番　製材業（合資會社大正木工場代表者）平野與次左衛門

十四番　金貸業（霜鳥興業合資會社代表者）解良平太郎

十六番　請負業　横山初三郎

十八番　米穀商　錦祐明

二十番　小間物雜貨商　高島清四郎

二十二番　乾物果實商　伏見新太郎

二十四番　牛乳搾取業　高野清右工門

二十六番　吳服太物商　松浦長藏

二十八番　紙文房具及印刷業　山田米太

二十九番　菓子卸商　瀧野常吉　三十番　會社重役　澤口善助

特別議員

一番　北海道電燈株式會社旭川事務所長　外丸重太郎
二番　旭川運輸事務所長　駒城三郎
三番　諸會社重役　道會議員　松家圓次郎
四番　木材業　齋藤彌三郎
五番　酒造業　大谷岩太郎
六番　北海道拓殖銀行旭川支店長　黄金井解三
七番　辯護士　別府賢吉
八番　市立旭川商業學校長　川合光寛
九番　時計樂器自轉車商　佐藤音次
十番　諸會社重役　市村・龜松
十一番　株式會社絲屋銀行頭取　山本菊藏
十二番　旭川市長　岩田恒精
事務局　書記長　赤石忠助　岡和田平　二一　渡部季男
伊藤喜一郎　門地武志　樋口茂　西山勳
渡邊清四郎　澤田夏枝　安藤トメノ

會議所選擧權者被選擧權者數及經費

年次	選擧權者	被選擧權者	一箇年經費
大正八年度	六三六	三二五人	二、八二四円
大正九年度	九三六	三八九	一五、六八〇
大正十年度	八九四	四六九	一九、九一一
大正十一年度	一、〇一二	六〇〇	一九、九七八
大正十二年度	六三一	四三八	二一、一二一
大正十三年度	六七三	三七六	二二、四九四（豫算）

備考　十二年度選擧權者及被選擧權數の激減は主として營業稅法の改正に因る

商工團體　旭川實業協會　明治四十年前後の旭川には一の實業團體もなく商工業の發展實業家の親睦を圖る途がなかつた、之を遺憾として當時の青年實業家下村正之助小林繁三の二氏極力奔走せられた結果明治四十一年八月十日團體組織の件につき協議會を開く事になつた同會に集合した實業家は左の十三名である。

下村正之助　小林繁三　石崎鶴吉
岩本美雄　吉田友三郎　小川眞一郎

關　浩　三　　土屋豐三　　佐々木源助
松家圓次郎　　湊　友　松　　金森駒太郎
坂東幸太郎

斯くて種々協議の結果全會一致を以て旭川實業青年會を設立することゝなり、創立委員五名を擧げて此實現に盡力することになつた。其後創立委員會を開くこと三回遂に同年九月十三日五條通六丁目慶誠寺に於て創立總會を開いた會するもの六十四名、會長に井內歡二氏副會長に入山知一氏幹事下村正之助氏外六名、評議員石崎鶴吉氏外十九名、庶務佐々木源助氏外四名、會計下村正之助氏を選任して旭川實業青年會は產聲をあげたのである。爾來每月例會を年々大會を開き或は必要に應じ臨時總會を開き本市商工業進展の爲め常に畫策を忘らず明治四十三年六月三十日より會報を發して會の目的貫徹に努め會員有志には勿論廣く全國の商業會議所其他實業關係先に配付し尙名士を招きて講演會を催し智識の普及を圖り其他商工從事員の表彰、紛議の仲裁、商工業上の調査等或は年々實業聯合大運動會を開催する等貢獻せしところ尠くない、大正二年四月現在の旭川商業會議所所在地をトして會館の新築に著手し同年十二月四日其落成を見た此建築費金八千六百四十八圓九錢は總て市內有志の寄附に依つたもので爾來益々隆昌に赴いたが大正二年以來本協會及市民一般の熱心なる運動は旭川商業會議所の設置を促進し、遂に大正八年八月六日同會議所の設立を見るに及んで會館を會議所に讓渡し尙協會事業の大部分は自然同所に移る事となつた。現在會長には田中喜代松氏副會長に松家圓次郎、坂東幸太郎兩氏が當つてゐる。

商工組合

近時商工業の進步に伴ひ各同業の發展利益を增進する爲組合を組織するもの頗る增加し現在本市に於ける主なる組合は七十九に達し中酒造組合一で其の他は何れも準則組合である。尙此の外產業組合法に依るものが六つあつて皆良好な成績を擧げてゐる。尙是等商工組合に依つて設けられた商工組合聯合會は大正六年の創設にかゝれども遲々として其業績更に振はず、殊に大正十年十一年兩年に渡りて副會長井內歡二氏（當時本市選出代議士）會長市來源一氏（當時旭川區長）の兩氏相次で逝去せられるゝに及び有名無實の譏を免れなかつたが大正十一年十一月二十五日旭川商業會議所の斡旋に依り商工組合長會議を開催し、是が復興を議決し委員に於て諸般の準備を整へ翌年二月二十一日第一回の總會に於て新に會則を定め幹事長及役員の選擧を行ひ、笠原定藏氏幹事長に其の他役員を定め其の後一

意本市商工業界の爲めに努力する事を決議した。爾來面目を一新して益々その機能の發揮に努め商業會議所と相提携して、或は年末快濟日繰上竝に初賣出改善等商習慣の改善に努め或は關東地方の大震災に際し物價暴騰の防止を圖り或は商工從事員の表彰を行ふ等本市商工業界に盡瘁するところ尠くないのである。

今本聯合會加盟組合の名稱及組合長等を掲ぐれば次の通りである。

名稱	組合長	組合員數	設立年月
旭川酒造組合	笠原定藏	二〇	三三、九
旭川旅人宿組合	布目善藏	五一	三二、一
旭川市浴場組合	荒川春作	三八	三二、
旭川紹介營業組合	大場兵太郎	二五	三三、八
旭川市乘合馬車營業組合	田巻寅吉	一一四	三三、一二
旭川古物商組合	湊四郎	四五〇	三三、
旭川藥業組合	山本龜次郎	四三	三五、
旭川市菓子商組合	宮城爲七	一二六	三五、
上川蹄鐵工組合	木村友之助	五〇	三六、三
旭川組合銀行		六	三九、五
旭川質屋組合	伊藤默子	三〇	三八、六
旭川疊營業組合	岡田永太郎	四一	四〇、一
旭川豆腐商組合	坂部實太郎	三四	四〇、八
旭川木材業組合	瀧波勘四郎	三八	四一、一
旭川銅鐵商組合	花輪富太郎	一〇	四二、一
旭川醬油醸造組合	下村正之助	二二	四三、五
旭川鹽小賣業組合	松島幸次郎	三三	四三、一一
旭川薪炭商組合	辻清太郎	七六	四四、一〇
旭川靴業互勵組合	山谷昇藏	二八	四五、一
旭川理髮保健組合	加地寅之助	一四五	四五、一

旭川牛乳組合　高野清右左門　一三　四五、五
旭川牛馬商組合　中村興八　三五　四五、七
旭川團扇引札同業組合　小林松四郎　一八　元、一〇
旭川料理屋組合　辻廣駒吉　四〇　元、一〇
旭川印判業組合　小林松四郎　一八　二、一
旭川大工組合　日光太三郎　一一八　二、一
旭川西洋洗濯業組合　酒井信　七　三、一
旭川提燈業組合　折登鐵藏　八　三、四
旭川車橇製造業組合　妻木米次郎　一四　四、二
旭川呉服太物商組合　松浦長藏　三一　四、二
旭川料理屋同盟組合　崎松清太郎　三七　四、一一
旭川建具親友會　松本清造　五〇　五、二
旭川石炭商組合　塚本喜一郎　四　五、三

旭川乾物商組合　伏見新太郎　六二　五、
旭川左官業組合　竹田定吉　三一　六、一
旭川履物商組合　五十嵐庄次郎　六五　六、二
旭川洋服業組合　甲斐百雄　四五　六、二
旭川染物業者組合　山本清一　二二　六、三
旭川柾業組合　永野末吉　三七　六、八
旭川倉庫同盟會　上川倉庫　二　六、八
旭川銅鐵板商工組合　金子安三郎　二二　七、三
旭川小間物商組合　石田萬作二　三四　七、六
旭川肥料商組合　澤口善助　三二　七、七
旭川陶器商組合　小松源吾　六　七、一〇
旭川人力車業組合　川上末吉　四〇　七、
旭川古銅鐵容器商組合　湊友松　三三　八、一

旭川飲食店營業組合	吉田庄太郎	一六〇	八、九
旭川驛公認運送取扱人組合	弘本米太郎	一三	八、一二
旭川自轉車業組合	佐藤晉次	二八	九、一
旭川製綿業組合	旭川製綿株式會社	一九	九、二
旭川鳶職組合	中家金藏	二七	九、五
旭川荒物雜貨商組合	笠井龜太	七一	九、七
旭川木工協會	大阪芳太郎	七三	九、八
旭川火災保險協會	旭川商事株式會社	一八	九、八
旭川精米業組合	福居清兵工	三五	九、九
旭川米雜穀商組合	野島民助	二九	四〇、一
旭川驛運搬業組合	金森駒太郎	七四	一〇、三
旭川馬具商組合	牧清	一五	一〇、五
旭川土木建築請負業組合	中谷國太郎	五四	一〇、六

旭川賣藥組合	直江利英	八九	一〇、八
旭川市公設市場販賣人組合	相澤龜次郎	三四	一〇、一
旭川下駄製造業組合	品田熊吉	二五	八、九
旭川鐵工業組合	壁地長太郎	四八	一一、一
旭川寫眞同業組合	藤田寅夫	一六	一一、一
旭川市近文白米商組合	山本磯吉	一三	一一、五
旭川印刷製本業組合	山本米太	三四	一一、
旭川木工場組合		一〇	二、一〇
旭川建具指物職工會	藤澤逸兵	三三	一一、四
旭川萬年筆組合	西川梅太郎	七	一二、一
旭川時計商組合	佐藤晉次	二七	一二、一
旭川メリヤス製造同業組合	櫻川兵藏	五〇	一二、三
旭川白米商組合	山本寅吉	五七	一三、一

旭川市紙文具商組合	山田米太	一七	一二、一二
旭川市洋物商組合	石崎德次郎	二五	一三、一
旭川金融協會	旭川商事株式會社	三	一〇、八
旭川海產果實商組合	小林伊平	二〇七	一三、三
旭川蔬菜業組合	河端清助	一七	六、六
旭川履物卸商組合	坪田與三吉	五	一一、一一
旭川薪炭商事組合	辻清太郎	一七	一〇、八

產業組合

組合名			
有限責任 旭川信用組合			
有限責任 旭川木工品購賣販賣組合			
保證責任 旭川家具生產信用組合			
有限責任 旭川藥工品販賣組合			
保證責任 上川信用組合聯合會			
有限責任 東御料地信用購買販賣組合			

一〇、資源豐富にして將來ある本市の工業

發達の道程　我が旭川市は開村の當初から工業地たる色彩を帶びてゐた、開拓當時の本市が上川地方の中心に立ち日用品の供給に當つて港灣に遠く交通頗る不便の爲め、他都市より供給を受けることと困難であつた、從つて自足の途を講ずる爲め釀造精米製材等の工業は早くから興つたのである、明治二十四年笠原氏が本市に清酒釀造業を開始したのが、本市工業の濫觴である、而して本市は前數章に述べた通り天惠の好位置にあり、工業的資源に富んで居るので總ての點に於て工業發展の要素を具備してゐるのである、從つて爾來交通の發達其他各種機關の施設に伴れ商業の繁榮と相俟ち本市の工業的生命は年一年と助長せられ、各種の工業逐年勃興し隆盛の域に近付きつゝあるのである。

現在本市工業の重なるものは清酒、味噌、醤油醸造、精米、麥、製材、木工、製麺、製縄、製菓、鐵工業等で工産品の種類九十の多きに及び大正八年の好況時代には産額二千四百七十五萬餘圓に達し、其後財界不況の推移を受けた大正十三年に於ても尚二千百六十五萬餘圓の多額を示してゐる、斯の如く本市の工業は相應繁榮を示し醸造業、製材木工業、精米業の如きは全道第一であるが、比較的家内的の小工業が多く未だ大規模の機械工業が少いのは甚だ遺憾とする處である、之は既説の如く其位置に於て交通上に於て工業資源豊富なる點に於て效力の得易き點に於て、商事的勢力に於て將亦物價勞銀に於ても其他總ての要素に於て頗る工業地として、最好適地であるに不拘企業資本が甚しく不足を告げてる事に起因するものであらう、而して市民は大旭川建設の上から見て本市をより一層大工業地たらしめんことを希望し不斷の努力を續けてゐるのであるから、玆に資本の充實を圖つたならば本市工業の前途は蓋し刮目して見るべきものがあるに至らう。

今大正十三年末調査に依る使用職工五人以上の工場を擧ぐれば左の通りである。

工場種別	工場數	工場種別	工場數
酒類醸造場	一三	製材工場	八
味噌醤油醸造場	六	木管工場	一
清涼飲料水工場	一	鉛筆工場	二
製麺工場	三	家具指物工場	三
製粉工場	一	再製砂糖工場	一
製菓工場	四	硝子工場	三
精米工場	七	煉瓦工場	二
革製品工場	三	石鹸工場	一
製縄莚工場	九	畳工場	一
製紙工場	一	メリヤス工場	一
鐵工場	五	洗濯工場	一
鋲力工場	三	洋服工場	三
印刷工場	一一	雜工場	二
製綿工場	二	合計	九八

一一一

激增しつゝある工産額　本市最近八箇年の工産品産額は左表の通りで、大正六年の總産額は一千百五十四萬五千五百七十六圓であつたが、大正八年には一躍二千四百七十五萬五千六百四十六圓に達し其の發展實に目醒しいものである。九年以後は幾分低下してゐるが大正十三年に至つて二千百六十五萬七千四百十九圓となり漸次順調に向つてゐる。之を遠く明治四十一年の産額一百九萬八百九十三圓に比較する時は實に百八十八割餘の激增である。又以て本市工業の如何に發展性に富んでゐるかを窺知するに足るであらう。

明治四十一年より大正五年迄の工産品産額

明治四十一年	一、〇九〇、八九三円
四十二年	一、三八七、〇一四
四十三年	九六五、五〇五
四十四年	一、六九〇、二六六
大正元年	二、〇二四、八六四
二年	五、三八四、二三七
三年	四、五一六、七一一
四年	四、四二一、九一八
五年	五、五〇三、八三六

最近八箇年重要工産品産額　（單位圓）

品名	大正六年	大正七年	大正八年	大正九年	大正十年	大正十一年	大正十二年	大正十三年
酒精	二六三、〇四〇	七六、四四〇	一七〇、七六八	一五〇、三〇〇	五七、四四四	一〇九、八五〇	一二九、六〇〇	一二五、五〇七
清酒	一、四九六、八三〇	二、一一八、三五〇	三、七一三、六一〇	二、九二八、四一〇	二、四二〇、八六五	二、四七〇、二八三	三、〇六七、九一〇	三、六一九、〇七五
燒酎	七四、八三〇	一七七、四七七	五三一、五二〇	五四六、二〇〇	二〇五、〇六四	三七四、六四九	六九九、〇八五	八九九、四七二
ウイスキー	一六、五二〇	二七、〇二四	二五、〇〇〇	三六、一五〇	六、九九二（ウオツカ）	ウオツカ其他 一二四、九二九	三、六〇〇	三七、三七二
ポートワイン	—	—	—	—	一七、六〇〇		二〇、〇二五	八〇、八〇八
混成酒	—	—	一〇四、七三五	八五、九一〇	二、六一六	—	二五、九一六	六、五八三
味淋	—	—	—	—	九、八九〇	?	?	四四、二五八
酢	三、〇〇〇	二、七〇〇	五、四〇〇	五、九四〇	四、〇〇〇	六、一〇〇	二、二三〇	二、六四〇

醤油	三三〇、一一〇	四四九、九二〇	九五七、六六〇	七四一、〇六六	七二六、九七〇	六〇三、七九七	八四〇、一二〇	七八七、八八四
酒粕	—	—	—	—	一一〇、三三五	一一三、七一六	一〇四、九九八	一四三、三一〇
味噌	一七〇、二四〇	二三〇、〇〇〇	四二七、二〇〇	三四六、八三九	二八四、二八一	一六七、一二七	二五〇、七三四	二八三、三八七
清涼飲料水	二三、〇四九	六二、二〇〇	八四、〇〇〇	一三七、四八二	一〇八、二八三	八七、二九七	九六、〇〇〇	八二、四五八
製氷	三、七〇五	五、五〇一	一九、三二〇	一三、九〇八	二〇、一六〇	一一、〇〇〇	一〇、一五〇	八、二三五
乾饂飩	七四、二五九	八六、五九九	八三、〇四〇	九七、一〇三	五四、九三一	九五、五六〇	一五五、一二七	一九九、九九三
素麺	三、八二〇	九、六六七	四、五五〇	一一、四八九	二一、七〇〇	一五、四五四	五、三三五	三二、六五八
蕎麦	—	—	—	—	—	—	二、九二六	一、三七八
冷麦	一七、三八五	二九、三三一	一四〇、〇〇〇	八、八四七	五二、五三五	五三、一五六	一一七、四六〇	八七、六一七
製粉類	二、五四四、五一〇	一、五九二、一〇六	七一六、三一三	一三〇、九五五	一一九、九七一	四七、五三八	九二、三七三	六一、三三一
豆製菓子	一二二、五八〇	一六三、五〇〇	二二五、〇〇〇	二三七、九一八	一八七、八七五	一九一、五八〇	三一三、〇〇〇	二八九、九〇〇
其他菓子	—	—	二七五、〇〇〇	五六七、八七五	五八六、〇〇〇	六二四、三五〇	六四九、二〇〇	六一七、一〇〇
豆腐	二三、六二五	一七、九〇〇	二三、二七〇	一〇九、五〇〇	一九二、八〇三	一〇八、四〇九	一一一、七七〇	九五、二六六
精白米	三、七四四、三四四	八、七三四、〇九二	一〇、五〇三、五五二	七、六三九、六〇〇	七、八三〇、六〇〇	六、九七二、二七〇	七、四七六、〇二八	九、三九八、三四八

精麦	五九、〇五六	四三、三八〇	四二〇、〇〇〇	二八五、七四〇	三一五、〇二七	一六三、二二〇	一三五、二〇〇	一六八、九二二
米糠	八五、五四七	九九、九九三	八四、〇二八	二五、四六四	三五、二三三	三〇、六三七	九七、八四七	八四、〇九八
砕米	—	—	一〇五、〇二四	六二、六六〇	一九、九八〇	一六、六七四	一四、四六〇	五三、七九二
建築用材	八一三、〇三六	九六五、八一三	一、七二九、二五九	一、七二二、一九五	一、三一九、五八〇	一、一二五、四三九	一、二一九、二〇〇	八四〇、八七三
木工材	一七四、二九三	三九一、八三七	二三四、七五〇	一一一、七五〇	一六一、二五六	一七三、五〇〇	三四八、〇〇〇	三〇〇、三五六
下駄類	—	—	—	—	四、七二〇	四、八〇〇	—	
下駄棒	五七、七三六	二〇三、七二〇	二二五、五五六	一五二、八六八	六一、七五二	五三、三七〇	七五、六五〇	六九、一四九
三分乃至七分下駄	八二、四〇八	五二、二〇〇	一八〇、〇〇〇	一三三、五〇〇	六一、五四五	一三、〇九七	三、五〇〇	
各種木工品	五五一、八〇〇	五六九、五〇〇	一、六八二、九四八	一、九二三、一六一	一、二五八、四五六	一、一七四、九七〇	一、一五五、三八〇	一、〇八八、一〇〇
鉛筆	七、八七五	二三、五〇〇	二五、九二〇	二三、〇〇〇	五八、八六二	一三、〇〇〇	二四、〇〇〇	二四、〇〇〇
鉛筆材	七六、〇一〇	七〇、〇〇〇	二八、九八〇	五三、九〇〇	四六、八六八	九四、七四〇	九六、〇〇〇	七五、〇〇〇
木管	—	二五三、九二三	五〇八、六六〇	四七五、二三一	二二六、四三一	四〇八、五九九	一九四、八四三	一七九、〇四九
導水用木管	—	—	—	二四、〇〇〇	一一〇、〇〇〇	?	五七、九六二	二六、四七三
軸木	—	—	一四四、四〇四	一〇三、八七三	一八、三六三	?	二九、一三六	四〇、九三三

本市の主なる工産品に就て概要を記さう。

重要工産品の現況

	石	獣	屋	根	硝	皮	製	製	製	農	工	具	其	印	製	帽	竹	其
		脂	瓦	子	硝	革	製	製	製	業	械	器	他	機	製	帽	製	大
	炭	膠	及	製	子	製				用	器	具	鐵	器		子	綿	小
合計	二、九四五、六七七	一、四六六	一、六八〇、〇〇〇	一、四三六、〇〇〇	五四〇、〇〇〇	八三七、〇〇〇	一、四六〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇
他工業	一、六四〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇
細工	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇
袋	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇
服	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇
物	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇
毛	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇
脂	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇
証	四五六、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	八三六、〇〇〇	一、四三六、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇
計	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇

〔酒　精〕

本市酒精は臺灣酒精とその品質全く異り臺灣酒精が工業用として使用せらるゝに反し、本市の酒精は專ら醫藥及飲料用として需要せらるゝから此の點に於て他の追從を許さぬ特徴を有してゐる。現在の本市酒精會社は創立當時と組織の上に於て多少差異あるも合同酒精株式會社と改稱して堅實な歩調を以て進み營業成績頗る良好に今尙本市特産品として、將又本道特産品として推奬せらるゝのも無理からぬ事である。

〔清酒其他酒類〕

本市は北海の灘と稱せられ清酒の醸造全道第一位にあり且つ品質頗る優良で需要者の評判よく下手な大阪酒を越すこと數等である。

本市に於ける清酒醸造業は明治二十四年笠原氏が永山村に斯業を始めたのが嚆矢である、爾來本市の酒造業は附近農村の米産激增に伴れ而も米質の良好なること及び本市の氣候と水質の清酒醸造に適せる爲め逐年著しい發展を遂げた、現在市内の酒造戸數は十五で大正十三年の造石高は三萬七千七百六十二石に達してゐる。

而して販路は全道各地は勿論海を越えて遠く東北地方露領地方に迄及んでゐる。

原料米は從來播州、越中、越後、秋田、佐渡、朝鮮米等が多く使用せられたが近時上川米の品質向上せし爲め之を使用するもの多く而も製品頗る優良で好結果を收め現在にては全原料米の約五六割は上川米である。

而して本道に於ける清酒の需要は未だ本道の生産を以てのみ之を充すことが出來ない、年々他府縣より多額の移入を爲してゐるから、本市清酒醸造業の前途は頗る多望で未だ〳〵發展の餘地がある。

旭川酒造組合は協心戮力製品の優良に努め本市清酒醸造業發展の爲め不斷の研究を怠らない。而して年々各地に催される博覽會共進會等に本市から出品せる清酒は常に優等の賞を受け製品の優秀を保證せられてゐる。

清酒以外の酒類としては燒酎、味淋、ウヰスキー、ポートワイン等の製産がある。

燒酎は從來各清酒醸造業者が副産的に極めて僅少の製産を爲すに過ぎなかつたが大正六年以降神谷

酒造株式會社旭川工場（現在の合同酒精株式會社旭川工場）に於て馬鈴薯及び玉蜀黍を原料として燒酎の醸造に著手し旭燒酎と命名して賣出すや忽ち市場の人氣を博し其の製産高も大正十三年に於ては九千六百三十六石の多量に達してゐる、其他同社は味淋、ウヰスキー、ポートワイン等の製造をなしつゝあるが、其産額何れも相當多額に上つてゐる。

〔味噌醬油〕

味噌醬油の醸造は清酒の醸造に次で本市最古の工業で明治二十五年七月下村長藏氏が八十坪の醸造場を設け醬油百五十二石餘味噌五千八百六十九貫を産出したのが本市に於ける本醸造業の創始である。

爾後清酒醸造の發達と共に進歩著しく本道東北部の一部は勿論札幌、室蘭方面にも販路を有するに至り産額は年々激增しつゝある。

現在市内の當業者は十七戸で大正十三年の醬油産額は一萬三千九百八十一石に達し小樽、札幌に次ぐ全道第三位の大生産地である。

味噌の製産は全道第一にして年々四十萬貫を下らず道内一般の需要に應じてゐるが大正十三年の製産高は四十一萬六千七百四十五貫に達してゐる。

本道は醬油味噌の原料たる大豆小麥等の産額年を逐ふて增加し道内消費額の全部を充して猶餘りあるに醬油味噌は未だ其消費の大半を内地府縣に仰ぐ有樣である。之は氣候の關係上内地先進醸造地に比し醸造を困難ならしむるに原因するものと思はるゝが、然し當業者の孜々として倦まざる研究努力は近時一層製品の品質を向上せしめたるを以て漸次内地品を驅逐するに至るであらう。

〔製麵類〕

本市に於て産出せられる製麵類は乾饂飩、素麵、冷麥、干蕎麥の四種で現在製造工場五戸あり、本市商圏内の各地方に供給してゐるが大正十三年に於ける産額を示せば左の通りである。

乾饂飩	二二二、二一四貫	一九九、九九三円
素麵	二四、六二八	二二、六五八
冷麥	九一、二六八	八七、六一七
干蕎麥	一、四三五	一、三七八

合　計　一二二　三一二、六四六

〔製　菓〕

本市は師團所在地で且つ附近の農村が多い爲め製菓業は頗る盛んで大正十三年產額九十萬七千圓の巨額に達してゐる、本市名產として著名なものに旭豆、北海豆、浦島ビンヅ等があり本道各地に販路を有してゐる。

〔精　米〕

上川地方の米作は明治二十四年神樂村及び永山村に於て試作登熟したのが嚆矢で、地味氣候の米作に適せる本地方は爾後年を逐ふて產額の激增を來し今や全道第一位を占むるに至つたのである。而して近年栽培技術の進步と共に優良品種の改良せられたものあり、漸次品質を向上し旭川米上川米の名は全道否全國に響くに至つた、大正十一年三月より小樽米穀取引所は東旭川村及東川村の產米を標準米として採用するに至り本地方の產米は愈々其品質優良なることを事實的に證明せらるゝに至つたのである。而して我が旭川市は之等產米の大集散市場であり從つて精米業は夙に隆昌を極めてゐる。

本市の精米業は明治二十七八年の交から水車動力に依つて營まれたが爾後電動力の普及と產米の增收に伴れ漸次發展をなし、現在にては市內の精米場は大小合して百有餘戶大正十三年の精米高約二十四萬石を算し市內の需要は勿論北見天鹽十勝釧路根室方面一般に販路を有し猶札幌小樽室蘭函館方面にも旺んに移出してゐる。殊に近時旭川米の聲價市場に高まると共に內地樺太方面への移出も著しき激增を來したが詳細は「貨物集散の狀況」の項で述べた通りである。因に鐵道に依る米の發送は本市が全國第一位である。

〔製　材〕

本市は農產と共に林產物の一大市場であり從つて製材業は釀造精米業と共に早くから營まれ建築用材其他製材類の產出が多かつた、製材の樹種は蝦夷松、椴松の靑木類が最も多く七割內外を占め楢樺楢栓其他の雜木が之に次いでゐる。而して製產せられるものは建築用材、家具材、箱樽材、木管原料、下駄材、鉛筆材等重なるもので產額其他の概況次の通りである。

〔建築用材家具指物材〕

建築材家具指物材箱樽材等の製材高は年々十萬石内外で猶宗谷北見から相當移入がある。之等の約六割は市内で建築に家具指物農具其他の製産に消費せられ殘りの約四割内外のものは小樽函館室蘭及び仙臺東京大阪方面の市場に移出してゐる、殊に楢栓柳桂シコロ朴の如き本道特殊材は建築家具用として利用の途頗る汎く從て内地市場に於ける需要亦多く一層聲價を高めてゐるのである、猶楢吋板の如きは小樽東京横濱商人の手に依つて外國市場に移出せられてゐる。

〔下駄棒及五分乃至七分仕上下駄〕

下駄棒の原材は楢及び栓の二種で本市産額の殆ど全部を東京大阪の市場に送り出してゐる、本道の楢栓の下駄棒は雜木下駄と稱する安下駄の原料に消費せられ、我國需要の大半は本道産の下駄棒に依つて供給せられてゐる、近時は本市に於ても單に下駄棒の製出のみならず五分乃至七分仕上下駄の機械製造行はれ産額十萬圓内外に達し關西地方の市場に移出してゐる。

〔木管原料及水道木管〕

紡織用木管原料は從來内地の櫻、水目樫ブナ等の材質硬きものが使用せられてゐたが最近本道の樺楓材が木管原料として適當なることを發見し本店を尼崎に有し東洋第一の紡織木管會社たる大日本木管株式會社が大正六年本市近文驛前に宏大なる原料工場（現在の福村工業所）を建設し原料の製造に著手し爾來著々效を收めたが大正八年の好況時代を絶頂として漸次輸出減少となり、一時甚しき不振に陷つた然るに同社は最近水道木管の製作器械を設備し本道産椴松を原料として漑灌用水力發電用等の導水用木管の製作に從事した所、鐵管よりも低廉で然も耐久力甚だ強大なる爲め益々好評を以て迎へられ各地より續々注文を受くるに至つた。

〔鉛筆材及鉛筆〕

本道産水松（ヲンコ）は鉛筆軸として品質優良で本市に於ても軸板の製造行はれ東京地方に移出してゐる、鉛筆の製造は大正五年頃から始まり現在では專ら株式會社丸星鉛筆工場に依つて産出され本道の各地に販路を有しゐる。

〔家具指物類木工品〕

大正二三年頃に於ける本市の家具指物類の木工業は極めて微々たるもので僅に諸官廳學校會社等の木工具を製作するに止まり、一般家庭に需要せられる家具指物類は內地品の移入に待つたが原料に富み斯業發展の素質を有する本市は製材工業の發達に伴れて、木工業も亦漸く發展の端緒を開いた、北海道廳亦茲に見る所あり木工傳習所補助規程を設け之が奬勵を爲し旭川市役所亦意を注いで木工講習生を各地に派して技術者の養成に努め或は旭川木工品購買販賣組合旭川家具生產組合等を設け一意斯業の進展に盡瘁した結果技術の進歩著しく製品の優良見るべきものあり、產額頓に增加し大正八年には一躍百七十萬圓大正九年には百九十萬圓の產額を示し全道第一の木工品產地となるに至つた。

現在にては市內需要の家具類は桐材製品を除く外內地品の移入を見ず建具類の如きは全然移入品の姿を沒した、而して全產額の約七割を道內各地方に移出してゐる。

木工品の重なるものは建具、簞笥、書棚、食卓、茶棚、卓子、椅子、火鉢、其他農具、車、橇等で建具類は產額最も多い、家具類は本道濶葉樹の特色を發揮し頗る美術的で裝飾と實用を兼ね市場の人氣を博してゐる。

〔製　繩〕

從來本市需要の藁製品は米產地として原料藁の豐富なるにも拘らず、其大部分を內地製品の移入に俟つてゐたが大正元年の頃より附近農村の藁を原料として製繩業起り爾來漸次隆昌に趣き大正八年には產額十九萬二千餘圓に達したが其後財界不況と共に著しく減少し十萬圓を下りたることあるも更に大正十三年には約十六萬圓を算し職工五人以上使用の工場八を數ふるに至つた、而して價格の低廉は需要家の人氣を呼び移入品を防止すること大である。

〔鐵及鐵板製品〕

本市の鐵工業は未だ幼稚の域を脫せず精巧なる工業用機械の如きは未だ其製作を見ず、僅かに修繕又は部分的の製作を爲すに過ぎないが、農具用の器具ブラオハロー鍬、斧、鉈、鎌、籾扱器、籾蒔器、地均器等の如き製產は尠くない然し暖爐の製產に至りては全國第一であらう、現在市內の鐵工業者は約五十戶銅鐵板細工商は約三十戶である。

〔畳〕

本市に於ける疊の製造は製繩業の發達と共に著しく進展し、現在製造戸數四十一製造年額二十萬圓に達し全道第一の産地である。

主なる工業會社と工場

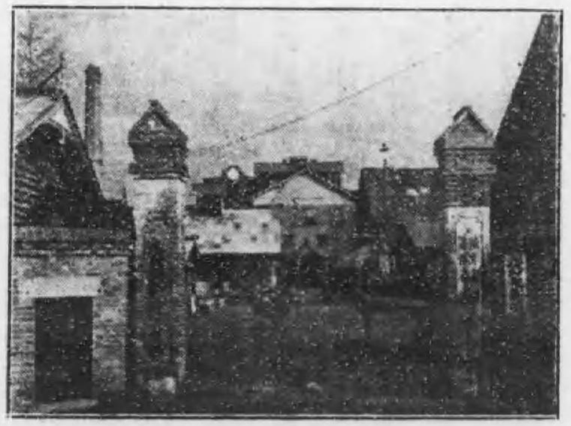
市内の重なる工業會社及工場の沿革と現狀の概要を以下順を追ふて記さう。

合同酒精株式會社旭川工場

宮下通二十丁目千九百五十五番地に在り。明治三十三年故神谷傳兵衛氏は當時國内使用の酒精は全部海外輸入品で未だ國産品のないのを慨し先づ上川地方より本道曠漠の地に馬鈴薯の耕作を奬勵し大日本酒精株式會社を創設し工場の竣工を俟ちて馬鈴薯を原料として酒精釀造に着手したが此の事業は我國創始の事業であつた爲め、原料に對する設備の不完全技術の未熟等より製産思はしからず經營日に苦境に陷り明治三十六年十月遂に解散の止むなきに至つた。神谷傳兵衛氏は深く之れを遺憾とし有志と相圖りて合資會社を組織し本社を東京に置き原料として馬鈴薯の外に玉蜀黍の作付を奬勵し設備と技術の完全を計り斯業の經營に盡瘁した。其の後時運の進歩につれて諸工業勃興し、

創立 明治三十四年
資本金壹百拾壹萬圓（全額拂込濟）
旭川市
合同酒精株式會社
電話二二一、一五七四番
工場所在地 旭川市、名寄町、士別町、倶知安町
製造品目 燒酎、味淋、酒精、ウヰスキー
ポートワイン、ウオッカ
一ヶ年製造高五萬石

酒精の需要增加し殊に關稅の改正は斯業に頗る好結果を齎し國內の需要に應ずることを得て海外酒精の移入を防遏するに至つた。又當時ウヰスキーは殆んど需要の全部を高價な輸入品に俟つ情況であつたのを痛感し、釀造に着手し國產的工業の基礎を强固ならしめた。又酒精滓の淺渣を以て養豚事業を開始し第七師團御用を蒙り繁殖千餘頭に及び成績頗る良好であつた、是れ本道養豚業の嚆矢である。四十三年に至り馬鈴薯澱粉の製造旺盛となり製造業者は淺滓の投棄場にすら困憊しつゝあるを見該滓の研究に着手し澱粉の含有を認め酒精原料として有效なることを發見し玆に廢物利用の途を啓き澱粉粕を以て酒精原料に充てた。大正四年臺灣精糖業者が糖密の殘渣を以て酒精の釀造を開始した爲め、之れが影響を受け製造激減するに至つたが同社の製品は醫藥用及飲料として缺くべからざるものであるから依然として



合同酒精株式會社旭川工場

◆本店 小樽市手宮町三丁目 電話特長電話三三六〇番、四三八八番
支店 札幌市北四條西三丁目一番地 電話四九五番、一一八四番
支店 室蘭市海岸町一番地特長電話一一四三番、四二番
出張所 小樽驛前 電話一五七番
出張所 小樽驛前 電話四七〇一番
出張所 苗穂驛前 電話一五七番
振替小樽八三九二番
電話二一五二番
電話九五三番

○合資會社 栗山組旭川支店
旭川市宮下通り八丁目左十號
鐵道省公認旭川驛運送取扱店

釀造を繼續する事を得た。大正五年に至り漸次業務を擴張し味淋白酒の釀造を開始し成績良好で旭味淋、旭白酒の名聲市場に顯著となつた。大正七年第四十議會にて燒酎原料に馬鈴薯及玉蜀黍を使用し得らるゝことに稅法が改正せられるや率先して燒酎の釀造に着手し旭燒酎として市場に出し聲價を高めつゝある。大正九年三月更に業務を擴張し資本金一千萬圓神谷酒造株式會社に組織を變更した之れ本工場の前身である。是れより益々事業振ひ次いでウオツカの釀造を研究して賣出し業務の振作に努めてゐたが、歐洲大戰後襲來した不景氣の影響を受け事業縮少するの餘儀なきに至り、大正十三年十月三十日開催の株主總會に依り資本金を百十一萬圓に減資する事に決し尙事業確立を期する爲め更に東洋酒精株式會社、北海道酒類株式會社、北海酒精株式會社の三社と合併して名稱を合同酒精株式會社と改め工場を旭川の外に名寄町、倶知安町、士別町の三箇所に置き事務所を旭川市三條通九丁目に設置して社長に神谷健一郎氏專務取締役に堀末治氏常務取締役に柳田國良氏各々就任し經營方針を確立して販路を東北一帶關東地方に及ぼし年額約百二十萬圓の製產をなしてゐる。現在同社旭川工場の規模及生產狀況は左の通りである。

敷地總坪數　二萬一千九百六十三坪

建物總坪數　二千六百五坪

製造工場	九百六十三坪
酒倉	百七十八坪
瓶詰工場	百二十坪
製罐工場	五十六坪
酒類貯藏場	二百十坪
原料倉庫	千七十八坪
鐵道專用岐線	三十鎖五十節
汽罐	五臺
汽機	一臺
發電機	一臺
釀造用機械	二十二臺

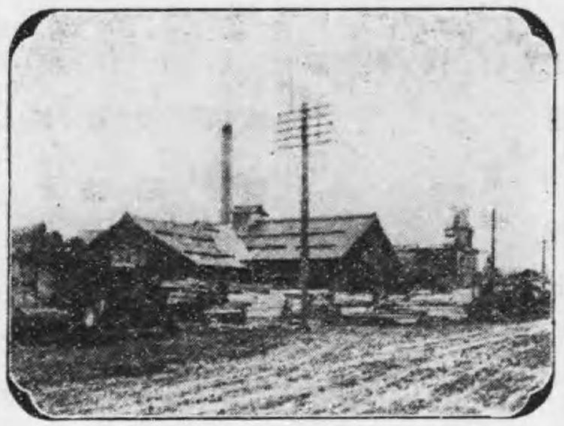
目下同工場從業者　八十餘人

製造品目

K印酒精、熊印酒精、飛行船印ウヰスキー、國產ウヰスキー、燕印ウヰスキー、旭四十五度燒酎、旭月印燒酎、旭雪印燒酎、旭花印燒酎、旭印味淋 旭印白酒、旭印本直、旭印ウヰツカー。

齋藤合資會社

同社木工場は明治四十四年九月資本金五萬圓の設立で宮下通十丁目に在る、大正十一年六月十日資本金を十五萬圓に增加し、本年二月東京に支店を設置し木材賣買及製材業土木建築請負業運送業を營んでゐる、工場敷地坪數は九百七十二坪建物坪數三百二坪を有し六十八馬力の汽機を運轉しバンドソー一臺丸鋸二臺横切鋸一臺を設備し職工其他二十五人を使用してゐる。原木は年平均三萬三千石を消費し一萬六七千石の挽材及下駄棒を製產し



旭川市内木工場の一部

北見、宗谷、富良野線より蒐め、各方面に仕向けゐる。

齋藤彌三郎氏代表社員にして尙同社は上生田原及遠輕に工場を有してゐる。

合資會社大正木工場

同工場は大正元年九月二日の創業で牛朱別にあり、資本金十萬圓敷地總坪數一萬坪建物一千百四十七坪を有し汽罐一臺百封度汽機一臺百一馬力八吋帶鋸一臺四吋ロール帶鋸一臺丸鋸三臺を備へ二十二名の職工を使用してゐる、平均一箇年の原木消費高四萬石に及び建築材家具材下駄材其他挽材類二萬石の製產を爲し、販路は道内各地大阪東京名古屋方面迄及んでゐる。

代表社員は平野與次左衞門氏で熱心に經營してゐる。

旭川木工株式會社

同社は明治四十年七月の創業で宮下通十四丁目にあり、資本金五萬圓で專ら製材賃挽を營んでゐる敷地總坪數二千四百三十坪建物坪數三百十九坪五合を有し、原動力は九十馬力の蒸汽機關である、鋸は七吋バンドソー一臺六吋バンドソー二臺中丸鋸二臺を据付け平均一箇年原木挽潰高六萬石以上

に達し三萬五千石の建築材建具材下駄材を製産しつゝある、現在職工二十五名事務員三名を使用し取締役社長に松家圓次郎氏就任してゐる。

北海木材株式會社旭川工場

曙通にあり大正九年一月に大正五年十一月創業の曙製材株式會社を買收繼承したもので本社は小樽にあり、社長は旭川市下村正之助氏であつて資本金四十萬圓である。同工場は敷地坪數千九百六十四坪七合建物四百八十四坪五合を有しモーター五十馬力を運轉し六吋帶鋸一臺丸鋸三臺横切鋸一臺を備へ年二萬五千石の原木を潰し一萬三千石の製材を産出してゐる、旭川工場長は鈴木萬策氏である。

株式會社日ノ出製材所

宮下通十二丁目にあり、大正五年十月の創業で資本金十五萬圓である、敷地坪數八百十坪建物坪數二百二十八坪七吋帶鋸一臺丸鋸二臺横切鋸一臺を有し原動力は電動機四十一馬力である、職工約二十名を使用し平均一箇年二萬三千石の原木を消費してゐる。

松岡木工場

松岡源之助氏の經營にかゝり新旭川に在り。大正十一年十二月北布工場を移して同地に新設し同時にアンタロマに分工場を設け爾來鋭意發展に努めて現在の盛を至したのである。

敷地總坪數四千五百一坪建物坪數五百五十二坪汽罐横置多管式一臺、汽機一臺、此の馬力八十馬力製材鋸としては八吋バンドソー一臺、中丸鋸一臺、少丸鋸一臺、横切鋸一臺、外に製函機二臺であつて原木消費高一箇年平均四萬石に達し製材販路としては本道、仙臺、姫路方面に亙り東京には特に販賣所を設けて之が販路擴張を圖つてゐる。

株式會社田中木工場

同會社は明治三十三年七月田中敬造氏が個人にて創立した木工場の後身で大正七年十月資本金五十萬圓の株式會社に組織を變更したものであつて、現在本市に於ける木工場の中で最も舊い歴史を有する會社である。製材の外に七分仕上下駄に專ら力を盡し道内各地及東京方面に渉つて廣汎な販路を有して居たが、折柄襲來した經濟界の大恐慌の影響を受け事業を縮少するの止むなきに至り現在

では社長田中喜代松氏以下堅實方針を旨として鋭意社運の回復に努力してゐる。

福村工業所

大日本木管株式會社近文分工場を本年二月同所の元專務取締役福村與氏が繼承して單獨經營の任に當つて居る、從業員六十數名を使用して紡績木管水道木管竝に輸出向木材を製し日を遂ふて隆盛に向ひつゝある。

以上の外木工場として主なるものを擧ぐれば、

井上木工場　宮の二十
山下木工場　新旭川
村道薄皮經木工場　同

株式會社丸星鉛筆工場

大正七年一月加藤某外四名の共同經營であつた鉛筆軸板及染料竝に鉛筆製造工場を買收して資本金十五萬圓で宮下通十六丁目に設立し丸星工業株式會社と稱したのを本年五月一日改稱したものである。現在社長は市村榮市氏であつて北見方面より軸板を仕入れ專ら鉛筆のみの製造に從事し副產物としてストーブミガキの販賣に從事してゐる、用地三百二十四坪建物百三十五坪五合で鉛筆製造機械十五臺、心製造機械五臺、電動機十二馬力半を運轉し職工二十四名を使用し一箇年の產額約三萬五千圓であつて鉛筆心の黑鉛は朝鮮より仰ぎ製品は道內關西東京方面に移出してゐる。

北海道精米株式會社旭川支店

現小樽商業會議所會頭磯野進氏を專務取締役とし創立舊き同市北海道精米株式會社の分身である、大正十二年八月湊屋合資會社を買收して內容諸設備を一新し精米及味噌醬油の釀造に當つて居る、蒸汽機罐八十馬力及電動機二十馬力を以て最新式の精米機十二臺其他機械を運轉し製品販路は道內樺太より遠く本州にも及んでゐる、現支店長は高橋理七氏である。

今井釀造株式會社

明治三十二年九月の創業で合名會社今井商店が現在の場所四條通二丁目に五百坪の釀造場を建設し醬油仕込に著手し三十四年から販賣を開始した。

大正九年資本金一百萬圓の株式會社に組織を變更してより社運隆昌に赴き、現在敷地總坪數四千二

百三十五坪、建物一千六百十五坪を有し、大正十三年には三千九百六十石の醤油を産出してゐる。

北日本釀造株式會社

明治四十三年七月創業の旭川釀造株式會社を大正八年六月併合したもので六條通十六丁目に在り、現在資本金二十七萬五千圓で、敷地坪數千六百二十坪建物坪數八百九十四坪を有してゐる。

本社は當市に於て最も早く機械力を應用したもので汽罐、汽機、電動機、水壓機、動力壓搾機、壓搾空氣攪拌機、蒸氣豆蒸器、蒸氣火當釜、醤油輸送ロータリーポンプ等完備してゐる。大正十三年には味噌十一萬貫、醤油二千石を製産し販路は本道東北部一帶及樺太に亙つてゐる。

以上の外市内に於ける主なる釀造店を擧ぐれば次の如くである。

名稱	所在地	大正十三年度釀造高	銘柄
(丸丁)下村釀造所	五ノ六左十	醤油 二、三五〇石 味噌 一〇二、五〇〇貫	亀甲別 丸星
(丸大)井内釀造所	一ノ十三左一	醤油 二、一六一石 味噌 七六、〇〇〇貫	大丸金印 大丸

酒造場 尚既述せる如く本市は米産地の中心に立ち特に水質適良なるを以て酒造最も盛に行はれそ

四季とりどりの御料理に
いつも美味しく戴かれる
品質優秀無比
★"ダイマル"最上醤油
釀造元
旭川市 ㊥ 井内醤油店
姉妹品"ダイマル"滋養味噌

帝國火災保險株式會社
共保生命保險株式會社　代理店
（不動產、動產百圓以上御一報次第參上即時御契約致シマス）

旭川市三條通六丁目右四號
山本盈藏
電話九八番

撞球用具販賣及修理
（市内娯樂場トシテ最モ完備セル當倶樂部ヘ御來遊願ヒマス）
撞球場　交玉倶樂部

の酒造店の主なるものを擧ぐれば次の如くである。

名稱	所在地	大正十三年度釀造高	銘柄
野崎酒造所	四ノ十七左九	六、九五九石	櫻印花の友、北海灘、旭成
野口合資會社酒造所	五ノ十五左十	五、三〇八	北の譽、北の一、旭養老
笠原合名會社酒造所	一ノ一	五、二〇〇	常盤泉、笠の雪、北世界、若泉
世木澤酒造所	三ノ十八左四	三、一七八	千代之澤、登鶴、登龜、銀の友
小檜山酒造所	宮ノ十七左九	二、九五〇	北の都正宗、旭高砂、旭福泉
西倉酒造所	五ノ十三右十	二、八一九	西鶴正宗、白世界、北の魁、旭譽
田中酒造所	六ノ十二右七	二、一四一	譽藤正宗、藤波、藤泉
大谷酒造所	六ノ六左十	一、八六一	旭正宗、旭自慢、北の薫
秋山酒造所	三ノ十九右一	一、八五八	全道一
荒井合名會社酒造所	三ノ四左二	一、五九三	荒磯、登波、富久一、牡丹
藤田合名會社酒造所	四ノ十六左六	一、一二〇	長生、金生、萬歲

株式會社㋕三箇商店飲料工場

事業不振の爲め解散の止むなきに至つた旭製氷サイダー株式會社の後を承けて本年三月本名稱に改めたものである。資本金百萬圓で職工二十五名を用ひ電動力にて大規模に經營せん事を計畫してゐる。現在製氷事業はやつてゐないが專ら清凉飲料水の品質改良に腐心し他品の移入防止に努めてゐて未だ實際の製造能率を擧ぐる程度には至らないが社長三箇元次郎氏を初め從業員職工に至るまで緊張して社會事業の一として努力してゐるから近き將來に於て必ず隆盛を來す事と信ずる。

北星石鹼株式會社

同社は市内曙通六番地に大正四年六月個人經營で創業したものを繼承し大正七年八月合資會社とし大正九年五月株式組織に變更したもので本道唯一の石鹼製造會社である。敷地總坪數四百八十六坪工場建物二百五十坪製造機械七臺を設備し職工十六人を使用して粉末浮石鹼を製造し其の製品年額十萬圓に及びつゝあるも今年より更に新事業として藥品部を特設し化粧品部と藥品部とに分ち化粧品部に在りては現製品の外更に北星香油、北星ポマード、北星化粧青棒石鹼の製造藥品部にありては昨年以來製造販賣せる石油乳劑の外主として農藝藥品卽ち農作物增收藥チランチン竝びに害蟲驅除藥として新しく好評を得た砒酸鉛、硫酸銅石灰等の取扱を開始し尙是等に要する原料は主として關東方面より仰ぎ製品は道内各地は勿論東北竝に東京方面に販路を有し年々增加の傾向あり尙今後樺太方面に迄販路を擴張せんと努めてゐる。

北海皮革株式會社

市内南牛朱別にあり。大正十一年一月の創業で工場敷地總坪數八百八十坪建物坪數百七十坪化製業專門工場として當市唯一のものである。現在該會社の製品竝に營業狀況は

(一) 乾　血　旭川附近農村一帶に於て水田用肥料として用ひらる、

(二) 牛　脂　工業用竝石鹼製造原料として市内石鹼工場（北星石鹼工場）へ供給す

(三) 焚　骨　骨粉肥料として内地へ移出せらる、

(四) 牛馬皮　鹽皮として名古屋東京方面へ移出せらる

此の如き狀態で現在生產額は年一萬五千圓程であるが年を逐ふて販路擴張し益々隆盛を來さんとしてゐる。社長は齋藤彌三郎氏である。

株式會社旭川製紙所

大正八年三月の創業で二條通二丁目に在る。工場敷地四百八十六坪建物二百坪を有し製紙機四臺電動機十八馬力半職工二十四人を使用して專ら漉返紙を製造してゐる。創業當時は技術の不完に依り製産微々たるものであつたが現在は一箇年の産額約三萬圓に達してゐる。原料は主として市内の紙屑を使用し製品の販路は全道に渉つてゐる。

以上に擧げし外尙主なる工場を次に掲げやう、

種別	名稱	所在地
精米麥工場	共成株式會社旭川工場	宮ノ十六
	丸ヨ新精米所	一ノ十九左六
	福居精米場	一ノ十六左八
	錦祐明精米場	宮ノ十二右一
	中島精米場	二ノ十一左八
	丸力三箇精米部	三ノ十右一
	丸米荒井精米場	二三ノ四右
	角一野島精米場	二ノ十右一
	曲イ野崎精米場	四ノ十七左九
製菓工場	中屋菓子製造工場	二ノ七左七
	犬島製菓所	四ノ三右八
	淺岡旭豆工場	二ノ十二右十
	加藤製菓場	二ノ二左十
	片山旭豆工場	三ノ八右三
	種田製菓工場	一ノ十三右八
	大串北海豆工場	五ノ八左一
豆腐工場	本宮豆腐製造場	一ノ三左五
	溝淵豆腐製造所	二線一號
	田村豆腐製造所	二線一號

印刷工場

本宮豆腐製造所　四ノ十三右六
北日本社印刷部　一ノ六
坂野印刷所　二ノ五
博文舍山田印刷所　三ノ九
大洋堂印刷所　四ノ十
秀英舍市村印刷所　四ノ七
西村商會印刷部　四ノ十四
旭川印刷所　五ノ十
小寺印刷所　一ノ九

製綿工場

吉田製綿工場　二ノ十一
旭川製綿株式會社　四ノ十二

藁製品工場

日下部製縄所　宮ノ十八
旭製縄所　二ノ二十

津田製縄工場　四ノ十七
加藤叺莚製作所　三ノ二十
鈴木製縄所　六ノ十七
土屋製縄所　二線一號
加藤製縄所　四ノ二十

畳工場

高木兵太郎　一ノ九
西村吉太郎　一ノ十三
西村幸太郎　三ノ十三
羽賀禮三郎　三ノ五
小田島庄平　二ノ十二
岡田榮太郎　四ノ九

建具指物工場

伊藤指物工場　二ノ四左二
竹田家具工作所　宮ノ十五左四

保證責任　旭川家具生産信用組合　三ノ九

硝子工場

大阪芳太郎　一ノ九
若林紋硝子工場　一ノ十二右九
丸平鈴木工場　二ノ十一
海田硝子工場　二ノ十三
新出硝子工場　中島

製麺工場

小西屋製麺工場　一ノ十四右七
三箇商店製麺工場　一ノ十九右三

製粉工場

森田製麺所　二ノ三右七
丸山製粉所　三ノ五
北島製粉所　中島右二
笹川製粉所　四ノ十八
瀧晉常　三ノ十五左十

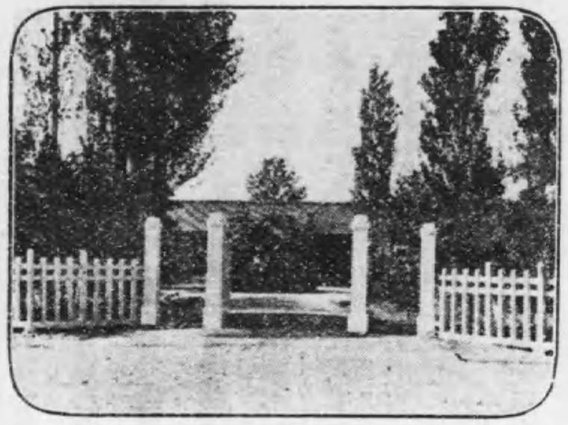
鐵工場

林石次郎　三ノ十八左十
柴田製罐工場　宮ノ十五左一
鐵道省札幌鐵道局旭川工場　宮ノ十五
坂下鐵工場　一ノ十六
上川鐵工場　二ノ十
牛田工作鎔接所　三ノ十九
曲一星佐藤鐵工場　二ノ六
高橋鐵工場　二ノ十二
伊藤ブリキ工場　二ノ十三
煖爐製作所　二ノ一

勞銀　勞働賃銀の高低は其の地方の富の大小に因つて定まるものでなく繁榮の程度富の增加力の如何に依つて定まるものであつて、之れに依つて其の土地の繁榮の遲速を律するのは決して妥當性を缺いたものとは云はれない。卽ち勞銀の騰落情況が其地方の發展狀態を知らしめる重要事項の一である

と云ひ得るのである。今本市の勞銀に就いて見るに明治三十一年初めて鐵道が開通した頃は本市は未だ草創の時代に屬し勞銀も極めて低廉なものであつたが。明治三十七年日露戰爭の影響を受け好景氣を呈した頃は諸般の企業勃興して勞銀も同時に暴騰し爾來本市の發展の目醒ましいのにつれて漸次騰貴の傾向を有して來た。然るに最近數箇年間は財界の緊縮に伴つて勞銀も亦大した變動なく、大正十三年に至つて多少下落を見たが、調査業種七十數種の中現在荷馬車夫の六圓三十錢を最高とし製綿女工の六十錢を最低として他は皆此の二者間を彷徨してゐる有樣である。本年度に入つてからは財界の好轉に伴つて業種に依つては多少勞銀の昂騰を促されたものがあるけれども取立てゝ云ふべき程の變化もない。又道内各地に比較するも大した差異なくその間に一目にして新進都市たる面影の偲ばるゝものがある。

一一、本道東北部に於ける文化の中心都市としての教育社會事業其他



廳立旭川中學校

普及せる教育　明治二十六年六月本市に戸長役場を設くると共に現在の三條通八丁目に小學校を新築し忠別尋常小學校と名稱して其年九月十七日初めて開校した。之れ現在の中央尋常高等小學校の前身にして當上川地方に於ける教育の嚆矢である。當時の校舍は建坪五十七坪半の狹隘なもので在學兒童四十六名で經費僅に六百八十八圓餘に過ぎなかつた。明治三十三年十一月に至り六條通十四丁目に四百坪の分校を設け兒童の收容をなすに至つたが爾來本市の膨脹に伴ひ入學兒童の數激增し校舍の新築增營相次で起り明治三十六年四月には北海道廳立旭川中學校の開設を見、續い

て四十四年四月には廳立高等女學校が開設せられた、斯くて中等教育の機關も漸く備り其他私立の女學校幼稚園等相次で開設せられ本市の教育界も稍々體裁を具ふるに至つた。大正四年市は女子職業學校（北都高等女學校の前身）を新設したが男子の中等教育機關は僅か中學校一で其の不足を喞ちつゝあつたが、大正十年本道中等學校十年計畫道會に議せらるゝや市民の熱烈なる運動は大正十二年度に於て師範學校を本市に農林學校を隣村永山に、大正十四年度に工業學校を本市に設置する事に決し前二校は既に開校されてゐるが財界不振と當局の緊縮方針との影響を受けて工業學校の設立は未だ見るに至らないけれども近い中に實現される事と信ずる。

大正十一年二月市は更に實情に鑑み商業學校の設立を議決し同五月より其の開校を見るに及んで本市の中等教育機關も漸く整備の域に達せんとしてゐる。

市立旭川商業學校

小學校

（大正十三年末調）

校名	創立年月日	位置	敷地坪數	校舍坪數	教員數	學級數	在學兒童數	創立以來卒業者數
中央尋常高等小學校	明治二六、九	旭川市六條九丁目	八、一〇〇坪	一、四五〇坪	三三名	三〇組	一、七四〇名	六、三七〇名
日章尋常高等小學校	同 三五、六	同六條五丁目	二、六二一	一、二四〇	三一	二九	一、八三三	三、八六七
大成尋常高等小學校	同 三五、六	同六條十四丁目	三、六〇〇	一、〇六五	三八	三七	二、三八三	三、七八二
北門尋常高等小學校	同 三四、七	同三條南一號	四、〇八七	一、二〇一	二六	二四	一、四二三	二、二八七
朝日尋常高等小學校	同 四〇、五	同五條二十一丁目	三、二四〇	一、〇五七	三八	三四	二、二四二	二、二二五
青雲尋常高等小學校	大正二、七	同曙番外地	二、七〇五	九五九	二三	二〇	一、〇七七	八六七
近文尋常小學校	同 八、四	同五線南三號	一、五〇〇	二三二	四	四	一九九	五〇
北鎭尋常高等小學校	明治四四、四	同第七師團衞戍地	七、七七四	六二四	一〇	九	二六八	五七八
計			三三、六一七	七、八三一	二〇一	一八七	一一、一七六	二〇、〇二六

中等學校

（大正十三年末調）

廳立學校

學校名	創立年月日	位置	教員數	學級數	生徒數	創立以來ノ卒業者數	校舍敷地建築總坪數
旭川中學校	明治三六・四・一	旭川市六條通十八、十二丁目	三名	三組	九六七名	一、〇四七名	三一、六〇二坪 一、四四三・二
旭川高等女學校	同四〇・四・一	同五條通四丁目	二四	一五	六四五	七九四	三、五九七、三三〇 一、一〇八・四〇七
旭川師範學校	大正一二・四・二三	同三線南一號	一八	八	三一一	—	三四、四八六 一、一九〇・一五

市立學校

學校名	創立年月日	位置	教員數	學級數	生徒數	創立以來ノ卒業者數	校舍敷地建築坪數
北都高等女學校	大正四・五・一五	旭川市八條通六丁目	三〇	一九	九〇八	一、〇五六	三、六〇〇坪 六七七・一六七
旭川商業學校	同一一・五・五	同曙通	一九	一〇	四九〇	—	七、二二〇坪 七七七・四二四
旭川商工學校	同六・四・一	旭川商業學校內	九	一五〇	—	—	—

私立學校及幼稚園

學校名	創立月日	所在地	職員數	生徒數	創立以來卒業生數
旭川實科高等女學校	明治三一・一〇・二〇	旭川市四條通十二丁目	一〇名	一三六名	六七八名
精華女學校	同四〇・一〇・一六	同四條通十一丁目	九	一二九	四五四
上川女子職業學校	同四〇・一一・四	同四條通五丁目	五	九五	二五七
旭川盲啞學校	大正一一・六・一	同八條通九丁目	四	二四	—
旭川中等夜學校	同一二・五・五	同六條通十二丁目旭川中學校內	一七	八五	—
公立北鎭尋常高等小學校附屬幼稚園	明治四四・四・一	第七師團衞戍地	一	二五	—
私立精華女學校附屬幼稚園	大正三・一〇・一	旭川市四條通十一丁目	四	九七	五九五
私立實科高等女學校附屬幼稚園	同四・一二・三	同四條通十二丁目	二	四七	二二

旭川教育會　所在地　旭市八條通九丁目

創立大年四年十一月七日　會員　三七八名

役員數　二九名

旭川少年團　所在地　旭川市

創立大正四年十一月七日　團員數　二、四五一名

役員數　六五名

圖書館

下村文庫　所在地　五條通六丁目

大正七年十月二十七日の創立にして財團法人下村育英財團の經營に係る。藏書數八千五百二十二部　閲覽人員年一萬四千三百四十八名を算す。（大正十三年末調）

下村育英財團

財團法人下村育英財團

本財團は本市實業界の功勞者故下村長藏氏が自己の全財産を擧げて社會事業に貢献するの決意に基き企畫せられ大正七年四月十五日其の設立を見るに至つたのである。本財團の事業は青年有爲の學生に學費を貸與又は給與し國家有用の材を養成すること竝に下村文庫を設け一般公衆に縱覽せしめ智識の啓發に資すること等で毎年數十名の學生を養成し一方文庫の充實に努め其の貢獻するところ實に甚大なるものがある。

大正十年十一月十七日病革まるや事績天聽に達し氏は破格を以て從六位に叙せらしが　天恩の優渥に感泣せしも束の間にて遂に六十六歳を以て長逝せられたるは眞に悼惜に堪へない所である。本財團設立以來茲に八年故人の高潔至誠なる人格は其の感化を深く後世に垂れ同財團、理事、監事亦常に献身的努力を怠らず事業は日を逐ふて進展し多くの活躍を現實に社會に與へつゝある事は邦家の爲め慶賀に堪へない次第である。

新聞雜誌の貢獻

文化の進むと共に新聞雜誌の經營も逐年盛んとなり現今市内で印刷發行されてゐるものは次の通りで四十四種の多きに及んでゐる。

題號	發行期別	題號	發行期別	題號	發行期別
旭川新聞	日刊	北日本	旬刊	拓殖魁新聞	毎月五日二十日
北海日日新聞	同	旭川時事	月三回（不定）	旭川商業新報	毎月十日二十日
中央旭	同	北海メザマシ新聞	旬刊	大旭川	不定（二回）
北都毎日新聞	同	小樽新聞號外	月三回（不定）	北海タイムス號外	不定
北海毎日新聞	同	北海旭新聞	旬刊	衛生衛火防新聞	同（毎月一回）
土木時報	月二回	題同	同	北海道	同
㊐新商店商報	月二回	旭の光	同	上川神社造營會々報	六箇月以内ニ三回
北海報知新聞	月二回	北海政教新報	同		
旭川商業會議所月報	月刊	樺太及北海道	月三回（不定）		

無保證新聞

題號	發行期別	題號	發行期別	題號	發行期別
島垣雜貨商報	毎月十八日	㊙島村商報	毎月二十日	立正	毎日曜
目小鹿商報	毎月二十日	西村商報	毎月五日	同河端商報	不定一回
㊃橋本砂糖商報	毎月十八日	可西村商報	毎月二十日	乙支店山崎商報	毎月二十五日
分石崎商報	毎月五日	目相場表	同	山田商報	毎月二十日
公秋山商報	毎月二十三日	北海釀造新聞	月三回（不定）	旭川問屋案内	毎月二十日
アサヒヤニユーズ	毎月十日	山口商報	月一回	市村商報	月一回
山谷昇藏商店商報	不定	旭川商報	日刊		

以上列記した通り地元日刊新聞としては旭川新聞、北海日々新聞、北都毎日新聞、中央旭新聞及北海毎日新聞の五つで何れも比較的其創設は新しいが、多くは各地に支局を有し共に本道中央部の警鐘として輪轉機の響と共に拓殖事業の完成と文化の向上に不斷の貢獻を捧げてゐる。猶本道に於ける二大新聞である小樽、北海タイムス二社の支局もあつて、地元新聞と共に文化の魁として貢獻して居

る。

尙右の四十五種の中で旭川商業會議所月報、旭川商業新報、㊐新商店商報其の他各商店の發行になる商報二十種を加へて計二十三種は純然たる商業關係のもので全體の五割以上を占めてゐる事は本市が交通の要衝で物資の集散に利便であり、商業的都市としての價値を證するものであると同時に近時經濟組織の變革に伴れて本市商工業者の覺醒が新販路の開拓に鋭意努力せしめてゐる事を雄辯に物語つてゐるものと思はれるのである。

社寺宗教

神社

上川神社　日清戰爭の前年明治廿六年の九月義經臺（今の宮下通五六丁目邊鐵道線路の敷設してある所）に假殿を設けて天照皇大神を奉祀したのを創始とし尋で明治三十一年七月六條通及七條通八丁目に土地四千八百六十坪を社有地に充て此の地に奉遷した、踰て明治三十六年一月二十六日創立許可せられ同年六月當時の忠別（我旭川の元名現在の宮下通二十丁目）に一町六段歩の地を旭川町より分割讓

與せられて遷し奉つたのである。之れより先き大已貴大神少彦名大神の二柱を祭神に合祀し奉り明治三十七年七月一日其の儀許可せられ同三十九年十一月二十六日村社に陞格し同四十年六月一日神饌幣帛料供進指定せられ、大正二年十一月十四日無格社近文神社を合祀しまつり、翌大正三年三月十三日社隣の地六町五段二歩を旭川町より讓與せられ同四年六月二十九日社格陞進して鄕社に列せられ大正十二年十二月十八日縣社に列せられた。

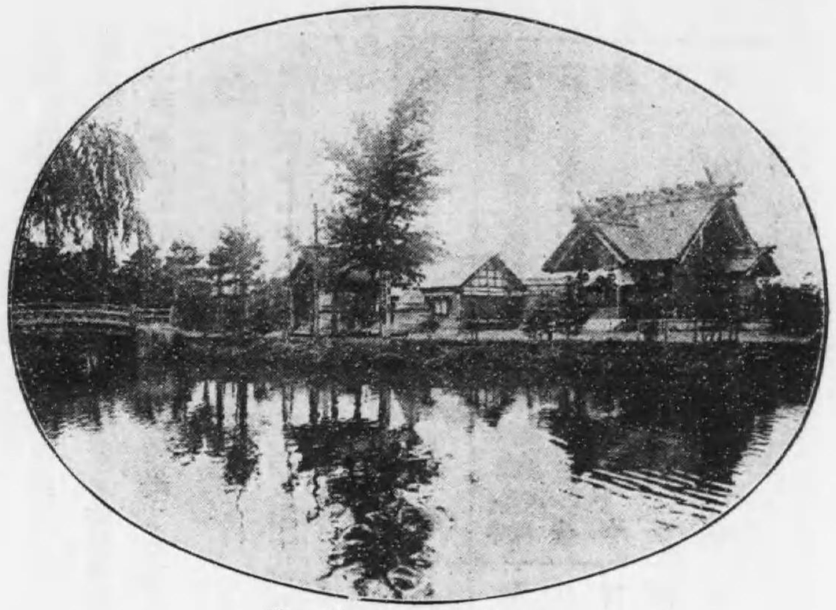
明治三十二年より例祭日を毎年七月二十一日に定め同四十三年よりは神輿旅所に渡御して、神事に仕へまつり大正九年五月十一日御離宮御豫定地たる上川御料地神樂ケ岡の内五町八段九畝十歩を神社存續期間中無償にて御貸與ありし同日神社移轉を許可せられ造營著々進み大正十二年初夏の頃總工費二十五萬圓を費して竣成を告げ、結構莊美を極めて

上川神社

社殿その他の新木の香ゆかしく新境内の明媚と相俟つて東北地方竝に本道中稀に見る神仙苑となり超えて大正十三年十二月十七日此地一帶が本社境内に編入せられたのである。

今上川神社々地としては境内を表境内奥境内の二となし奥境内には神明造を基本に置き最も時代に適應せる構造とし莊嚴な社殿及附屬建物を建設し、社殿の背後には本道特産の蝦夷松椴松等を密植し鬱邃な樹間に素木高雅な社殿を拜して森嚴自ら襟を正さしむる所とし社殿の前面は祭典に當り神幸式勢揃ひ又は氏子供奉員の集合所に當てゝゐる。尙御調度裝飾品に關しては市内夫人有志に依りて組織せられた御造營婦人協贊會が御神寶の具より殿内裝飾の品々を調達奉獻して以て千載一遇の此の大事業を協贊補翼して報本反始の誠を致し神恩の萬一にも酬ひ奉らうと早春二月の嚴寒も炎熱金をも鎔すといふ暑中をも厭はず、克く九千數百金を調達して遺憾なく調度裝飾品を奉納し得るに至つたのである。

尙大正十年十二月二十日常盤公園内の池中五百八十八坪を相し之れを頓宮地と定め千鳥ヶ島と命名し同時に起工して大正十三年初夏新築落成遷宮式を擧行され其後參拜者終繹として引きも切らざる有樣である。



上川神社頓宮

神社費豫算は創立當初六百十九圓であつたが、逐次增加して大正十四年度は約二十倍の一萬一千九百七十九圓十錢といふ數字を表はしてゐる。

施設事業としては共同崇敬の中心たる神社崇敬の精神を喚起し公共共同の風を盛んならしめ且本社神幸式に際し靜肅莊嚴に行列の所役を奉仕し又は本神社に於て多人數を要する場合に出仕せしむるため大正七年四月一日上川神社御役青年會を設立し、又同十年四月十一日上川神社附屬月次祈願講社を設け方今思想界の混亂につれ人心動搖して安定するところなきを概し且氏子の懇望に委せ建國の大義を闡明し大和民族の特性を發揚して犧牲奉公の精神を鞏固ならしめるために氏子をして常に神社に近接せしめ敬神

崇祖の國風を喚起し以て皇運の無窮と邦家の隆昌とを祈り併せて月次祭を修して家門の繁榮身心の安全を祈請する事を二大事業とし尚放恣安逸を打破し剛健なる精神を涵養する爲めに上川神社相撲青年團を設立し青年の意氣を鼓舞する事に努めてゐる。

寺院

歴史の新らしい本市は所謂名刹と稱すべきものはないが、現在寺院と稱するものは左の十箇寺である。

宗派	寺院名	本尊	所在地	建立年月
眞宗大谷派	大谷派本願寺別院旭川支院	阿彌陀如來	宮下通二丁目	明治二十六年三月
眞宗本願寺派	塵誠寺	阿彌陀如來	五條通六丁目	明治三十三年八月
淨土宗	善光寺	阿彌陀如來	四條通三丁目	明治三十四年五月
曹洞宗	大休寺	釋迦牟尼佛	四條通五丁目	明治三十四年十一月
日蓮宗	妙法寺	三法如來	六條通十九丁目	明治三十八年十月
眞宗出雲路派	本光寺	阿彌陀如來	四線一號	明治三十八年十月
眞言宗智山派	眞久寺	大日如來不動明王	五條通四丁目	明治四十年三月
眞宗出雲路派	願成寺	阿彌陀如來	五條通十九丁目	明治四十年七月
古義眞言宗高野派	金峰寺	大日如來	五條通十七丁目	明治四十二年七月
臨濟宗妙心寺派	北鎭山洪岳寺	釋迦文殊普現	七條通十九丁目	大正九年三月

近年市民の土著心が盛んになるにつれて信仰も旺盛となり宏大莊麗なる堂宇建設せらるゝに至り市民は云ふに及ばず遠く地方からの參詣人も著しく增加してゐる、殊に例年五月中旬佛教團主催で常盤公園廣場で開かれる釋尊降誕花祭の儀式の際などは參詣せんとして會場に押寄せる善男善女の數驚くばかりで常に來訪者をして驚異の目を眸らしむるものがある。

官公衙及師團

本市の官公衙及師團の所在地は次の通りである。

名稱	所在地	電話

旭川市役所	市内六條通九丁目	一〇八五二	
上川支廳	同六條通十丁目	一、〇四七	
旭川警察署	同四條通十丁目	一	
上川税務署	同五條通十一丁目	二	
旭川營林區署	同七條通十丁目	三	
旭川土木事務所	同八條通十二丁目	九二〇	
旭川測候所	同八條通十一丁目	九一〇	
北海道農產物檢査所旭川支所	同一條通九丁目	六六九	
旭川森林事務所	同七條通十丁目	一一八一	
旭川郵便局	同四條通九丁目	四二一	
一條郵便局	同一條通七丁目	六〇〇	
一條東郵便局	同一條通十一丁目	四〇	
一條西郵便局	同一條通二丁目	一〇九四	

上川支廳

三條東郵便局	同三條通十四丁目	一九九	
四條郵便局	同四條通十八丁目	一二八三	
六條郵便局	同六條通八丁目		
近文郵便局	同近文二線一號	一七二	
師團前郵便局	同師團司令部前	九〇〇	
旭川郵便局近文分室	同近文二線三號	五六一	
旭川地方裁判所	同八條通十四丁目	一〇五九	
同檢事局	同	五六一	
旭川區裁判所	同	一、〇五九	
同檢事局	同	一、〇五四	
札幌刑務所旭川支所	同八條通十三丁目	一、〇四一五	
旭川運輸事務所	同鐵道構内	一、〇六四五	
北海道建設事務所	同	一六五	

旭川保線事務所	同	一、〇四八	五
旭川驛	同	一、〇五三	四
札幌鐵道局旭川工場	同	一、〇三六	
第七師團司令部	同近文	六七七	七
第十三旅團司令部	同		七
第十四旅團司令部	同		七
第七師團經理部	同		七
同軍醫部	同		七
同獸醫部	同		七
同法官部	同		七
同兵器部	同	一〇三五	
歩兵第二十六聯隊	同	五六六	

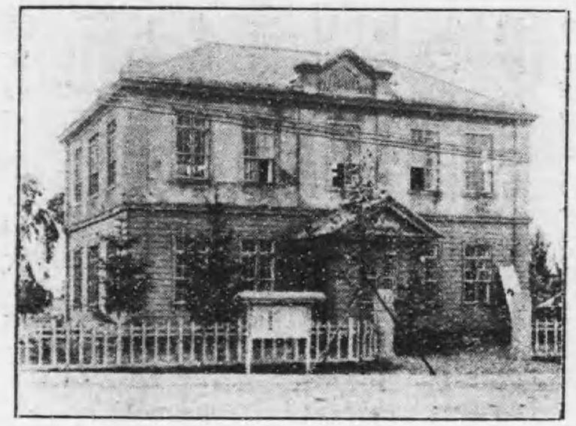
同二十七聯隊	同	五五五	
同二十八聯隊	同	五五六	
騎兵第七聯隊	同	五五九	
野砲兵第七聯隊	同	五五七	
工兵第七大隊	同	五六〇	
輕重兵第七大隊	同	五六三	
旭川聯隊區司令部	同	一〇四三	
旭川憲兵隊本部	同	五六四	
同憲兵分隊	同宮下通十一丁目	五六五	
旭川衞戍病院	同近文	五五八	
旭川衞戍監獄	同	八五三	

實績を擧げつゝある火防、衞生 本市に於ける火災豫防施設としては、明治四十三年十一月北海道廳令第百九號火災豫防組合規則に基き同四十四年四月九日町長奥田千春氏に依つて其の設置を主唱

され正式に多數の有志に諮りたるところ滿場一致其設立に贊成し之れに依り初めて火災豫防組合が成立したのに始まつてゐる。爾來一組十部の本組合は全區一組合にて統一し區域内組合員の貧富程度に依り施設に差異あるが如き弊を避け各部一齊の施設をなし一致團結の實を擧げ圓滿に施行して來たのと且經費は區町村其他の補助等を仰ぐことなく組合創立以來組合員各自の負擔により事業を經營して所謂自治的精神の發揮涵養上にも多大の效果を擧げてゐる。

尙本市消防組の活動は他に誇るべき一つである其の組織は一組であつて九部に分れ組頭一人部長九人小頭十八人消防手百八十三人で自動車ポンプ二臺、ガソリンポンプ三臺、蒸氣ポンプ四臺外手押ポンプ數臺を備へてゐる。四十一年火防專用井戸を四條通。三條通。宮下通の一部分に設けたが現在では之れを增設して市内百九箇所に設けがある。現組頭は笠原定藏氏で各部長亦市有力者を網羅し眞に献身的の努力を捧げてゐる。次に衞生施設も既に完備の域に進み衞生組合。火防衞生婦人會等あり兩者共に會員一萬一千八百九十名を有してゐて火防施設と相俟つて衞生事業に盡力してゐる。又市内中島に市立上島病院があつて傳染病患者を收容し萬事遺漏なきを期してゐる。

尙本市多年の懸案となつてゐた衞生火防參考館は昨春早々工事に着手し工費二萬數千圓を投じて八條通七丁目先に新築成り本年六月二十七日開館式を擧げられたのである。同館は旭川市衞生組合並に旭川市火災豫防組合附屬として全國に率先して設置せられたもので本邦に於てもこの種の設置は殆んど類例がなく此の點より見ても如何に本市が衞生火防方面に力を注いで居るかを知る事が出來る。



衞生參考館

法曹

〔旭川區裁判所〕

明治三十三年法律第五十八號に依り旭川區裁判所開設せられ三十四年一月十二日より四、五條通十目に開廳し、大正五年八月十五日地方裁判所の設置せらるゝと共に同所に移轉したのである。現在監督判事は下田友吉氏である。

〔旭川地方裁判所〕